

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム 報告書

大学入学者選抜における 英語試験のあり方をめぐって

平成30年(2018年)3月

東京大学 高大接続研究開発センター

はじめに

文部科学省は2017年（平成29年）7月13日に「大学入学共通テスト実施方針」を発表しました。その中で、英語については、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用する」「共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験（注：認定された民間試験）の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用することを可能とする」という方針を示しました。

この方針を受けて、国立大学協会は同年11月10日に「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度－国立大学協会の基本方針－」を発表しました。そして、その中で、「認定試験を「一般選抜」の全受験生に課すとともに、平成35年度までは、センターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課すこととし、それらの結果を入学者選抜に活用する」という方針を示しました。

現在の大学入試センター試験に代わる大学入学共通テストにおけるこのような大きな改革に対し、大学、高校、民間事業者、そしてこれから大学受験を迎える生徒やその保護者の間に、これからの英語試験は、具体的にどのようになっていくのか、それにどのように対応していけばよいのか、という問いや戸惑いの声が多く出ております。

そこで、東京大学高大接続研究開発センターでは、そのように大きな注目を集めている大学入学者選抜改革における英語試験のあり方について理解を深め、それぞれの立場における今後の方向性の検討に役立てるよう、関係各方面を代表する方々に一堂に会していただくシンポジウムを緊急で企画しました。そして、2018年（平成30年）2月10日に東京大学本郷キャンパスで、約400名の参加者を迎えて開催しました。

シンポジウムの前半でご講演いただいたのは、今回の政策遂行を中心になって担っておられる文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室の山田泰造室長、国立大学協会の方針案を作成した当時の同協会入試委員長で、高大接続システム改革会議の副座長も務められた片峰茂・前長崎大学長、そして、民間事業者として「英語の資格・検定試験とCEFRとの対応関係に関する作業部会」の委員も務めておられるベネッセコーポレーション GTEC 開発部の込山智之部長の三氏です。

シンポジウムの後半は、京都工芸繊維大学でスピーキングテストの開発に取り組んでおられ、その経験に基づいて英語試験のあり方等についてブログ「確信的に踊らされるにしても…」で積極的に発信しておられる羽藤由美教授、東京大学文学部で英米文学を担当されており、昨年末に『史上最悪の英語政策－ウソだらけの「4技能」看板』（ひつじ書房）とい

うセンセーショナルなタイトルの本を出版された阿部公彦准教授、そして、全国高等学校長協会会長で、高大接続システム改革会議の委員を務められ、現在、「英語力評価および入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会」の委員も務めておられる東京都立西高等学校の宮本久也校長の三氏にご登壇いただきました。

その後、討論の時間では、フロアの皆様からいただいたたくさんの質問を、本センターの入試企画部門の濱中淳子教授と追跡調査部門の宇佐美慧准教授が整理して、登壇者の方々に質問させていただきました。

おかげさまで、たくさんの方にご参加いただき、主会場のほかに中継を視聴していただく副会場を2室用意することになりました。そして、最後まで熱気のあるシンポジウムとなり、大学入学者選抜改革における英語試験のあり方について理解を深めるといふ、当初の目的を達成することができました。登壇者の皆様、そして参加の皆様に、あらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

この報告書では、シンポジウムでの講演および討論のすべてを、当日のスライド資料とともに収録しました。また、当日は一部しかご紹介することのできなかったフロアからの質問について、その全部を一覧表に掲載しました。さらにそれらの質問に対してご回答をお寄せくださった登壇者について、「紙上回答」としてその内容を掲載しました。

また、本センターのホームページでは、スライド資料（阿部先生については、当日の配付資料に添付した講演概要の文章も）と参考資料が閲覧できます。あわせてご活用いただければ幸いです。

<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/adm/koudai/sympo2018.02.10.html>



本センターでは、高大接続にかかわる研究開発を進めるとともに、これからも重要な事柄についてシンポジウム等を企画し、広く発信していきたいと考えています。今後とも、ご支援、ご協力のほど、どうぞよろしく申し上げます。

2018年3月
東京大学高大接続研究開発センター長
南風原朝和

**東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」**

◇日時：平成 30（2018）年 2 月 10 日(土)13:30～17:30

◇会場：東京大学本郷キャンパス工学部 2 号館 213 大講堂

◇主催：東京大学高大接続研究開発センター

～プログラム～

- 開会の挨拶 東京大学理事・副学長 石井 洋二郎
- 前半の部 「大学入学共通テストにおける英語試験について」
文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長 山田 泰造
「国立大学の入学者選抜における英語試験について」
前・長崎大学長 前・国立大学協会入試委員長 片峰 茂
「英語民間試験の立場から」
ベネッセコーポレーション GTEC 開発部長 込山 智之
- 後半の部 「スピーキングテストの開発・運営から見てきたもの」
京都工芸繊維大学教授 羽藤 由美
「スピーキング入試でスピーキング力は上がるか」
東京大学准教授 阿部 公彦
「これからの大学入学者選抜に望むこと」
東京都立西高等学校長 全国高等学校長協会会長 宮本 久也
- 討 論 — パネルディスカッション —
- 司 会： 東京大学高大接続研究開発センター長 南風原 朝和

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム 「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」

目 次

はじめに

東京大学高大接続研究開発センター長	南風原 朝和	i
-------------------	--------	-------	---

開会の挨拶

東京大学理事・副学長	石井 洋二郎	1
------------	--------	-------	---

講 演

「大学入学共通テストにおける英語試験について」

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長	山田 泰造	5
講演資料		11

「国立大学の入学者選抜における英語試験について」

前・長崎大学長 前・国立大学協会入試委員長	片峰 茂	17
講演資料		23

「英語民間試験の立場から」

ベネッセコーポレーション GTEC 開発部長	込山 智之	25
講演資料		33

「スピーキングテストの開発・運営から見てきたもの」

京都工芸繊維大学教授	羽藤 由美	41
講演資料		49

「スピーキング入試でスピーキング力は上がるか」

東京大学准教授	阿部 公彦	57
講演資料		65

「これからの大学入学者選抜に望むこと」

東京都立西高等学校長 全国高等学校長協会会長	宮本 久也	69
講演資料		75

討 論	
—パネルディスカッション—	77
フロアからの質問	101
フロアからの質問への紙上回答	119
アンケート集計結果	129

開会の挨拶

東京大学理事・副学長

石井洋二郎

南風原：

時間になりましたので、これより東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」を開始したいと思います。

私は本日の司会を務めますセンター長の南風原でございます。どうぞよろしくお願ひします。(拍手)

それでは、最初に東京大学の石井洋二郎理事・副学長に開会のあいさつをお願いしたいと思います。石井先生、よろしくお願ひします。

石井：

皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました東京大学理事・副学長の石井でございます。

本日は連休中にもかかわらず、このように多数の方にこのシンポジウムにご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

伺うところによると、大学のホームページでこのシンポジウムのアナウンスをして参加受け付けを始めたところ、わずか2日間で定員がいっぱいになったということでございます。それで、映像を中継する副会場を急きよ用意いたしまして、より多くの方にご参加いただけるようにしたということでございます。それだけこの企画に人気があるのか、それとも本日のテーマである大



学入学者選抜における英語試験がこれからどうなっていくのかということについて、それだけ不安が大きいのか、その辺はよく分かりませんが、いずれにしても大きな期待が寄せられたシンポジウムであることは間違いないと思います。

私は教育担当でございまして、東京大学では入試担当とは別なんですけれども、申し上げるまでもなく、入試と教育、これは切っても切れない密接な関係にございます。それで、教育担当の副学長会議などに出ますと、ここ数年、必ず入試改革、高大接続改革のことが話題になります。そしてよく耳にするのは、どうしてこうなっちゃってるんだらうというような疑問の声でありまして、どうも皆さん、十分に納得して事が進んでいるような感じではございません。

例えば本日のテーマ、これは英語試験でございましてけれども、これと並ぶもう1つの大きな問題として、国語の記述式問題がございまして。南風原先生も私もちょうど1年ほど前の日経新聞に50万人を対象とした記述式問題の安易な導入に反対する意見

を書いておりますので、ここでその主張を繰り返すことはいたしません。先日試行されたプレテストなどを見ましても、問題そのものはよく工夫されていると思いますが、結局、採点のしやすさという要請があるために、問われているのは一定の条件下での情報整理能力であったり、あるいは想定される正解の発見能力であって、決して本物の思考力や表現力ではないという印象を強く受けました。こうした印象は他大学の先生方も共通してお持ちのようですが、副学長会議などで話をしておりますと、なぜか矛先がこちらに向いてきて、東京大学がしっかりしてくれないと困るなどと、まるで東京大学に責任があるかのような物言いをされることもございました。とんだとばっちりを受けているということでございます。

ともあれ、各種メディアでも入試改革、高大接続改革の話題が尽きることはございません。特に最近は本日のテーマである英語試験に関する議論が盛んなように思います。私自身はフランス文学を専攻しております、長く教養課程の外国語教育を担当してまいりましたので、その意味でも本日のテーマには大変強い関心を持っております。

本日の登壇者の方々も資料の表紙にある趣旨に書かれておりますとおり、このテーマに関してまさに各方面を代表する方々で、賛成、反対を問わず私もぜひお話を伺いたいと思っていた方ばかりでございます。その意味で大変楽しみにしております。立場はいろいろ違うと思いますが、皆さん日本の教育を少しでも良くしたいという点では恐らく一致していると思います。ま

た、この入試改革で一番影響を受けるのは言うまでもなく高校生、これからの若い人たちでございます。その高校生たちがどうか無用に迷ったり、惑ったり、そしてまた無用の負担を被ったり、そういうことがないように、ぜひ高校生たちにとって実りのある改革にさせていただきたいというふうに切に願っております。

本日はいつも意見をばりばり発信する側におられる南風原先生がニュートラルな司会役に徹するというところでございます。本当にそんなことができるのか、もしかすると途中で不規則発言が飛び出すのではないかと、そんなこともちょっと期待しながらひそかに楽しみにしている次第でございます。ぜひ活発にご議論いただき、今後の具体的な検討に向けて実りあるシンポジウムにさせていただきたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。(拍手)

南風原：

石井先生、どうもありがとうございます。司会役に徹するよう、努力はしてみたいと思います。

それでは、本日の登壇者の方々をご紹介します。お名前を読み上げますので、恐縮ですがお立ちいただければと思います。

最初に、文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長の山田泰造さんです。(拍手)

次に、前・長崎大学長、前・国立大学協会入試委員長で文部科学省の高大接続システム改革会議の副座長も務められ、現在、長崎大学学長特別顧問の片峰茂先生です。(拍手)

次に、ベネッセコーポレーション GTEC

開発部長で、現在、文部科学省の英語の資格・検定試験と CEFR との対応関係に関する作業部会の委員も務めておられます込山智之さんです。(拍手)

次に、京都工芸繊維大学でスピーキングテストの開発に取り組んでおられます羽藤由美先生です。(拍手)

そして、東京大学文学部で英米文学を担当されております阿部公彦先生です。(拍手)

最後に、東京都立西高等学校長、全国高等学校長協会会長で、高大接続システム改革会議の委員を務められ、現在、文部科学省の英語力評価および入学者選抜における英語の資格・検定試験の活用促進に関する連絡協議会の委員も務めておられます宮本久也先生です。(拍手)

それでは、本日のシンポジウムの流れを簡単にご説明いたします。6 人の登壇者の方にはそれぞれ約 20 分間、ご講演をお願いしております。最初に前半として山田さん、片峰先生、込山さんの 3 名で、そこでいったん休憩を 10 分ほど挟みます。フロアの皆様には袋の中に質問用紙とアンケート用紙が入っています。水色の質問用紙が前半の 3 名の方への質問ですので、できましたら前半終了の休憩時間に集めさせていただきたいと思います。どなたへの質問ということで書いていただければと思います。

その後、後半として、羽藤先生、阿部先生、宮本先生にご講演いただき、そこでまた休憩を挟みますので、フロアの皆様、また副会場の皆様も含めてですけれども、後半部分についてのご質問を今度はピンク色の質問用紙に書いていただいて、休憩時間に回収

させていただきます。前半部分の質問をそのときに出していただくというのでも構いませんが、ご協力をお願いします。

最後に、登壇者全員で全体討論をいたします。皆様にはアンケート用紙もご記入いただきまして、退出されるときには出口でご提出いただければと思います。

なお、本日の配付資料、基本的にスライドのプリントとなっていますけれども、最後のほうに参考資料として国立大学協会や大学入試センターの最近の公表内容などを収録しておりますので、資料として適宜ご参照いただければと思います。



講演

大学入学共通テストにおける英語試験について

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室長

山田 泰造

南風原：

それでは、早速最初のご講演を山田泰造室長にお願いします。

山田：

皆様、こんにちは。ただいまご紹介をいただきました文部科学省の大学入試室長をしております山田と申します。

きょうは大変緊張しております。この会にご参加させていただくのは大変ありがたいというふうに思うのと同時に、南風原先生からのお誘いだということで、ちょっと怖いという気持ちもあって、念には念をと思って、まさか私のことをつるし上げるための会じゃないですよと念押しをさせていただいた上で、違うということだったので参加させていただいております。きょうはそういうことで安心をしてご説明を申し上げたいと思っております。

私からは高校におけます英語の課題と、センター試験、これまで大変工夫をして実施をしてきた、ただ一方で課題があるということと、今現在どういったスケジュール、内容で進んでいるのかという話、ご説明を20分という時間ではございますけれども、させていただきたいなと思えます。

まずは現状ということで、ちょっと先、飛ばしてスライド7ページの辺りからご説明を始めさせていただければと思っております。



すけれども、これは今の現行の、改訂前の学習指導要領の解説でございます。ご覧のとおり、いろんなところに4技能を総合的に育成するということをしつこいほど書いてあるというところをご覧いただきながら、何で外国語というか英語というかを学ばなきゃいけないのかということを考える必要があるのかなと思うんですけれども、やっぱり日本語と違う言語を学ぶ、日本語ではこんにちはとか、こんばんはとか、おはようとか、時間を軸にしたあいさつをするけれども、例えばアメリカだったら、英語だったら、How are you? と。あなた、調子どうですか? という始め方をする、そこから会話が始まっていくとか、言葉によって使い方が違うし、あいさつ1つとっても違うということ。またそういうことが分かることによって、かえって日本語がどういうものなのかということも分かる。例えば英語だったら、I とか You とか、一人称、二人称が結構シンプルなんですけれども、日本語には

いろいろ、俺とか僕とか私とか、いろいろバリエーションがあるなど。お互いの言葉のことも分かるし、英語なり外国語というツールを持てば、外国から見た日本ということも原文に当たって読むことができるとか、さまざまな視点を持つという意味で、外国語を学ぶこと自体が大事だと我々は思っています。中でもグローバル社会において、国際言語化をしつつある英語を学ぶということは、外国語を学ぶということが重要であるとともに、この英語というものを学ぶということも便利だし、大事だということが両方言えるのかなというふうに思っております。

その言語というのはやっぱり読むだけとか聞くだけとかいうものじゃなくて、日本語もそうですけれども、読んだり聞いたりしてその言語で情報を得て、できればその言語で考えて、アウトプットとして話したり、書いたりというその全てまとめて言語なので、それを総合的に育成、指導をしてくださいねというのが教育としてあるべき姿なのかなと思っております。

ただ一方、現状はなかなかそううまくはいってなくて、スライド 4 ページですけれども、これは文部科学省で高校 3 年生の調査をしているんですけれども、リーディング・リスニング・ライティング・スピーキングということで、上が英語力が高いほう、下が低いほうということですが、リーディングとリスニングは山が A1 ではあるんですけれども、一定程度分布をしているんですけれども、ライティングとスピーキングが極めて日本人の高校 3 年生の課題が大きい。特に 0 点のところは極めて大き

いという形で、4 技能、総合的に学ぶ必要があるんですけども、実際にはそうならないという課題があるという認識をしております。

どうしてか。次のスライドなんですけれども、いろんな原因があると思います。日本人はなかなか社交的になりにくい子もいて、外に発信するのが苦手だというそもそもの理由があるとか、いろんなことがあるんですけれども、高校の教育の側も改善の余地があるのかなというのがこの表でございます。

スライド 5 ページで、大学に進学をする率が高く、実際に在籍者数も多い普通科のところをご覧いただければと思うんですけれども、特にちょっと気になるところが 2 つあるんです。英語表現 I、II というところですが、これは話すことと書くこと自体が教育内容になっているんですけれども、それでもこのパフォーマンステスト、スピーキングとかライティングをやっている割合がまだ 6 割にしか達していない。話すこと書くこと自体が内容の教科でもそうだというのがまず 1 点。あとはコミュニケーション英語というのは文法とかも含んだ総合的な英語を学ぶ科目なんですけれども、それでも低いというのが 1 点と右肩下がりなんです。これ、コミュニケーション I というのは大体 1 年生がやっている。II というのは 2 年生がやって、III というのは大体 3 年生がやることが多いんですけれども、3 年生が一番低い。いろんな話を私もお伺いします。これは大学入試が近くなる 3 年生になると、スピーキングとかライティングとか、入試であまり使わない部分は少

なくしようというような学校側あるいは保護者からのご要請があって、やりたくてもできない。英語の4技能を3年生までばっちりと教えたいんだけど、そういうのも働いて、入試対策をせざるを得ないという声も聞きます。いろんな状況があると思えますけれども、そういう声も聞きます。我々は入試を変えて高校を変えてやろうとかそういうことを上から思っているわけではあまりなくて、むしろ入試が2技能でしかやっていない、そのことが高校で4技能を身に付けていただく足を引っ張っているということがあるのではないかと。そうだとすれば入試とまた高校現場と一緒にやって言語として4技能をしっかりと身に付けていただくためにこの段差をなくしていく、しっかりと表現する力も身に付けていただくようなことを学校現場と一緒に進めていきたいと考えています。

スライド6ページも似たようなことですが、高2でスピーチ、プレゼンテーションをしたと思いますかと。思わないという人が6割ぐらいいる。そういう人はやっぱり英語の力も話すことのテストは伸びていないという現状がありますので、何とかそれを改善したい。英語が身に付けられるべき形で身に付けていただくために、我々に何ができるかということで、これは前から、入試の改革の議論の前から出てるんですけど、スライド8ページですけども、英語力の評価とか入学者選抜における民間の活用をしようというプランを出したりして、文部科学省は前からそういった4技能の評価というものを進めようということで取り組んでいます。今、学習指導要領

の改訂の最終の局面に来ていますけれども、小中高でさらに英語力を増すような形でやろうと。今、最近4技能じゃなくて、話すことを分けたやりとりっていうのを含めた5領域って言い方をしたりしますけれども、取り組みを進めているところでございます。

そういった必要性、言語のそもそものあり方にも基づくのかもしれませんけれども、高校入試においても、もうご案内かもしれませんけれども、例えば大阪府さんでこういった英語の民間の検定試験の活用を進めていらっしゃるんですとか、東京都さんもこれからフィージビリティ調査をされるというお話のようですけれども、そういった調査を進めていくという流れは大学だけにとどまらず、高校でも進んでいると思います。

大学ですけれども、高校で学んだ学力を、今、入学者選抜試験で学力調査として測っていただいているわけですが、その流れの中で大学のほうでも推薦、AOがもちろん多いんですけども、民間の英語の資格・検定試験を活用をし始めている。きょう、東大さんのシンポジウムですけども、東大さんも推薦で複数の民間の検定試験の結果をご活用になっていると承知をしております。

なかなか個別選抜で、この後ご説明になると思いますけれども、京都工芸繊維大学さんですとか外語大さんみたいに、自分でやるっていうのはやっぱりハードルが高くてまだ進んでいない実態がありますけれども、徐々に進んでいるということと、使い方はいろいろあって、得点に換算して、CEFRの表なのか別の表を独自におつくりになっ

ていらっしゃる大学もありますけれども、そういった表をつくって得点を換算している。あるいは足切りの出願資格で使われる、あるいは普通の個別選抜に加点をする形で使っていらっしゃるとか、そういったような形でご活用になっていらっしゃる大学が多いということです。使っているのももちろん TEAP だけ単独で使っていらっしゃるような大学もございますけれども、ご覧いただくと分かるように複数の資格・検定試験を活用して使っていらっしゃるという大学も多いという状況です。これは国立大学だけですけれども、一般入試でこれだけの大学が既に英語の資格検定試験の結果をご活用になっているという状況です。

我々がやるのは、我々というか、実際には入試センターさんがやってくれるわけですが、こうやって今、使われていて、今は受験生が紙ベースで証明書を出して、それで紙で出願書類に書いて、大学はそれをいちいち封筒を開けてチェックして打ち込んで比較をしなくちゃいけないんですけれども、これをデータで直接英検さん、GTEC さんなどから成績をもらって、それを電子データでセンター試験の結果のように各大学にお渡しすれば使いやすくなりますよね、活用がしやすくなりますよねということを今回させていただく改革だというふうにご理解をいただければいいかと思っております。

次にセンターの役割。これまでももちろんセンター試験が一番人気というか、一番受験者数が多いのは英語でございますし、さまざま工夫をしてセンターの英語も取り組んできました。ただ、やっぱりこれ、スライ

ド 18 ページ、去年の問題ですけれども、アクセント、すごく重要です。アクセントが間違っていると英語って通じないので、アクセントがどこにあるかっていうことを理解させるってということが重要なんですけれども、先ほどお示したようにスピーキングの能力が、A1 の子が日本はほとんどなんですけれども、そういう子にとってはちょっと **definitely** とか **democratic** って発音する場面ってというのはなかなかないのかなというようにことだったりですか、作文能力をマークシートで見るためにいろいろと工夫をした結果、並べ替えの問題を出しているんですけれども、普通は自分の前に正しい単語が 6 つ並んで、それを並べ替えれば正しい文章になるというような場面はないので、こういうのを見ると、**earlier** と **than** は隣に来るかなとかそういった組み合わせの技術を覚えるような問題になっているというご指摘もあります。

また、リスニングを 2005 年に導入いたしました。これは各大学の実施のご苦勞も大変、今でもあると思いますけれども、それこそいろいろ課題を指摘された中で導入をしましたけれども、スライド 19 ページは GTEC さんのスコアを勝手に借りていますが、その導入前と後ではリスニングの伸びというのが、ある程度明らかに見えてくるのかなと。入試センターでリスニングをしないという状況からするという状況に変えて、入試の足引っ張りを 1 個なくすとその分その技能が伸びるというような状況があるんじゃないかなと推測をしているところでございます。これは先ほど申し上げた制度の枠組みです。

今、我々がセンターさんと一緒に何をしているかといいますと、いろんな団体が提供する試験としてご申請をいただいて、今、審査をさせていただいているところですが、これだけの団体からご申請をいただいているということです。スライド 23 ページにお戻りいただきますと、その要件をお示ししております。例えば 4 技能の全てを偏りなく、極端な偏りなく評価するということですか、学習指導要領との整合性が図られているとか CEFR との対照関係が検証されているとかいうこと。

次のページに参りまして、毎年度原則として全都道府県で複数回実施することとか、経済的に困難な受検生への検定料の配慮をしているということを公表している。障害者への対応をしているということ。これは検定ですから、4 技能になると、例えば聴覚に障害のある方がリスニングを受けるときには、ほかの人と同じようにはもちろんいけません。これは検定側になるべく配慮していただきたい部分もありますし、その成果を使う大学のほうにもぜひご配慮をいただきたいと思っております。

こういったものを活用させていただきながら、申請をいただいて、団体の審査をして、今年度末、3 月末までにはどの団体の試験結果をセンターが各大学に提供するかどうかという結果をお知らせできるかなというふうになっております。

スライド 27 ページはプレテストの実施ということで、センターが各民間の試験の結果を平成 32 年度、2020 年度から各大学にデータでおつなぎすると並行して、今までやっていたセンター試験の英語のリー

ディング、リスニングの後継の試験を少なくとも 4 年は並行して実施をさせていただくということになっておりまして、そのプレテストも来週から実施をするということになっております。各県にご協力をいただいております。ありがとうございます。これは今年 11 月にもう一度プレテストを検証しますということです。

最後にでございますけれども、ご紹介を申し上げたいのは新しい経済政策パッケージについてということで、スライド 31 ページでございます。消費税を財源にして、高等教育の無償化をしようというパッケージを大卒昨年 12 月に閣議決定をいたしました。柱は授業料減免ということと、給付型奨学金という 2 本の柱になっています。その給付型の中で必要な生活費も賄えるように措置を講ずるということで、※8 のところ、その内容として生活費というものの中に、大学等の受験料を計上するというふうになっています。これ、具体的には今年の夏までに具体を決めるということになっておりますけれども、現在この中に大学の受験料、センター試験の受験料とともに英語の検定料についても含めることができるように調整をしているということでございます。我々のほうも奨学金、就学支援金ですとか、奨学給付金ですとか、さまざま高校生の経済的なご負担を減らすための施策を実施しているところでございますけれども、こういった受験料についてもこういった形で、もらうのは大学に入ってからですけれども、今、いろいろつなぎ融資がありますので、高 3 のときから予約をして、つなぎ融資をお借りして大学に入ったときにももらえるとい

うスキームになると思いますけれども、なるべくできること、負担軽減のためできることを我々もしていきたいなというふうに考えております。

時間が参りましたので、私からの説明は以上とさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

南風原：

山田室長、どうもありがとうございました。

大学入学共通テストにおける英語試験について

平成30年2月10日

文 部 科 学 省
高 等 教 育 局 大 学 入 試 室
山 田 泰 造



<目次>

1. 高校生における英語の課題と資格・検定試験の活用
2. センター試験（英語）の果たしてきた役割と課題
3. 大学入学共通テストにおける英語評価

1. 高校生における英語の課題と資格・検定試験の活用

日本の高校生の英語の課題①

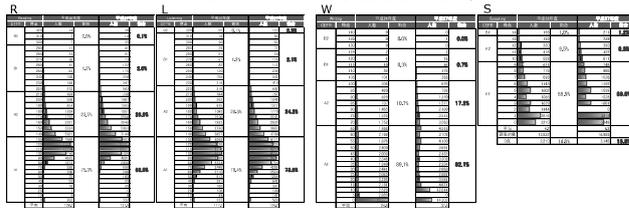
平成27年度 英語力調査結果（高校3年生）の速報（概要）

日本の高校生の英語力は、スピーキングとライティングにおいて極めて課題が大きい。

A2レベルに達していない高校生の割合

・リーディング：68% ・リスニング：74% ・ライティング：82% ・スピーキング：89%

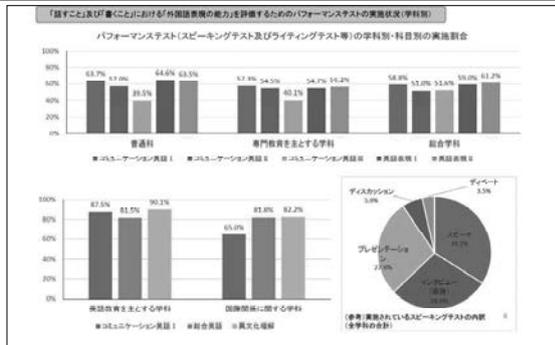
ライティング、スピーキングについては、0点の高校生も極めて多い。



※平成27年度のスコアは、平成26年度と共通の尺度にするため「等化」を行っている。（等化とは、同一の仕様に基づいて開発される問題項目の内容及ば異なる複数のテスト間で、どのテストを受験しても結果が同じ尺度上の得点で表現され、異なるテストの受験者間で得点を比較することを可能にする統計処理を指す）
 なお、「書くこと」「話すこと」において、人数が表れていない得点帯があるが、これらは等化の結果、得点が小数点以下を含んだ状態で算出され、度数分布を作成した際に出現しない得点帯があるためである。

日本の高校生の英語の課題②

「話すこと」及び「書くこと」における「外国語表現の能力」の評価が十分行われていない。



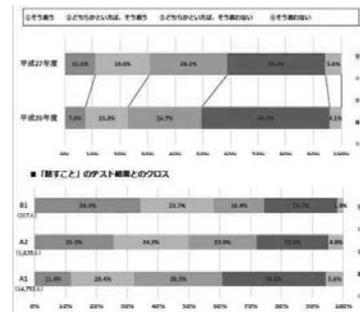
出典：文部科学省 平成28年度 英語教育実施状況調査（高等学校）

日本の高校生の英語の課題③

「話すこと」のスコアが高い生徒程、英語のスピーチやプレゼンテーションを経験した生徒の割合が高い。

【生徒】 今後の4技能の言語活動に対する意識【生徒】

Q. 高校2年生までの英語の授業では、英語のスピーチやプレゼンテーションをしていいと思いますか。



（出典）平成27年度 英語力調査結果（2016年）

【調査対象】
 ・全国の公立・私立高等学校100校
 高校3年生約1,8万人
 【調査時期】
 ・2016年6月～7月

日本の高校生の英語の課題 ④

現行の高等学校学習指導要領は、4技能を総合的に育成することを改善の基本方針として策定された。次期高等学校学習指導要領は、CEFRを踏まえ改訂。

高等学校学習指導要領解説（平成21年12月 文部科学省）

改善の基本方針

- 外国語科については、その課題を踏まえ、「聞くこと」や「読むこと」を通して得た知識等について、自らの体験や考えなどと結び付けながら活用し、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信することが可能となるよう、中学校・高等学校を通じて、4技能を総合的に育成する指導を充実するよう改善を図る。
- 指導に用いられる教材の題材や内容については、外国語学習に対する関心や意欲を高め、外国語で発信しうる内容を図る等の観点を踏まえ、4技能を総合的に育成するための活動に資するものとなるよう改善を図る。
- 「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」及び「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善を図る。また、コミュニケーションを内容的に充実したものとすることができるよう、指導すべき語数を充実する。
- 高等学校においては、中学校における学習の基礎の上に、聞いたことや読んだことを踏まえ、コミュニケーションの中で自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようになることを目指し、「聞くこと」や「読むこと」と、「話すこと」や「書くこと」とを結び付け、互つの領域の言語活動を統合を図る。
- 高等学校において、中学校における学習が十分でない生徒に対応するため、身近な場面や題材に関する内容を扱い、中学校で学習した事項の定着を図り、高等学校における学習に円滑に移行させるために必要な改善を図る。

日本の高校生の英語の課題 ⑤

文部科学省では、さらに平成27年6月に「生徒の英語力向上推進プラン」を策定し、4技能の評価を行う民間の資格・検定試験の活用を推進。

改革のコンセプト

- 生徒の教育な英語力向上を促し、国及び県で明確な達成目標（GOAL）を設定
- その達成状況を毎年公表して、計画的に改善を推進

○その達成状況を毎年公表して、計画的に改善を推進

- 1 生徒の英語力に係る国の目標を踏まえ、都道府県ごとの目標設定・公表(2015年度末を目途)を要請
→ 都道府県ごとに、目標を達成するための「英語教育改善プラン」を策定・フォローアップ・改善のサイクルを構築
- 2 「英語教育実施状況調査」に基づく都道府県別の生徒の英語力の結果の公表を2016年度から実施
- 3 国が率先に行う。より質的な生徒の英語力調査による把握・分析
→ 国として義務教育段階の中学生の英語4技能を測定する「全国初級学力調査」を策定・実施
各学級における指導改善を促すとともに、国及び都道府県が主体として英語教育を改善し、生徒の英語力向上を図るためのPDIにAIサイクルを構築
※「全国初級学力調査」(27年1月に実施)、「高等学校初級学力テスト(初級)」(大学入学共通テスト(仮称))において英語に活用
- 4 英語力評価及び入学選抜における英語4技能を測定する民間の資格・検定試験の活用を、引き続き促進

小・中・高を通じた改革のための取組

○4技能を重視した授業・入試改革
・学習指導要領の周知徹底・改善指導、及び次期学習指導要領改訂を通して、英語4技能によるコミュニケーション能力を確実に養う
・高大接続改革実行プランに基づく高校教育や入試の一体的な改革による英語4技能の重視
※1. 教員等の研修やオンライン研修

○教員の英語力・指導力向上
・小・中・高の英語を担当する全教員の研修を実施（「英語教育推進リーダー」の養成）
・教育現場のための研修用教材の開発・提供
・教員の改善（大学の教育現場におけるコアスキル開発、改善）
・モジュール型研修（ICT教材開発・整備）
・経路の異動・検定試験を活用し、同じ道の教員の英語力の達成状況を定期的に検証
・4技能を重視した指導の充実
・AIによる外国語学習の活用

国の目標 GOAL2020 ～次期学習指導要領を見越した5年間の取組～

外国語教育の抜本的強化のイメージ

現状

- ・学年が上がるにつれて教科に課題
- ・学校種類の差が十分

改善・充実

「何ができるようになるか」という観点から、国際基準(CEFR)を参考に、小・中・高等学校を通じて「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」(4技能)の「書くこと」別の目標を設定

高等学校

- ・5領域を総合的に扱う科目群として「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲ」を、費精力を高める科目群として「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を設定
- ・授業は外国語で行うことを基本とする(前訂改訂より) 年間140単位時間(週4コマ程度)

中学校

- ・互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な活動を重視
- ・具体的な課題を設定するなどして、学習した語彙、表現などを実際に応用する言語活動を充実
- ・授業は外国語で行うことを基本とする

小学校

- ・O5・6年(義務型) 年間70単位時間(週2コマ程度)
 - ・段階的に「読むこと」「書くこと」を加える
 - ・指導の系統性を確保 (15分程度の短時間学習の活用等を含めた弾力的な時間配成も可能)
- ・O3・4年(活動型) 年間35単位時間(週1コマ程度)
 - ・「聞くこと」「話すこと(やり取り・発表)」を中心とする
 - ・外国語に慣れ親しませ、学習への動機付けを高める

※CEFR：欧州評議会（Council of Europe）が定む、外国語学習や教育のためのヨーロッパ共通参照枠。上・中・下のレベルは日本語と対照的に設定された目安である。

高校入試における英語資格・検定試験の活用

高校入試においても英語の資格・検定試験活用が進む

＜事例①（大阪府）＞

- ・学習指導要領を踏まえ、4技能検査へ移行する必要
- ・4技能を直接的に、かつ適切に測定する方法は困難
- ・29年度選抜から全府立高校を対象に外部検定試験を活用した4技能検査方法を導入
- ・従来通りの英語の学力検査は引き続き実施

※検定試験のスコアを大阪府教育委員会が定める換算表に基づいて換算した得点と、学力検査の英語の得点のどちらか高い方を活用。

	TOEFL iBT	IELTS	英検	読み替え率
※大阪府立高校 入学者選抜教科 [英語]	80点	6	準1級	100%
	50点	5	(対応無し)	90%
	40点	5	2級	80%

〔参考〕大阪府立高等学校入学者選抜における英語資格(外部検定)の活用について(平成25年9月)

＜事例②（東京都）＞

- ・学習指導要領を踏まえ、4技能検査へ移行する必要
- ・「話すこと」の検査は、実施時間や評価者の確保、実施場所の確保等から一貫実施は困難
- ・特に「話すこと」の検査の実施に当たって、外部検定試験の知見を活用する方法について今後フィジビリティ調査を実施するなどの準備期間を確保

〔参考〕東京都立高等学校入学者選抜英語検査改善検討委員会報告書(平成29年12月)

大学入学者選抜における民間の英語資格・検定試験の活用状況

平成27年度大学入学者選抜において民間の英語資格・検定試験を活用している大学は、36.3% (271/746校)

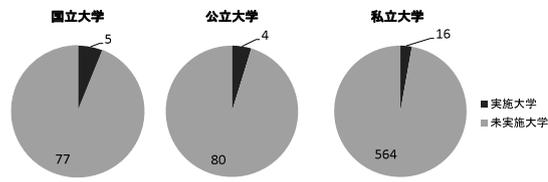
	純計	推薦	AO	一般
国立	23 (28.0%)	14 (17.1%)	12 (14.6%)	6 (7.3%)
公立	19 (22.6%)	14 (16.7%)	9 (10.7%)	1 (1.2%)
私立	229 (39.5%)	178 (30.7%)	123 (21.2%)	37 (6.4%)
計	271 (36.3%)	206 (27.6%)	144 (19.3%)	44 (5.9%)

上段(単位/校) 下段の()は国立8校、公立8校、私立56校、計746校に対する割合

文部科学省大学入試室調べ

個別選抜において英語のスピーキングの技能を評価している大学

平成27年度大学入学者選抜において、英語のスピーキングの技能を評価している大学は、3.4% (25/746校)



	大学数	選抜を実施する大学における割合
国立大学	5	6.1%
公立大学	4	4.8%
私立大学	16	2.8%
合計	25	3.4%

文部科学省大学入試室調べ

一般入試における外部検定試験を利用状況(国公私全体)

すでに多くの大学で、英語の資格・検定試験活用が進む

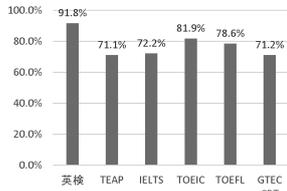
※一般入試における外部検定試験の利用大学は50校(2016)→110校(2017)→2018はさらに増加見込み

1. 一般入試における外部検定の利用方法(2017年度入試)



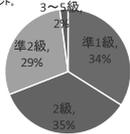
2. 一般入試における各検定の利用状況(2017年度入試)

※一般入試で外部検定試験を利用している大学全体を100とする。
※原則、学科単位で集計。



3. 一般入試で求められる外部検定のレベル(2017年度入試)

※各検定のスコアを英検級に換算。
※検定試験の級・スコアに応じて段階的に優遇を行う場合、もっともやさしいレベルのみをカウント。



参考: 旺文社「全国大学受験年鑑(1) 受験時代2017 11月臨時増刊」 13

一般入試において外部検定試験を利用する国立大学一覧(2018年入試(予定))

国立大学ですでに16大学65学部(前後期含む)以上一般入試において、外部検定試験が利用

大学名	学部名	学科等	日程	利用方法	大学名	学部名	学科等	日程	利用方法
秋田	国際資源		前・後期	得点換算	大阪教育	教育	学校教育(中学校実習教育、中等教育実習教育)、教育実践(2年・3年・4年)・コミュニケーション	前期	加算
茨城	工(機械、フ列ックス)		前・後期	得点換算	山口	国際総合科学		前・後期	加算
埼玉	経済・商		前期	得点換算	九州	共創		前期	得点換算
千葉	国際教育		前期	得点換算	九州工業	工		前・後期	加算
	教育	中学(英語科)	前期	加算		情報工		前・後期	得点換算
	看護	歯科	前期	加算	佐賀	教育	学校教育(小学校実習教育、中学校実習教育)	前・後期	得点換算
東京海洋	海洋資源管理、海洋生命科学		前・後期	出願資格		芸術地域デザイン学	経営学、福祉学	前・後期	得点換算
東京藝術	音楽	音楽、美術、音楽、作編、音楽	前期	得点換算	長崎	多文化社会	多文化社会(国際社会論、社会論、社会文化、英語コミュニケーション)	前期	得点換算
金沢	人間社会	人文、経済、学際教育、国際論、国際言語学	前期	得点換算	宮崎	地質資源創成		前期	得点換算
	医療保健	保健学類	前期	得点換算		工		前期	加算
	人間社会	人文、地域連携、国際言語学	後期	得点換算	鹿児島	出立、教育、経済、法、工、農、共同研究、芸術		前期	得点換算
	文系一括		後期	得点換算		法文	法社会学、人文社会学	後期	得点換算
	理工	数理科、物理科、知能工学類の各学類	後期	得点換算		教育	学校教育(初等教育、中等教育実習教育、社会、特別支援教育)	後期	得点換算
	医療保健	保健学類(看護学、保健師教育学、保健福祉教育学)	後期	得点換算		理系一括	出立、経済、法、共同研究、教育	後期	得点換算
	理系一括		後期	得点換算					

参考: 旺文社「全国大学受験年鑑(1) 受験時代2017 11月臨時増刊」 14

2. センター試験(英語)の果たしてきた役割と課題

大学入学者選抜における英語4技能評価の推進

<平成30年度大学入学者選抜実施要項(平成29年6月)(抄)>

第6 学力検査等

1 個別学力検査

- 各大学が実施する学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう十分留意しつつ、適切な方法により実施する。
- 個別学力検査を実施する教科・科目は、学習指導要領に定められている教科・科目の中から、高等学校教育に及ぼす影響にも配慮しつつ、大学・学部等の目的、特色、専門分野等の特性に応じ、各大学が定める。
- 各大学が個別学力検査の実施科目を定めるに当たっては、入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)に基づき、学習指導要領の趣旨も踏まえつつ、できるだけ多くの科目を出題し、選択回答させるよう配慮することが望ましい。

現行、高等学校学習指導要領では、「聞く」「読む」「話す」「書く」の4技能を総合的に育成することが改善の基本方針。【スライド7参照】

また、次期学習指導要領では、小・中・高で一貫した目標を実現するため、外国語の能力を総合的に評価するCEFR等を参考に、段階的な「国の指標形式の目標」を設定するとともに、統合的な言語活動を一層重視。

◎ 高等学校学習指導要領に準拠し、英語4技能を総合的に評価することを踏まえ、大学入学者選抜においてどのように「話す」「書く」を評価するか。

現在のセンター試験の果たしてきた役割と課題

i) 果たしてきた役割

- センター試験受験者の98.7%という最も多い受験者を集めている科目であり、平成18年度試験からリスニングを実施するなど、高校段階での英語教育の成果を適切に評価しようとする工夫が重ねられてきた。

ii) 課題

- リーディング、リスニングの2技能しか評価できていない。
- 4技能を問うべく工夫がなされてきたが、発音・アクセントを問う問題や、会話文において単語を並びかえる問題など、受験生はスピーキング・ライティングの能力を間接的に問う問題への対応が必要となり、4技能の修得が進んでいない。
- 高得点層の識別性が十分確保できていないことがある。

(例: H28試験: 英語(リーディングのみ) 200人中149名以上の受験者が約50万人中約20万人(英語は約7万人))

⇒4技能を直接評価することが必要

英語のセンター試験の課題 ②

これまでのセンター試験においても、4技能を問うべく工夫がなされてきたが、発音・アクセントをペーパーで問う問題や、会話文における単語の組合せを問う問題など、スピーキング・ライティングの能力を間接的に問う問題には自ずと限界があり、スピーキング・ライティング自体の評価が不可欠。

【今年1月に実施されたセンター英語試験から】

第1問 B 次の問(問1~4)において、第一アクセント(第一強勢)の位置がほかの三つと異なるものを、それぞれ下の①~④のうちから一つずつ選べ。

問4 ① definitely ② democratic ③ independence ④ resolution

英語の発音においてアクセントは重要であるが、ペーパーテストで問うことにより、スピーキング能力ではなくアクセントの場所に関する記憶を問う問題となってしまう。後このように、発音やアクセントの正確さをペーパーテストで問う問題は、スピーキング力ではなく記憶の量を問う「間接問題」であり、こうした問題の正答率と実際の話す力との間には相関がないとして近年批判もあつたことから、その是非について議論がなされているところ。

第2問

B 次の問(問1~3)において、それぞれ下の①~⑥の語句を並べ替えて空所を補い、最も適当な分を完成させよ。回答は ① ~ ⑥ に入れるものの番号のみを答えよ。

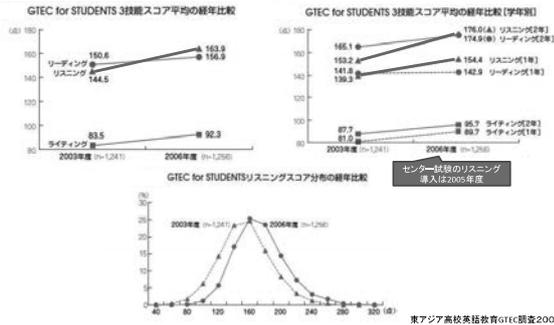
問3 Rita: Daniel and I have to go home now.
Father: Oh, _____ usual?
I thought you were going to stay for dinner.

① are ② earlier ③ how come ④ leaving ⑤ than ⑥ you

スピーキングの能力を間接的に評価するため、並べ替えの問題が出題されているが、実際に英語で「話す」「書く」際に、与えられた単語を並べ替える力は求められない。問で与えられた「usual?」の語句をヒントに、その直前が「then」で、その前が「earlier」ではないかと通常の会話の流れとは逆に後ろから考え始め、回答を導く受験生がいると思われる。

大学入試センター試験リスニング導入の波及効果

- ◆2003年度調査および2006年度調査におけるGTEC for STUDENTS（高校生）の各技能スコアの平均の推移である。リーディングのスコアは若干上がっているもののほぼ横ばいで、大きな変化がみられない（150.6点→156.9点）それに対して、リスニングでは20点近く上昇（144.5点→163.9点）
- ◆中学校での新課程への移行やセンター試験でのリスニングテストの導入などを受けて、音声重視の指導が増え、リスニング能力の底上げにつながった可能性。



東アジア高校英語教育GTEC調査2006より

3. 大学入学共通テストにおける英語評価

英語4技能評価の導入について①

平成29年7月13日実施方針概観

外部検定試験の活用

- 高等学校学習指導要領における英語教育の抜本改革を踏まえ、大学入学者選抜においても、4技能を適切に評価するため、共通テストの枠組みにおいて、現に民間事業者等により広く実施され、一定の評価が定着している資格・検定試験を活用。

具体的な活用方法

- ① 検定試験のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定、その試験結果及びCEFRの段階別成績表示を要請のあった大学に提供。

学習指導要領との整合性、実施場所の確保、セキュリティや信頼性等を担保するとともに、認定試験の実施団体に対し、検定料の負担軽減策や障害のある受検生のための環境整備策を講ずることなどを促す。

また、認定試験を活用する場合は、受検者の負担に配慮して、できるだけ多くの種類の認定試験を対象として活用するよう各大学に求める。

英語4技能評価の導入について②

平成29年7月13日実施方針概観

- ② 国は、活用の参考となるよう、CEFRの段階別成績表示による対照表を提示。
- ③ センターは、受検者の負担、高等学校教育への影響等を考慮し高校3年の4月～12月の間の2回までの試験結果を各大学に送付。

- ④ 共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用することを可能とする。

- ⑤ 各大学は、認定試験の活用や、個別試験により英語4技能を総合的に評価するよう努める。

- なお、認定試験では対応できない受検者への対応のための共通テストの英語試験実施については、別途検討する。

大学入試英語成績提供システムへの参加要件①

◆大学入試英語成績提供システム参加要件（平成29年大学入試センター裁定）より抜粋

- 第1 趣旨
大学入試英語成績提供システム(以下「成績提供システム」という。)への参加に必要な要件については、「大学入試英語成績提供システム」運営要領(平成29年理事長裁定)に定めるもののほか、この要件に定めるところによる。(中略)
- 第4 資格・検定試験に関する要件
 - 1 日本国内において、原則として、申請日の時点において2年以上、英語に係る資格・検定試験が広く実施されている実績があること。
ただし、既に英語に係る資格・検定試験の実績がある実施主体において同一試験と認められる範囲での試験内容の変更を行う場合や、向実施主体において新たな試験を開発する場合には、独立行政法人大学入試センター-大学入試英語成績提供システム運営委員会(以下「運営委員会」という。)の審議により、基礎となる資格・検定試験で得られた知見の活かされ方を勘案し、受験・活用実績にかかわらず参加を可能とする場合がある。
 - 2 日本国内において広く高校生の受検実績や大学入学者選抜に活用された実績があること。
ただし、既に英語に係る資格の実績がある実施主体において同一試験と認められる範囲内での試験内容の変更を行う場合や、向実施主体において新たな試験を開発する場合には、運営委員会の審議により、基礎となる資格で得られた知見の活かされ方を勘案し、受験・活用実績にかかわらず参加を可能とする場合がある。
 - 3 1回の試験で英語4技能の全てを各様な偏りなく評価するものであること。
また、技能別の成績をセンターに提供することが可能であること。
ただし、4技能を均等な偏りなく評価している試験であって、テスト設計上、4技能別の成績を示すことができない場合には、4技能別の成績表示し最も近い方法で成績を提供することが可能であること。
 - 4 高等学校学習指導要領との整合性が図られていること。
 - 5 CEFR(Common European Framework of Reference for Languages)(ヨーロッパ言語共通参照枠)との対応関係並びにその根拠となる検証方法及び研究成果等が公表されており、実施主体においてその対応関係を検証していく体制が整っていること。

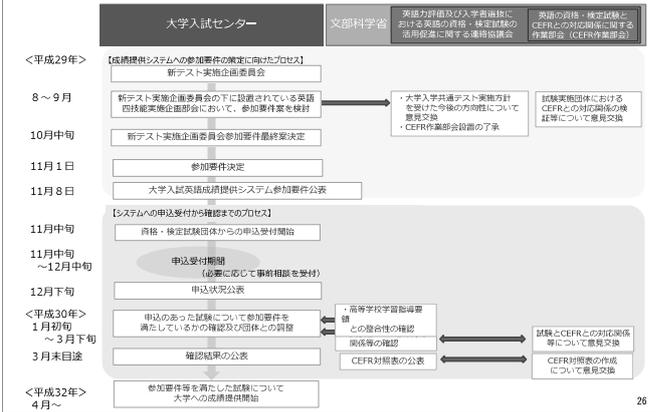
大学入試英語成績提供システムへの参加要件②

- 第4 資格・検定試験に関する要件(続き)
 - 6 毎年度4月から12月までの間に複数回の試験を実施すること。
当該複数回の試験は、原則として、毎年度全都道府県で実施すること。
ただし、当分の間、受検希望者が著しく少ない地域では、近隣の複数県を併せた地域で合同実施することができる。この場合であっても、全国各地の計10か所以上で複数回の試験を実施していることを要するものとする。その試験に申し込んだ受検希望者の受検機会の確保に努めること。
 - 7 経済的に困難な受検生への検定料の配慮など、適切な検定料であることを公表していること。
 - 8 障害のある受検生への合理的配慮をしていることを公表していること。
 - 9 試験監督及び採点の公平性・公正性を確保するための方策を公表していること。その際、次の(1)及び(2)の要件を満たしていること。
 - (1) 会場ごとの実施責任者及び各会場ごとの試験監督責任者が、受検生の所属高等学校等の教職員でないこと。それ以外の試験の実施に協力する者としては、同教職員の参画を認めるが、この場合には研修の受講や誓約書の提出を要すること。
 - (2) 受検生の所属高等学校等の教職員が採点に関わらないこと。
 - 10 採点の質を確保するための方策を公表していること。
 - 11 不正、情報漏洩等の防止策及び不測の事態発生時の対応方策を公表していること。
- (中略)
- 第6 その他
 - 1 成績提供システムへの参加に当たっては、別に定める協定書等遵守すること。
 - 2 本参加要件及び別に定める協定書等に拘束内容が満たされなくなった場合には、改善案を速やかに理事長に提出するとともに、これに係る状況を公表すること。
理事長は、改善状況の確認を行い、改善されない場合は必要に応じて当該試験についてシステムへの参加を取り消すものとする。改善状況の確認等必要な手続きについては、別に定める。

大学入試英語成績提供システムへの参加の申込のあった資格・検定試験一覧

Table with columns for '資格・検定試験実施主体名' and '資格・検定試験名'. Lists various English proficiency tests like Cambridge Assessment English, TOEFL iBT, IELTS, etc.

大学入試英語成績提供システムに係るスケジュール (予定)



平成30年2月試行調査 (プレテスト) 実施概要 (英語)

Table with 9 rows detailing the trial survey: ① 意義, ② 実施日程, ③ 実施科目, ④ 試験時間, ⑤ 実施規模, ⑥ 受検対象者, ⑦ 調査結果, ⑧ 実施会場, ⑨ 試験監督等.

※「受検上の配慮(点字問題)」についても同時期に試行調査を実施

平成30年2月試行調査 (プレテスト) 都道府県別参加状況 (平成29年12月現在)



平成30年11月試行調査 (プレテスト) 実施概要 (予定)

Table with 9 rows detailing the planned trial survey: ① 趣旨, ② 実施日程, ③ 実施科目, ④ 試験時間, ⑤ 受検対象者, ⑥ 実施会場, ⑦ 試験監督等, ⑧ 費用負担, ⑨ 検証項目.

CEFRの対照表の更新と民間の資格・検定試験の活用事例

<CEFRの対照表> ※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

Table mapping CEFR levels (C2, C1, B2, B1, A2, A1) to various English tests like CPE, CAE, FCE, etc.

<九州工業大学の例> ※平成30年度一般入試学生募集要項より

Table showing CEFR correspondence for Kyushu Institute of Design, listing scores for TOEFL, TOEIC, etc.

新しい経済政策パッケージについて

◆新しい経済政策パッケージ（平成29年12月8日閣議決定）より抜粋

第2章 人づくり革命

3. 高等教育の無償化

（これまでの取組と基本的考え方）

最終学歴によって平均賃金が異なることは顕著な事実（※5）である。また、貧しい家庭の子供はほとんど大学への進学率が低い。これらもまた事実である。貧乏の連鎖を断ち切り、格差の固定化を防ぐため、どんなに貧しい家庭に育っても、意欲さえあれば希望の大学に進学できる社会へと改革する。所得が低い家庭の子供たち、特に必要な子供たちに限って高等教育の無償化を実施する。このため、授業料の減免措置の拡充と併せ、給付型奨学金の支給額を大幅に増やす。

（具体的内容）

低所得層の進学を支援し、所得の増加を図り、格差の固定化を解消することが少子化対策になるとの観点から、また、真に支援が必要なお子孫に対して十分な支援が行き届くよう、支援措置の対象は、低所得世帯に限定する。

第一に、授業料の減免措置については、大学、短期大学、高等専門学校及び専門学校（以下「大学等」という。）に交付することとし、学生が大学等に対して授業料の支払いを行う必要がないようにする。住民税非課税世帯の子供たちに対しては、国立大学の場合はその授業料を免除する。また、私立大学の場合は、国立大学の授業料に加え、私立大学の平均授業料の水準を勘案した一定額を加算した額までの対応を図る。1年生に対しては、入学金についても、免除する。

第二に、給付型奨学金については、学生個人に対して支払うこととする。これについては、支援を受けた学生が学業に専念できるようにするため、学生生活を送るのに必要な生活費（※8）を賄えるような措置を講じる。在学中に学生の家計が急変した場合も、柔軟に対応する。

また、全体として支援の幅・内容を広げないよう、住民税非課税世帯に準ずる世帯の子供たちについても、住民税非課税世帯の子供たちに対する支援措置に準じた支援を段階的に行い、給付額の格差をなだらかにする。

（※8）他の学生との公平性の観点も踏まえ、社会生活上適切なものとする。例えば、（仮）日本学生支援機構「平成24年、26年学生生活費調査」の給費区分に依り、修学費、課外活動費、通学費、食費（自宅外生に限る）、住居・光熱費（自宅外生に限る。）、保険料、衛生費、授業料以外の学校補助金等を計上、収入・嗜好費を除く。併せて、大学等の授業料を計上する。

（実施時期）

こうした高等教育の無償化については、2020年4月から実施する。なお、上記で具体的に定まっていない詳細部分については、検討を継続し、発表後までに一定の結論を得る。

参考資料

（参考）外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠（CEFR）

- CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）は、語学シラバスや教材の手引きの作成、学習指導教材の編纂、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基礎を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
○ 欧州域内は、国により、CEFRの共通参照レベルが、初等教育、中等教育を達成した目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられている。

Table with CEFR levels (C2, C1, B2, B1, A2, A1) and descriptions of language proficiency. Includes sub-levels like C2, C1, B2, B1, A2, A1 and their corresponding descriptions of skills and understanding.

（出典）ブリタニカ・カウンスル、ケンブリッジ大学英語検定機構

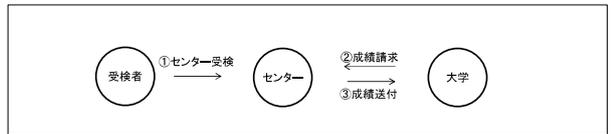
主な英語の資格・検定試験

Table comparing various English proficiency tests: Cambridge English, 英検, GTEC, IELTS, TEAP/TEAPCBT, TOEFL iBT, TOEIC L&R, TOEIC S&W. Columns include test name, description, number of candidates, frequency, and scores.

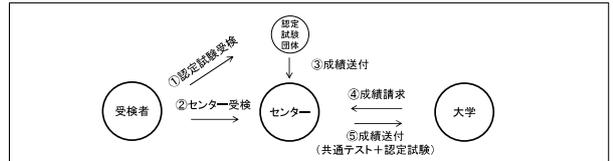
*1: Listening, Speaking, Reading, Writing. *2: 聴力・リスニング、4-5級はリスニングのみ。TEAPはL&Rでも受験可能。*3: 英検基礎センターにより異なることあり。*4: 開催月により異なる。*5: H21年1月よりTOEIC S&Wのみ受験可能。

認定試験の成績提供イメージ

○成績提供の現状(全教科・科目)



○平成32年度～(全教科・科目+認定試験)



国立大学の入学者選抜における英語試験について

前・長崎大学長、前・国立大学協会入試委員長

片峰 茂

南風原：

では続けて、片峰先生、よろしくお願いいたします。

片峰：

皆さん、初めまして。長崎大学の片峰と申します。本日はよろしくお願いいたします。

昨年 9 月まで 9 年間、学長をやっております。最後の 3 年間は国大協の入試委員会の委員長という立場で高大接続システム改革に関わってまいりました。そのことがきょうお招きいただいた理由かと考えています。

ご承知のとおり、国大協は、昨年の 11 月、平成 32 年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針という基本的な方針を公表させていただきました。その中で、きょうの話題でございます共通テストの枠組みでの英語 4 技能の評価に関しましては、骨子はここに書いてある 3 点でございます。1 つは 5 教科 7 科目の位置付けとして、認定英語民間試験を一般選抜の全受験生に課すこと。それとともに、センターの新テストにおいて実施される英語試験も併せて課すという点でございます。2 つ目に 36 年度以降に向けて、大学入学者選抜における英語 4 技能評価のあり方については引き続き検討するということ。それから



3 点目として、認定試験の結果および成績表示をどう活用するか、具体的な活用法については、別にガイドラインを定めること。この 3 点であったわけであります。きょうは、私自身この基本方針の策定のところまでは関わりましたので、それに至る経緯、考え方についてメインにお話しさせていただきます。

しかしながら現在 32 年度入試に向けて、時々刻々事態は動いているわけですね。そういった意味では基本方針以降に関しても最後少し述べることになると思いますが、その部分に関しましては、一大学人としての意見であるをご理解いただければ幸いです。

まず、今さらということでございますけれども、高大接続システム改革に関わる時代認識。基本的な認識についてであります。さまざまな切り口でございますけれども、今、

社会が大きく変容しています。大学を巡る環境も条件も大きく変わっているわけです。その中で今、我々の目の前には新たなニーズが出現しているということだと思います。それは新しい価値の創造、もちろん科学技術のイノベーション、更にそれにとどまらず、世界観であったり、新しい生命観であったり、幸福観であったり、そういう根源的な価値観も含まれるんだろうと思います。それとともに、やはり次世代を担う若者たちに新しい資質を身に付けていただく。そういうニーズだと思うんです。知識に加えて、いわゆるコンピテンシーと言われるさまざまな能力。それから多様性と協働することができる態度。さらにはひらめきとか、暗黙知とかそういった部分にまで恐らく拡大される可能性が強いのだろうというふうに思います。

その中で、日本の学术界、あるいは教育界の果たすべき役割は極めて大きいということでもあります。その1つの観点が三位一体改革ということで表されているわけであり、その中身は2つ。1つは、ややもすると今まではある意味断絶があった初等中等教育と高等教育に、いわゆる順次性という観点から当然役割分担がありますが、有機的な連携、有機的な連続性をやはり今持たせる必要があるし、そのことによって新しい資質を若者たちに涵養していただく、その必要があるのではないかとということでもあります。そういう点で初等中等教育では学力の3要素という言葉で語られるし、新しい学習指導要領が来年から始まります。それと大学においては学士力、あるいはグローバル人材という言葉で語られているわけ

であります。もう1つのパラダイムの変換は、入試が持つ意味、入試が果たすべき役割というのを、少し考え方を変えてしかるべきではないかと。もちろん入試の主体は大学でありますから、大学の教育目標を達成する新しい人材育成目標を達成するために大学がメッセージとして入試をやる。ひいては、今、個性化に大きく大学はかじを切っていますので、大学教育の個性化に資する入試。そういったイメージです。それが1つ。それに加えて先ほどから申し上げております今、日本の教育全体を改革する必要がある、変える必要がある。その中で、やはり大学入試もそういった全体の教育改革の中のドライビングフォースとしての役割、ミッションですよ。この視点が恐らく必要なんではないか。そういった意味で公益に資する。日本全体の教育改革という公益に資する入試という位置付けもやはり必要なのではないかということでもあります。

5 ページは長崎大学の事例なんですけれども、長崎大学もさまざまな新しい教育改革にチャレンジしています。例えば5年前から一般教育の選択科目を全てモジュール化して、全てに今、アクティブ・ラーニングを導入しています。時々授業をのぞきに行きましても、年々確かにクラスは活性化されています。しかしながらまだまだアクティブ・ラーニングについてこれずに、傍観者であり続ける学生がたくさん存在するわけです。また、新しく4年前につくりました多文化社会学部という学部がございますけれども、これはグローバル人材の育成を標榜しています。非常に高い英語力を入り口で課します。その中で、英語で学ぶ、英語で

教える、そういうこともやっていますし、さらには世界のトップレベルの大学の専門教育に1年ぐらい学生をたたき込むということもやってまいりました。しかしながら、その中で英語で学ぶ、専門教育が高度化すればするほどなかなかやっぱり簡単ではないようです。それから、例えばオランダのライデン大学等、世界のトップレベルに行きますと、非常に高い英語力を持つてる学生でもやっぱり大変な苦勞をしています。そういった観点からいいますと、やはり1つは教員側の指導のスキル、改善の余地がたくさんあります。しかしながら、学生サイドもそれを受容するための準備、あるいは対応力という観点でもっと改善の余地があるのではないかと。そういったことから先ほど申しました、有機的な連続性を持って若者たちを高校と大学で育てていくことが極めてやはり重要なのではないかとということでもあります。

そこで、先ほど申しました32年度以降の入試に関する基本方針の全体像なんですが、ポイントは2つであります。1つは国大協として共通試験へ一体的に対応する。これまでどおり5教科7科目の原則の下に、英語4技能の評価も導入しますし、記述式問題(国語、数学)も採用するということがあります。この一体的に対応することの意味ってものすごく僕は大きいと思って、今回の高大接続システム改革のドライビングフォースとして国大協がまとまって1つの方向性で対応することで、今回の改革に非常に重要な役割を果たすことになるのではないかと。それから、今、国立大学は分離分割方式をやっていますから、受験

生に複数受験機会、複数校受験機会を提供するためには、やはり一体的な対応が望まれるという考え方です。それと2つ目は個別試験における各大学の工夫であります。一般選抜においては高度な記述式試験や調査書あるいは面接等のより手の込んだ評価。こういったものをそれぞれの大学が工夫して、それぞれの特色のある入試をやる。そのことによってそれぞれの大学のアドミッションポリシーを実現していくという立場であります。さらに総合型、学校選抜型という、より自由度の高い入学者選抜の割合を増やすということも述べているわけです。

基本的には先ほど申しましたように、国立大学としては、一般選抜の個別試験と共通試験、それから総合型/学校推薦型選抜というこの複数の形の入試の組み合わせの中でミッションを実現するということであろうかと思えます。今回の対応をじっくり申しますと、やはり大学の教育の個性化あるいは高度化、国際化と、またはアドミッションポリシーの実現という観点から申しますと、そこはどちらかという重点は個別試験あるいは総合型/推薦型選抜ということになるかと思えます。一方で、今回の共通試験に対する一体的対応という部分は、先ほど申した公益に資する、要するにあるべき能力をメッセージとして社会に伝える。そのことによって日本全体の教育の改革を推進する。ここに重きがかなりあるというふうにご理解いただければよろしいのではないかと。このように考えます。

さて、スライド8ページから、英語民間検定・資格試験の活用に関する検討状況に

絞って経緯をご説明します。ご承知のとおり、平成 28 年 3 月に高大接続システム改革会議の最終答申が出されました。新しい共通試験の目玉として、記述式問題の導入とともに英語 4 技能の評価を推進するということが書き込まれたわけであり、しかしながらこの段階においては、実施可能性について 32 年度から実施可能かどうかというのはこれから検討するという書きぶりでした。その中に民間試験の知見を活用する。場合によっては、現在の英語試験の代替として活用することもあり得るということが書き込まれたわけですが、基本的にはここから議論がスタートしたんだと思います。

それから次、平成 29 年の 5 月に文部科学省が共通テスト実施方針(案)を公表しました。この間が 1 年以上あったわけですが、ここでいろんな検討がなされたわけですが、僕の記憶からいいますと、記述式問題に関してはかなりけんけんがくがく議論をした。しかし、英語 4 技能に関しましては、あまり議論はなかったような気がします。ただこの時期、国立大学の会員の中からも英語 4 技能を民間試験で評価すること、これ自体、その活用すること自体にはそれほど反対の声は上がらなかったように記憶しています。それは山田室長が先ほど言いましたように、既に多くの大学が民間試験を入学試験に活用している。その中で一定の合理性を認識していた、そういった価値観を共有していたということが背景にはあったんじゃないかと思っています。この検討期間の中で、非常に明確な形で文部科学省の意思として判断として示されたのが、この 2 つであります。センター試験によって英語 4 技

能を評価することは物理的に困難であるということが 1 点であります。そしてもう 1 つはやはり平成 32 年度に新共通テストを導入するという点であったかと思います。そういった経緯を経て、29 年の 5 月、昨年の 5 月ですがいわゆる実施方針(案)なるものが示されました。廃止の時期に関しては 2 つ、A 案、B 案ありましたが、基本的にはセンターの英語試験は廃止するんだと。そのかわり民間試験で英語を代替するという基本的な考え方が示されたわけであり、これを受けて国大協の中はけんけんがくがくの議論になりました。さまざまな懸念が示されたわけであり、そして、国大協としては、6 月、昨年の 6 月に意見書を提出いたしました。その意見書の骨子は 2 つであります。1 つは、いわゆる認定試験の具体的な運用です。認定の基準あるいは指導要領との整合性、公平性担保等々、具体的な実施・活用法についてまだほとんど不明ではないか。それを明確にしてくださいというのが 1 つ。もう 1 つは、そういった情報がない段階で、センター試験の英語の廃止を決定するのは時期尚早ではないかというこの 2 点であります。

これに対して、それから 1 カ月後に出されたのがこの文部科学省の実施方針です。実施方針では、まず民間英語試験の具体的実施・活用方策を早く示してくれという要請に関しては、ゼロ回答であったわけですが、ご承知のとおり、その後、認定の要件が発表され、現在その認定作業が進行中です。もう 1 つ、センター試験廃止に関しましては、共通テストの英語試験を平成 35 年度までは実施というこれは B 案を採用し、その文中

に「認定試験の実施・活用状況を検証しつつ」という文言が新たに挿入されました。これには解釈がいろいろあると思いますが、国大協としては平成35年度、6年度以降もセンター試験英語、存続の可能性を残したというふうに理解しました。基本的にはです。そういったことの中で、国大協としては、基本方針(案)を各会員大学に意見照会し、その上で、理事会、あるいは総会で議論して、最初にお示しした基本方針というのを決定し、公表したわけであります。

その意見照会の結果なんですけれども、10ページのように、民間試験と共通試験の2つの英語試験を課すことに関しては賛同、おおむね賛同、あるいは意見なしが67%です。そして、その他が33%あったんです。その他の意見のほとんどは先ほど申しましたようにまだ具体的な活用方針が決まっていないう段階でこういった決定をするのは時期尚早ではないかというご意見でした。

最終的に、じゃあなぜこの時期にこういう決定をしたのか。これは基本方針の公表と同時に出了ました国大協の会長談話というところに明確に書いてございます。1つは、6月段階で国大協が要求した具体的な方針についてはいまだ十分な詳細が示されていないという前提の上で、文科省にはそういった詳細を速やかに明らかにすることを要請する。その上で、国大協はガイドラインを作成しますということが1点。けれども、最大の価値観はやはり高大接続システム改革の基本理念を全ての国立大学が共有して早急に改革に取り組むことができるよう、そして何とんでも受験生が見通しを持って安心して準備に専念できるように早

急に国大協の基本方針を出す必要がある。この価値観を最優先した結果だというふうにご理解していただいでよろしいんじゃないかと思ひます。

現在、国大協の中で、鋭意このガイドラインについての検討が進んでいます。この具体的中身については僕は今、部外者ですので存じ上げないんですが、基本的な観点として、対象とする認定試験。国大協としては、認定試験全部を対象とするのかしないのか。要するに文科省の枠組の中で、国大協として独自の方針というのをつくるかつくらないかというのは非常に大きなポイントです。それは要するに認定試験の種類の問題。それから活用法に関しましても、出願資格として見るか、得点加点で加算にするか等々いろいろあります。それから評価に関してもCEFR以外の評価基準をつくるかつくらないか。あるいは認定試験と共通試験の重み付けをどうするのか。そして最大のポイントだと僕は思ひますが、国大協としてのガイドラインを1つに統一するのか。それとも例示にとどめて、各大学がその中から選ぶという形にするのか。ここら辺が1つの大きなポイントになろうかと思ひます。いずれにしろタイムリミットがもう近づいていますので、今年度末をめどに恐らく国大協からこのガイドラインが示されるということになろうかと思ひます。

それぞれの大学の先生たち、もう既に感付かれていますと思うんですけれども、この間、5年にわたる高大接続改革議論の中で、明確に今、国立大学への入学者の質が変わってきていると思ひます。例えば、うちの多文化社会学部では、年々入学試験で認定試

験を利用する者の数は明確に増加をしておりますし、入学時の TOEFL の点数も非常に高い点数を取る学生は 4 年前の 21 名から 53 名とものすごい勢いで増えているわけですね。恐らくこの要因の 1 つはやはりこの間のたくさんの議論にあったんだろうと思います。

最後に 14 ページ、今後の課題です。まずは 32 年度新共通テストが、でき得限りの公正性を担保しながら、適切・円滑にミスがないように実施できるということが最大の 1 つポイントだと思います。さらには 33 年度入試は改革のスタートです。そこで終わりじゃないんです。3 つ目に、大学側の想像力と覚悟があると思います。先ほどの例を見ましても恐らく指導要領が変わって入試が変われば、大学に入学してくる学生の質は恐らく変わってきます。それに大学側が、大学の教員がきちっと対応できるかどうか、そのための準備をきちっとやれるかどうか。ここが大学側に今、課せられている非常に大きな課題だというふうに認識している。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

南風原：

片峰先生、どうもありがとうございました。

1

東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」
平成30年2月10日

国立大学の入学者選抜における英語試験について

長崎大学・学長特別顧問
(前・国大協入試委員会委員長)
片峰 茂

2

「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度－国立大学協会の基本方針－」平成29年11月10日

(共通テストの枠組みでの英語4技能の評価)

- 新テストの枠組みにおける5教科7科目の位置づけとして認定英語民間試験を「一般選抜」の全受験生に課すとともに、平成35年度までは、センターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課すこととし、それらの結果を入学者選抜に活用する
- なお、国立大学協会としては、平成36年度以降に向けて、認定試験の実施・定着状況とともに入学者選抜機能としての実効性などを十分に検証しつつ、大学入学者選抜における英語4技能評価の在り方について、引き続き検討する
- 英語の認定試験の試験結果・段階別成績表示の結果の具体的な活用方法について、受験生に対する配慮の観点から、国立大学共通のガイドラインを別に定める

3

高大接続システム改革の背景と必要性

大変容の時代

- グローバル化の進展と矛盾
- 異次元の科学技術(情報科学、生命科学)
- 高等教育のユニバーサル化
- 少子化、18歳人口減少局面へ
- 大学の個性化(差別化)

新たなニーズ

- 新しい価値(観)の創造: 世界観、生命観、幸福観等
- 新しい資質(能力と態度)

4

高大接続システム改革の意味 ～日本の教育全体のパラダイム転換～

三位一体改革

- 高・大の有機的連携、接続
初等中等教育: 学力の3要素(新学習指導要領)
高等教育: 学士力、グローバル人材、新しい知の創造
- 国立大学における入学試験の意味
大学教育の高度化、グローバル化と“個性化”に資する
教育改革のドライビングフォース: 公益に資する

5

長崎大学教育改革の経緯から見えてきたこと

- (1) Active Learning: 主体的学びの技法と態度
(事例) 教養教育改革の成果と課題
- (2) Teaching & Learning in English: 英語で学ぶ
(事例) 多文化社会学部における専門教育
- (3) Student Exchange with Top-Leveled Universities
: 主体的学びの技法と態度及び英語で学ぶ
(事例) 多文化社会学部オランダ特別コース

6

「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜の基本方針」 ～多様な能力及び態度をどう評価するのか～

共通試験への一體的対応

- 5教科7科目の原則
- 英語4技能の評価
- 記述式問題(国語、数学)の採用

個別試験における各大学の工夫

一般選抜

- 高度な記述式問題
- 調査書、本人記載の資料、面接等の活用
- 分離分割方式維持の原則

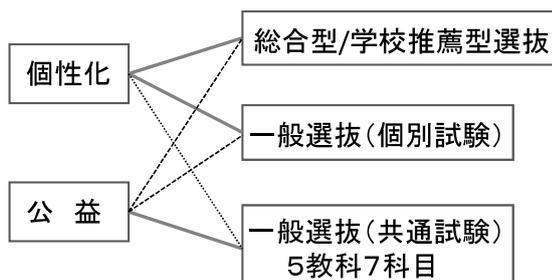
* 分割定員割合の裁量、総合型/学校推薦型選抜との分割可

総合型/学校推薦型選抜

- 学力試験以外の要素を加味した丁寧な入学者選抜の取組みを加速・拡大

7

国立大学入学者選抜の基本的考え方



8

大学入学共通テストにおける英語民間検定・資格試験の活用 に関する検討経緯(1)

高大接続システム改革会議「最終答申」平成28年3月31日

- 新共通テストにおいて英語4技能の評価を推進
- 平成32年度当初からの実施可能性について検討
- 民間試験の知見の活用(英語試験の代替として活用する可能性にも言及)

国大協「高大接続システム改革会議最終報告を受けて」平成28年4月1日

- 実効性のある高大接続システム改革の実現のため今後の検討に積極的に参画
- 真の改革の実現・定着に向けステップを踏み十分な時間をかけて取り組む姿勢が重要

(1年以上の検討期間)

- ① センター試験による英語4技能評価は物理的に困難
- ② 平成32年度に新共通テストを導入

文科省「大学入学共通テスト実施方針(案)」平成29年5月16日

- 共通テストの枠組みで民間試験を活用
- (A案) 32年度以降共通テスト英語実施しない(B案) 平成35年度までは実施

大学入学共通テストにおける英語民間検定・資格試験の活用に関する検討経緯(2)

国大協「「高大接続改革の進捗状況について」に対する意見」平成29年6月14日

- ・認定試験を共通テスト英語の「代替とする」ことで、試験の作問主体が大学入試センターではなくなることによる影響を検討すべき
- ・導入する認定試験について、認定の基準、学習指導要領との整合性、受験機会公平性担保の方法、異なる認定試験の成績評価の在り方等について早急に検討すべき
- ・それらの情報がない現時点で共通テスト英語試験廃止の可否を判断することは拙速

文科省「大学入学共通テスト実施方針」平成29年7月13日

- ・資格・検定試験のうち、必要な水準及び要件を満たしているものをセンターが認定し、その試験結果及びCEFRの段階別成績示を要請のあった大学に提供
- ・共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施

国大協「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度－国立大学協会の基本方針－」平成29年11月10日

【会員大学へ意見照会】「国立大学協会の基本方針(案)」について (H29.9.29～H29.10.6)

- ・照会内容
「国立大学としては、新テストの枠組みにおける5教科7科目の位置づけとして認定試験を「一般選抜」の全受験生に課すとともに、平成35年度までは、センターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課すこと」とする方針(案)に対する意見について。
- ・回答状況
「賛同」、「概ね賛同」又は「意見なし」:67%
「その他」:33%
- ・「その他」の主な意見
・認定試験に係る諸課題が解決されていない段階で方針を決定するのは時期尚早ではないか
・受験生への負担や受験機会の公平性担保などについて懸念もあることから、認定試験の活用については各大学の判断により選択できる方法も検討すべきではないか。
・共通テストの英語試験の存続については、認定試験の実施・活用状況等を検証の上、その後のしかるべき時期にあらためて判断すべき

「平成32年度以降の国立大学の入学者選抜制度－国立大学協会の基本方針－」の策定に当たって(会長談話) 平成29年11月10日

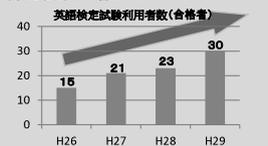
- ・基本方針は、高大接続システム改革に関する基本理念をすべての国立大学が共有して改革に取り組むことができるよう、また、受験生が見通しを持ち安心して準備に専念できるようにするために示した(改革の実施までに残された期間は短く、各大学及び受験生の準備や心構えを考慮すると、基本方針については早急に示す必要がある)
- ・「高大接続改革の進捗状況について」に対する意見においてさらなる詳細が示されるべき課題を指摘(6月14日):英語認定試験については、認定の基準及びその方法、学習指導要領との整合性、受験機会の公平性担保、受験生の経済的負担軽減等の具体的方法、異なる認定試験の結果を公平に評価するための対照の方法など
- ・文科科学省「大学入学共通テスト実施方針」及び「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」(7月13日)においても、残念ながら指摘した諸課題については未だ十分な詳細が示されているとは言えない
- ・国大協が指摘した諸課題について早急に検討を行い、可及的速やかに詳細を明らかにするよう文科省に要請する。なお、国大協としては、その内容を精査した上で、英語の認定試験の具体的な活用方法について、本年度中を目途に国立大学共通のガイドラインを作成する

32年度入試における民間英語資格・検定試験活用の国大協ガイドライン策定に向けて(検討観点例)

- ・対象とする認定試験
全ての認定試験を対象とするか？それとも絞るか？
- ・認定試験結果の活用法
① 活用方法の選択:出願資格方式、得点加算方式、みなし満点方式、得点比較方式、重みづけ方式等
② 異なる認定試験結果の評価:CEFR以外の基準を策定するか？
③ 認定試験と共通試験英語の比重:基準を定めるか？
④ 活用方法の統一:一つに統一するか？例示に止めるか？
- ・認定試験では対応できない受検者への対応

多文化社会学部入学者の民間試験利用と英語力の推移

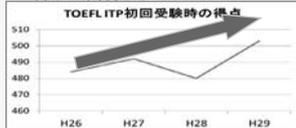
①入学者に占める外国語検定試験スコア利用者数の増加



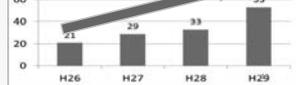
② 外国語検定試験種類の利用頻度(平成29年度入学生)

外国語検定試験	利用者数(のべ数)	外国語検定試験	利用者数(のべ数)
英検	16	HELTS	2
TOEFL	1	GTEC	9
TOEIC	9	合計	37

③ TOEFL ITP初回受験時の得点の高得点化



TOEFL ITP初回受験で2年次の基準である500点を突破した学生数



課題

1. 32年度新共通テストの公正かつ適切・円滑な実施
2. 33年度入試は改革の起点
3. 近未来の大学入学者の資質変容への想像力: 大学教育改革の更なる推進

英語民間試験の立場から

ベネッセコーポレーション GTEC 開発部長

込山 智之

南風原：

では、次に込山さん、よろしくお願いいたします。

込山：

皆さん、こんにちは。ベネッセコーポレーションで、GTEC のテスト開発を担当しております込山と申します。よろしくお願いいたします。

今回、民間検定試験の立場からということで、私、GTEC のお話をさせていただきますが、もちろんほかにも外部検定試験、幾つかございますが、こと今回の大学入試の中で活用していく際にどのような点を留意して外部検定試験として臨もうとしているのかという観点で聞いていただければと思います。

それでは、まずスライド 1 ページ目をご覧ください。今回、大学入学共通テストに当たり、先ほど来、話の出ております英語成績提供システムの参加要件が 11 月に出ております。幾つかかなり大きなポイントがありますが、その中でも外部検定試験として特に留意したい、留意しているポイントということで、5 つ挙げさせていただいております。

まず 1 つは学習指導要領との整合性。もちろん高校生が受けていくテストになりま



すので、そことどう合致しているか。そして 2 つ目は最近多くのところでこの言葉が出てきておりますが、CEFR。この CEFR との対応関係ということがどうあるべきなのか。またここから先は実施運営上の問題になりまして、大規模受検、これはもちろん離島やへき地も含む全国というところの対応をどのようにすべきか。そして 4 点目。公平性・公正性の担保ということで、それを外部検定試験でどのように実装していくのか。また今大学入試センター試験は年間 60 万人近く受けておりますが、その中でも多くの障害のある方々への対応ですとか、また今後、この外部検定試験はもちろん有料になっていきますので、受検料の配慮というところに対してもお伝えできればと思います。私の説明はこの 5 点を順番に進めさせていただきます。

次のページ（スライド 2 ページ）をご覧ください。こちら、GTEC のことを詳しくご存じにならない方もいらっしゃると思いますので、概要をご説明いたしますが、過去 20 年我々としては蓄積していたノウハウで続け、今年度、見込みで 102 万人の中高生、メインで高校生が受検する検定となりました。ここに書いてある吹き出しですが、GTEC、最初はあまり高校生、そして中学生のほうには受けられにくいテストではあったんですけども、その理由になります。ここに書いてありますように、一番左のかなり前にはなります、10 年以上前のスーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールのときの 4 技能統合型の指導の活用校から始まり、それから 2005 年からセンター試験でリスニングテストが始まっています。先ほども山田室長から話がありましたが、そこをきっかけに 2011 年、ここは国際共通語としての英語の 5 つの提言が出たタイミングになります。その後、現行の 2013 年度から始まりました高等学校の指導要領、そして 2014 年度ぐらいから始められた個々の大学、私立大学も含めての個別試験での 4 技能化の採用についてということで、それに伴って GTEC を評価として、診断として使っていくという流れができてきております。

次のページ（スライド 3 ページ）をご覧ください。まずは学習指導要領との整合性の観点でご説明をいたします。まず、この大きく 3 つ赤囲みをしているところを見ていただければと思いますが、この学習指導要領というものを捉えたときに、これは次の学習指導要領でもそうですが、何ができる

ようになるのか。生徒が何ができるようになるのかということはこの学習指導要領の根底と考えたとすると、今、まさに資質・能力の部分の 3 つの力で言われています 1 つの知識と技能をベースとしながら、初見、または初めて遭遇するような状況の中で、しっかり自分で考え、判断し、行動する、または表現する。そしてその課題解決の力ということは、実はリアルでオーセンティックな、言い換えれば本物のという意味での真正なところによって、学習の転移が起きると言われています。

そのため、この思考、または判断、表現、そして知識、技能を使っていく際に、やはり実社会における文脈でどうその知識、技能を使っていくかというのが大事になってくる。これは実は英語のみならず全ての教科でうたわれていることだと思っています。それをちょうど英語に当てはめると、知識・技能に関してはもちろん語彙、文法、これは英語の学習の中の最も重要な基盤になると思っています。それをさらに運用していく、その運用するために実社会の文脈に沿ったような形が望ましい。ここに例が書いてありますけれども、訪日した留学生。実際各学校の生徒さん、留学生を受け入れてやりとりしたことも多い方もいらっしゃいます。または自分が短期の留学で行ったときなど、大学生と教授との授業のやりとりに近似したものを経験するなどが、やはり高校生にとって理解しやすい使用場面ということ想定するとこのような指導が今、学校現場で行われつつある。特に英語に関しては、できるようになることという意味の中で CEFR の Can-Do が各それぞれ

の学校種、また各学年の目標に参考になるディスクリプタ、要は記述文になっていると認識していただきますと、この3つの力を全教科もそうですけれども、英語に関しても、実際に指導していく、そして評価として見ていくという形になります。

このように、今回我々が大学入試の英語成績提供システムの中に入っていく観点からすると、指導と評価が表裏という形であれば、我々GTEC に関してもこのようにCEFR の Can-Do に沿い、想定し得る英語の使用場面での課題解決型の出題をするべきだという根底に立った中で、構成概念として中高生の英語使用場面において、思考・判断・表現の力を測定するというコンセプトでつくり続けてきております。実はこれも最近このコンセプトを掲げたわけではなく、約20年前、1998年に立ち上げたときに、実は1998年の学習指導要領が始まったときに、生きる力というところが問われた内容に関しては、実は既に現行の資質・能力の3要素も意識しながらつくられたところもありますので、それを踏まえて20年前から掲げているコンセプトと見ていただければと思います。

続いて、具体的な学習指導要領との整合性について触れていきます。こちら、実は字が小さくて恐縮ですけれども、GTEC の4つの技能のそれぞれが測っているパートを示しております。例えば一番左側のリーディングであれば、A の短文文脈の理解、ワンセンテンスの中から文脈を把握する、また1段落の中から概要を把握する、これは後で説明します。広告とかそういう情報の中からしっかり必要な情報を引き出す。そ

して比較的長めの文章の中から文脈を意識して要約を自分の中でし、意味を把握するというような4つのパートでリーディングは構成されています。同じような形でリスニング、ライティング、スピーキングともさまざまな力を測れるような構成となっている状態です。

今、ここ(スライド4ページ)で青囲みをさせていただいているところが、次のページ以降、実際の問題として見ていただくポイントになります。例えば今、説明申し上げましたリーディングの情報検索の問題であれば、英語の広告や案内物などを模した題材から必要な情報を検索して、短時間で全体の概要を理解する力を測定するというところで、ここに実はポップグループのコンサートの告知をする広告がありますが、その中でディストラクタもありますが、必要な情報をしっかりくみ取るものです。そのまま普通に一番目立つところだけ読んでしまうと間違えるというような問題もありますので、これを見てしっかり答えられるか。学習指導要領との整合性という形では、1年生が必修修でほとんどが受けますコミュニケーション英語Iの中で、説明や物語を読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりする。また、聞き手に伝わるように音読するというところに合致した力を測っているというふうに見ていただければと思います。

時間の兼ね合いで、もう1つリスニングだけ説明をさせていただければと思います。次のページ(スライド6ページ)をご覧ください。このような絵が最初から与えられます。そしてこの点線で書いてあるところ

に関しましては、目では見えず、音声で流れてくる英語のスク립トになります。設定としては、あなたが初めてアメリカで英語の語学学校に行くところですが見つけられない状態であります。自分がホームステイで住んでいるところの近所の人を近くに見つけたので、学校がどこにあるかを尋ねることにしました。ここでそういう会話の状況が設定されているわけですが、ここに書いてありますとおり、スク립トを見れば簡単です。道を渡って、銀行の隣のビルの3階まで上がるというふうにすると、銀行の左隣の建物は3階まであるというところをしっかりと自分の中で理解をして、思考で判断をして、答えていく問題になっています。そのため、こちらを読み上げはしませんが、コミュニケーション英語Ⅰのこの文言の中に該当する力を測っているテスト、部分ということで、把握をいただければと思います。

少しページを飛んでいただきまして、8ページをご覧ください。スピーキングになります。スピーキング、全部で4パートを構成されていますが、一番難易度の高い問題に関して、この意見展開、意見陳述の問題が、学校での携帯電話の使用是非について問題が出されます。1分間の準備時間、1分間の回答時間という設定の中でこれを解いていくというのが一番最後のスピーキングの難しい問題になっています。

それから後です。こちらあくまで参考資料になりますが、先ほど学習指導要領との整合性について、各技能について1問につき1つ書きましたけれども、実は学習指導要領の中ではこのコミュニケーション英

語Ⅰの第2章、または2年生で受けるコミュニケーション英語Ⅱの部分もこの赤で書かれているところが特に、先ほど説明しなかった別の問題で、4コマを意見を描写を説明する問題がありますが、そこに関して、例えばこのウの力を見ているとか、先ほど説明しました意見陳述の問題は、コミュニケーション英語Ⅰで言語活動の中でどのようなどころまで留意してさらに細かく配慮すればいいかというところで、事実と意見などを区別して、理解して伝えたりすることというところが合致しているところを、全て1対1対応で説明をしているところになりますので、また追ってご確認をいただければと思います。

もちろんこれはGTECの例で説明をいたしましたけれども、他の検定試験に関してもこのような学習指導要領の一致という部分をしっかりと考えておられるのではないかと考えています。

続いて、2点目になります。CEFRの説明です。ここは本当に簡単にはなりますが、この簡単なやりとりができるA1から一番習熟したC2まで6段階で表しているものになります。このようにホリスティックに技能を全て合わせてこのようにすることができるとは書かれていますが、実は大元はCEFR本体としては、最初はこの5領域それぞれでこのCan-Doの能力記述文というところを定めています。例えば最近よく言われる大学入試で使われるB1というところであれば、このリーディングであれば、非常によく使われる日常言語や、自分の仕事関連の言葉で書かれたテキストなら理解できる。起こったこともろもろ感情などが表

現されている文章を理解できるというところがディスクリプタの1つの事例として書かれております。これとどのように検定とCEFRを結び付けるかという点ですが、Council of Europeが出している正式なマニュアルが存在しています。このマニュアルの中では、全部で10個のやり方で関連付けすることができるように示しています。

19ページに詳細を記載しておりますが、テストの種別によってその関連付け方というのは変わってきます。GTECであれば、IRTを中心にしたスコアで出すやり方になりますので、受信技能はこのBookmark Methodというものを使っており、発信技能に関しては生徒のアウトプットが当然必要になってきますので、この被験者中心という内容でのContrasting-Group Methodというものを使っています。ここには検定試験によって色々なやり方で、それぞれの検定の特質に合った方法を選んで進めているという形になります。

今申し上げたListening、Readingの受信技能はBookmark Method、そしてSpeaking、Writingに関してはContrasting-Group Methodを使いまして、例えば受信技能だけ説明をしますと、まさにBookmarkですのでBookletをつくります。リーディングであればリーディングの問題、リスニングであればリスニングの問題を、絶対評価型のIRTのテストですので、1つ1つの問題に難易度が付いていますから、簡単な問題から難しい問題まで、このように並べることができます。並べていったときに、どこの問題を解けるような力であればそのCEFRのできることが保証される

のかというところを定めているのがこのやり方になっています。

22ページになりますが、このような手続きを、ポイントは複数のグループで分科会に分かれてディスカッションをしながら定めていくという形になります。これがある特定のグループだけだと、それは偏ったものになりますし、そこで有識者を交えながら複数でしっかり総合的に見ていく、そして補正していくというところがポイントになってくると思っております。

まとめますと、冒頭、構成概念のところでも申し上げましたとおり、Can-Doのディスクリプタがある程度学習の到達目標としての目安になる、そしていま申し上げたひも付けの中で、テスト結果のフィードバックにもなり得る。その学習到達目標になれば、当然学校の中でシラバス・カリキュラムの作成ですとか、教材のガイドラインにもなるということで、このCEFRを活用することによって、1つこの英語指導学習への良い波及効果、ウォッシュバックというのが期待できるということが、このCEFRの正しい使われ方なのではないかと認識しております。

参考ですけれども、例えばGTECであれば、次の学習の動機づけのためにライティングであればそれぞれのCEFRの答案を用意して、ここまで書ければこのCEFRのレベルがある程度理解できるという部分を、それぞれのテスト結果から参考に生徒たちに示しているものにもなります。

ここからは実施運営上の点になります。大規模受検の対応ということで、GTEC、今年度は年度2回のテストにはなりましたが、

2020年度には年間5回を今、予定しております。来年度、2018年度に関しては既に1回増やして3回の検定を実施することに決めておまして、このように実施としては、3技能は紙で、ライティングはエッセイ・ライティングになりますので、罫線で書かれている紙に自分のペンで書いていくわけですが、スピーキングはタブレットで実施を行います。この大規模受検の対応ということで、やはりポイントになるのが冒頭説明を差し上げた通り、学校の指導が今、変わりつつある中で、スピーキングをやはり指導と評価の一体化の原則が必要だと思っております。学校の授業の中でスピーキングをやるのであれば、当然授業の中の定期テストもそうですし、最終的に入試でもスピーキングの力が測られていくのが普通ではないかなと思っております。ただ、ポイントがあります。全国一斉の実施の中ではやはりタブレット端末という機械を活用するところ、それに伴って解答音声の取得ですとか、あとは会場をどう担保するのか。我々としては、高等学校の準会場の学校利用というところをメインで考えております。また、先ほど申し上げたとおり、離島・へき地での実施というところもあります。既に福井県ですが、外部検定試験の補助事業というのをされていまして、1学年、あまり大きくない県ですので7,000人の県ですが、そのうちの約90%がちょうど1年前にこのような形でタブレットでのスピーキング実施、ここにヘッドセットとインカムをつけておりますが、この一斉実施を同日・同時刻・全員で行っている実績があります。生徒1人につき1台のタブレット端末とマイクとヘ

ッドセットを、これはベネッセの資産として持っていて、我々のほうで学校にそのときだけ貸し出しているという形で見ていただければと思います。生徒はもちろん自校のクラス、机で実施をできますので、特に別に交通費とか検定以外の出費が必要ということはありません。この事前機器の正常稼働の確認については、次に説明します。ポイントなのは、タブレットは使っていますが、ネットワークの環境に依存することなく、オフラインでの実施をしています。そのため、極端な話、ネットが繋がらない山奥でも、受けることができるのがポイントです。現行のセンター試験でもリスニングの機械の不具合等々がいつも取り沙汰されますけれども、GTECに関しては実施前、テストが始まる前に必ずヘッドセットと機械を付けた中で、まず流れる音声聞こえるか、自分の音声を吹き込んで、それが自分の耳で聞こえるかというところをインジケーターを使って事前に確かめます。現に福井県の中でも7,000人一斉実施をしたときに、この機械のトラブルに関してはほとんどなく、試験開始をすることができたという実績がございます。

その次、公平性・公正性の担保という中でご説明をいたしますと、まずは今回の参加要件の要綱に入っているものになりますが、試験監督、学校準会場の場合、試験監督が必要となってくることに對して、全ての会場に共通で、我々より監督者、責任者を1名、そして各教室ごとに1名ずつというところの派遣を考慮しております。公開会場、準会場もそれに準ずるということになりますので、我々としましては、学校の先生、今は自

校の先生でされているのが通例かと思えますけれども、我々が手配した試験監督者が学校で運営をするということを考えております。

もう1つ、採点です。ライティングとスピーキング両方ですが、いわゆる記述式の採点をどうするかという観点に立ちますと、ここでは、ライティングの流れを示していますが違いはここです。ライティングは紙の答案をスキャンしてデータ化する。スピーキングは音声データとして抽出するところが異なります。2人の採点者が同じ答案を付けまして、ずれがあった場合、第三者、上位採点者が付けるということを徹底しております。こちらライティングは、もちろん我々の場合、つくってきた20年間、最初のおきからこのライティングを運用しておりますので、この20年間の蓄積の中でのノウハウをしっかりと生かして正しい採点を引き続き付けていきたいと思っております。

そして最後です。受検料の配慮または障害者の方への対応ということで、まず受検料の配慮に関しましては、この要綱に書かれている経済的に困難な受検生ということになりますと、低所得者世帯の考え方によりますが、例えば生活保護を受給している世帯を対象に割引を想定しております。ただ、現に先ほどの監督派遣ですとか、これからどのような形でお金がかかっているのかスキームがまだ定まり切っていないというところもありますので、今後の状況に鑑みて最終的な確定をしていきたいと思っております。

そして障害者の方々への対応になりますけれども、ポイントとしては、現行、大学入

試センター試験で行われているレベルをほぼ担保したいと思っております。主に視覚、聴覚、そして養護関係と3つ分けられると思いますが、例えば33ページ、視覚になりますが、センター試験にはないがGTECで行う配慮事項というところに注目ください。もちろん今、センター試験の中では発信技能がございませんので、特にスピーキングであれば全盲の方に対しても点字問題の冊子をお配りして、また時間管理が当然必要になりますので、この点も配慮して特別なタブレットを提供していくですとか、センター試験と同じレベルを担保するのですが、新しい技能についてもチャレンジをして、しっかりいろんな方が受けられるテストとして成立していきたいと思っております。

そして最後になります。38ページをご覧ください。今、ことGTECの話、特に英語の話で進めてきておりましたが、先ほど、片峰先生からも話があったようにやはり高大接続システム改革の中のこの大学入試。ここ昔の言い方ですけれども、今の大学入学共通テストの中での、そして英語の話であるということを私は強く認識したいと思っております。ここにも書いてあります通り、今回はあくまで高大接続はその1つの結節点。ポイントとしてはやはり中等教育がより良くなること。高校生の教育です。そして、高等教育が良くなること。そのほごまにある高大接続をしっかりしたものにしていく。特に今の現行の学習指導要領でも言われている知識・技能、思考・判断・表現、そして主体的に、自分の力を持って考える力というところをしっかりと担保しながら測定するというところで比較すると、冒頭申し上

げたとおり、GTEC の構成概念はしっかりそれに合致して進んでいけるのではないかと考えております。

そして最後です。新学習指導要領の中で、冒頭も申しあげました何ができるかというのはこの学力の 3 要素が入っていますが、これ以外に何を学ぶのか、そしてどのように学ぶのか。それは一言アクティブ・ラーニングと言われておりますが、どのように学ぶのか、何を学ぶのか、そして最終的に何ができるようになるのかをしっかりと考えながら我々としても、今後の方向性を見据えながら英語検定として研鑽していきたいと考えております。

少しでもご参考になったのであれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

南風原：

込山さん、どうもありがとうございました。

それでは、ここで 10 分ほど休憩をとって、2 時 55 分から再開したいと思います。前半部分への質問ございましたら、水色の質問用紙にお書きいただいて、スタッフが回収しますので、よろしくをお願いします。

GTEC問題例 ~Listening~

L Part C 日本語で事前に与えられる状況設定および視覚的情報と音声情報から、その場面で求められている課題(タスク)を解決する力を測定。

あなたはこれから初めてアメリカで英語の語学学校へ行くところですが、学校が見つかりません。あなたは路上で近所の人を見つけたので、学校がどこかたずねることにしました。まず、あなたから話しかけます。



Where will you go to find the Language Academy?

(A) ④
(B) ③
(C) ②
(D) ①

正答 C

<スクリプト>
F: Good morning, Mr. Davis.
M: Hi, Maki. Good to see you.
F: The Language Academy is in this area, isn't it?
M: Yes, it's just across the street, in the building next to the bank.
Go up to the third floor.

学習指導要領との整合性 「コミュニケーション英語Ⅰ」より
ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

GTEC問題例 ~Writing~

W 意見展開問題 社会との接点を通して、個人の経験や他の事例をもとに、自分の意見と理由を述べる。自分の主張を説得力を持って表現する力を測定。

ライティングの解答時間は20分です。残り時間が少なくなると放送で知られます。
解答はすべて英語で、制限時間内でできるだけたくさん書きなさい。
自分自身の考えや具体的な経験に基づいて、自由に書きなさい。
イラストは、読者の書くための参考です。イラストの内容を参考にして書いても、あなた自身の経験を書いてもかまいません。



あなたはアメリカの現地校に短期留学をしています。授業で次の課題が出されました。

アッセンのテーマ：
現在、高齢化社会を迎えたとされています。高齢化社会の問題点と思われる事例を取り上げて、そのことについてのあなた自身の考えを述べなさい。



学習指導要領との整合性 「コミュニケーション英語Ⅰ」より
エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

GTEC問題例 ~Speaking~

S Part D 意見展開問題 身近で社会的なテーマに対して、自分の考えとその理由を述べる。自分の主張を説得力を持って表現する力を測定。

Part Dでは、ある意見に対して自分の考えとそう考える理由を英語で述べてください。はじめに準備時間が1分あります。解答時間は1分です。

Some people think school shouldn't allow students to use their cell phones while at school. What do you think about this? Give at least one reason to support your opinion.

【解答例】
I don't think that students should be allowed to use their cell phones during the school day because the phones might have a negative effect on their education. For example, students might play games during class, or use the phones to cheat during tests. If one student's phone rings, it would disturb the whole class. Therefore, in order to study in an environment free from distractions, cell phones should not be allowed at schools.

学習指導要領との整合性 「コミュニケーション英語Ⅰ」より
ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】 ※赤字: Advancedの出題が対応している箇所を示しています

高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語科・英語編 第1部 外国語編	Advanced
第2章 外国語科の各科目 (1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践できるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。 第2節 コミュニケーション英語Ⅰ ア 概要や要点をとらえたりする。 イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。また、聞き手に応じるように答える。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。 エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。 第3節 コミュニケーション英語Ⅱ ア 事物に関する紹介や対話などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりする。 イ 説明、評論、物語、随筆などについて、速読したり精読したりするなど目的に応じた読み方をする。また、聞き手に応じるように自己や他者の発言を行う。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりする。 エ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどについて、簡潔に書く。	○Speaking Part B 「質問応答問題」 ○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】 ※赤字: Advancedの出題が対応している箇所を示しています

高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語科・英語編 第1部 外国語編	Advanced
第2章 外国語科の各科目 (2) (1)に示す言語活動の効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮するものとする。 第2節 コミュニケーション英語Ⅰ ア リズムやイントネーションなどの英語の音響的特徴、話す速度、声の大きさなどに注意しながら聞いたたり話したりすること。 イ 内容の要点を聞き取り、つなげたり示す語句などに注意しながら話したりすること。 ウ 事実と意見を区別して、理解した伝えたりすること。 第3節 コミュニケーション英語Ⅱ ア 英語の音響的特徴や内容の展開などに注意しながら聞いたたり話したりすること。 イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連などを考えながら読んだり話したりすること。 ウ 未知の語の意味を推測したり背景となる知識を活用したりしながら聞いたたり話したりすること。 エ 説明や報告の表現を工夫して相手に効果的に伝わるように話したり書いたりすること。	○Speaking Part A 「音読問題」 ○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 ○Speaking Part D 「意見陳述問題」

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】 ※赤字: Advancedの出題が対応している箇所を示しています

高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語科・英語編 第1部 外国語編	Advanced
第2章 外国語科の各科目 (1) 生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践できるように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う。 第5節 英語表現Ⅰ ア 与えられた条件に対して、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す。 イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。 第6節 英語表現Ⅱ ア 与えられた条件に合わせて、即興で話す。また、伝えたい内容を整理して論理的に話す。 イ 主題を決め、様々な種類の文章を書く。 ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことにに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する。また、発表されたものを聞いて、質問したり意見を述べたりする。 エ 多様な考え方ができる題材について、立場を決めて意見をまとめ、相手を説得するために意見を述べ合う。	○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 ○Speaking Part D 「意見陳述問題」

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】※表字：Advancedの記述が対応している箇所を示しています

<p>高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語編・英語編 第1部 外国語編</p> <p>第2章 外国語科の各科目</p> <p>(2) (1)に示す活動と効果的に行うために、次のような事項について指導するよう配慮することとする。</p> <p>第5節 英語表現Ⅰ</p> <p>ア プリムやインテンションなどの英語の音素的特徴、話す速度、声の大きさなどに留意しながら話すこと。 イ 内容の要点を示す語句や文、つなかり示す語句などに注意しながら書くこと。また、書いた内容を読み返すこと。 ウ 発表の仕方や発表のために必要な表現などを学習し、実際に活用すること。 エ 聞いたり読んだりした内容について、そこに示されている意見を他の意見と比較して共通点や相違点を整理したり、自分の考えをまとめること。</p> <p>第6節 英語表現Ⅱ</p> <p>ア 英語の音素的特徴や内容の要約などに留意しながら話すこと。 イ 論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や段落の読み、表現の工夫などを考えながら書くこと。また、書いた内容を返読して指導すること。 ウ 発表の仕方や討論のルール、それらの実施に必要な表現などを学習し、実際に活用すること。 エ 相手の立場や考えを尊重し、互いの意見を検討して自分の考えを広げるとともに、課題の解決に向けて考えを共有すること。</p>	<p>Advanced</p> <p>○Speaking Part A 「音読問題」 当該の英文文を読み上げる形式の出題で、状況や英文を理解した上で、正確な発音で音読する力を問うており、左記学習指導要領の英語表現Ⅰの「ア」、および英語表現Ⅱの「ア」の指導の成果の一部を測定できる。</p> <p>○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 目的的な出来事について、話の流れを踏まえて相手に伝わるように状況を説明する力を問うており、左記学習指導要領の英語表現Ⅰの「ウ」、および英語表現Ⅱの「ウ」の指導の成果の一部を測定できる。</p> <p>○Speaking Part D 「意見陳述問題」 身近で社会的なテーマに対して、自分の意見とその意見をサポートする理由を言う力を問うており、左記学習指導要領の英語表現Ⅰの「ア」、および英語表現Ⅱの「ア」の指導の成果の一部を測定できる。</p>
--	---

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 12

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】※表字：Advancedの記述が対応している箇所を示しています

<p>高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語編・英語編 第1部 外国語編</p> <p>第3章 英語に関する各科目に共通する内容等</p> <p>【言語の使用場面の例】 a 特有の表現がよく使われる場面： - 買物/旅行/食事/電話での応答/手紙や電子メールのやりとりなど b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： - 家庭での生活/学校での学習や活動/地域での活動など c 多様な手段を通じて情報を得る場面： - 本、新聞、雑誌などを読むこと/テレビや映画などを観ること/情報ネットワークを活用し情報を得ることなど</p> <p>○Speaking Part A 「音読問題」 a 特有の表現がよく使われる場面： - 買物/旅行/食事/電話での応答/手紙や電子メールのやりとりなど b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： - 家庭での生活/学校での学習や活動/地域での活動など c 多様な手段を通じて情報を得る場面： - 本、新聞、雑誌などを読むこと/テレビや映画などを観ること/情報ネットワークを活用し情報を得ることなど</p> <p>○Speaking Part B 「質問応答問題」 a 特有の表現がよく使われる場面： - 買物/旅行/食事など b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： - 家庭での生活/学校での学習や活動/地域での活動など c 多様な手段を通じて情報を得る場面： - 本、新聞、雑誌などを読むこと/テレビや映画などを観ること/情報ネットワークを活用し情報を得ることなど</p> <p>○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 a 特有の表現がよく使われる場面： - 買物/旅行/食事など b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： - 家庭での生活/学校での学習や活動/地域での活動など c 多様な手段を通じて情報を得る場面： - 本、新聞、雑誌などを読むこと/テレビや映画などを観ること/情報ネットワークを活用し情報を得ることなど</p> <p>○Speaking Part D 「意見陳述問題」 a 特有の表現がよく使われる場面： - 買物/旅行/食事など b 生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面： - 家庭での生活/学校での学習や活動/地域での活動など c 多様な手段を通じて情報を得る場面： - 本、新聞、雑誌などを読むこと/テレビや映画などを観ること/情報ネットワークを活用し情報を得ることなど</p>	<p>Advanced</p> <p>○Speaking Part B 「質問応答問題」 c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写するなど e 相手の行動を促す： - 依頼する/誘うなど</p> <p>○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど b 気持ちを伝える： - 褒む/驚くなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写するなど e 相手の行動を促す： - 依頼する/誘うなど</p> <p>○Speaking Part D 「意見陳述問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 賛成する/反対するなど</p>
--	---

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 13

① 学習指導要領との整合性 (Speaking)

【話すこと】※表字：Advancedの記述が対応している箇所を示しています

<p>高等学校 学習指導要領 (抜粋) 外国語編・英語編 第1部 外国語編</p> <p>第3章 英語に関する各科目に共通する内容等</p> <p>【言語の働き方の例】 a コミュニケーションを円滑にする： - 相手の打つ/聞き返す/聞き返す/言い換える/話題を発展させる/話題を変えさせるなど b 気持ちを伝える： - 褒める/驚く/感謝する/望む/驚く/心配するなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 申し出る/賛成する/反対する/主張する/推論する/仮定するなど e 相手の行動を促す： - 依頼する/誘う/許可する/助言する/命令する/注意を引くなど</p> <p>○Speaking Part B 「質問応答問題」 c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど e 相手の行動を促す： - 依頼する/誘うなど</p> <p>○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 賛成する/反対するなど</p> <p>○Speaking Part D 「意見陳述問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 賛成する/反対するなど</p>	<p>Advanced</p> <p>○Speaking Part B 「質問応答問題」 c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど e 相手の行動を促す： - 依頼する/誘うなど</p> <p>○Speaking Part C 「ストーリー説明問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 賛成する/反対するなど</p> <p>○Speaking Part D 「意見陳述問題」 a コミュニケーションを円滑にする： - 聞き返す/話題を発展させるなど c 情報を伝える： - 説明する/報告する/描写する/理由を述べる/要約する/訂正するなど d 考えや意見を伝える： - 賛成する/反対するなど</p>
---	---

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 14

② C E F R の説明

<p>熟練した言語使用者</p> <p>C2</p> <p>聞いた話や読んだ話、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、概ね論議も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。</p> <p>C1</p> <p>いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、内容を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しつかりとした構成の、詳細な文章を作成することができる。</p>	<p>自立した言語使用者</p> <p>B2</p> <p>自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはおおよそ同等に普通話でやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作成することができる。</p> <p>B1</p> <p>仕事、学校、娯楽などで普通話よりよくなるような話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その必要が話されている地域にたまたま起こり得る、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的な興味のある話題について、流暢かつ簡単な文章を作成することができる。</p>
<p>基礎段階の言語使用者</p> <p>A2</p> <p>ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、物の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単な日常会話の範囲から、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。</p> <p>A1</p> <p>具体的な要求を満足させるための、よく使われる日常表現と基本的な言い回しを理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができる。任んていり、誰と知り合っているか、持たざるもの個人的情報について、質問をし、答えが与えられることができる。もし、相手やゆくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。</p>	<p>Common European Framework of Reference (ヨーロッパ共通枠)の略称、Council of Europe (欧州評議会)が策定した言語共通の到達度指標。能力の段階別指標がCAN-DOテキストで示されており、「言語使用状況、実際の場面や状況、言語を用いて行うべき文脈や条件を簡潔に示した表」になっている。</p> <p>出典：Council of Europe (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通枠指標』吉藤英・大橋理枝 (訳、編) 朝日出版社</p>

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 15

② C E F R の説明

CEFRレベル	Reading	Listening	Writing	Speaking (表現)	Speaking (やり取り)	
C2	複雑な、専門的・学問的・社会的な、あるいは文学的・文化的な文章、多岐にわたる目的で読むことができる。高度な読解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。
C1	高度な読解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	高度な聴解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	高度な聴解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	高度な聴解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	高度な聴解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	高度な聴解力と批判的思考力がある。多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。
B2	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。
B1	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。
A2	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。
A1	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。	多岐にわたる目的で、多岐にわたる種類の音声材料を聞き取ることができる。高度な聴解力と批判的思考力がある。

出典：Council of Europe (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通枠指標』吉藤英・大橋理枝 (訳、編) 朝日出版社 16

② C E F R との対応関係 ※スタンダード・セッティング

CEFRの各技能6レベルと言語テストの各技能スコアの対応づけを示す。Council of Europeが公表しているマニュアルに手法が詳細に掲載されており、GTECは下記の内容を踏まえてCEFRレベルの閾値スコアを判定。

* マニュアルで紹介されている手法例

Table 6.1: Overview of the methods discussed

Method	Section	Class
Tricker-Angeff	6.1	T-C
The Yes-No Method	6.4	T-C
The Extended Tricker-Angeff Method	6.4.2	T-C
The Contrasting Groups Method	6.5.1	E-C
The Booklet Group Method	6.5.2	E-C
The Body of Work Method	6.6	E-C
The Item-descriptor Matching Method	6.7.1	T-C
The Basket Method	6.7.2	T-C
The Bookmark Method	6.8	IRT
A Cato Variation on the Bookmark Method	6.9	IRT

GTECでは、受容技能のリーディングとリスニングでは、Bookmark Method (Council of Europe 2009)を用いている。一方、発音技能のインテイクとスピーキングでは、Contrasting-Group Method (Council of Europe 2009)を用い、技能ごとの関連付けを行っている。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 17

② C E F R との対応関係 ~スタンダードセッティング手法の種類について~

スタンダードセッティングの手法の代表的なものとして下記があげられる。
大きく、①テスト項目中心、②被験者中心、③IRT
これらをベースに分類するものの3つに分けられる。(Council of Europe, 2009)

Method	Section	Class
Tucker-Angoff	6.3.	T-C
The Yes-No Method	6.4.1.	T-C
The Extended Tucker-Angoff Method	6.4.2.	T-C
The Contrasting Groups Method	6.5.1.	E-C
The Borderline Group Method	6.5.2.	E-C
The Body of Work Method	6.6.	E-C
The Item-descriptor Matching Method	6.7.1.	T-C
The Basket Method	6.7.2.	T-C
The Bookmark Method	6.8.	IRT
A Cito Variation on the Bookmark Method	6.9.	IRT

Legend:
 = テスト項目ベース
 = 被験者中心
 = IRT中心

Council of Europe, (2009). A Manual: Relating Language Examinations to the Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment, P61

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 18

② C E F R との対応関係 ~技能ごとに選択した手法~

Listening Reading ~Bookmark Method~

GTECはIRTでスコアを産出しており、テスト項目ごとに困難度の数値が貼りついているため、それを客観的根拠として使い、それに加えてパネルの知見を加えた分析を入れることで、より適正に閾値設定ができると判断。

Speaking Writing ~Contrasting-Group Method~

上記と同じくGTECがIRTを用いてスコア産出している特徴を活かした手法であることに加えて、実際の受検者の産出データを詳細に分析することにより、より現実に即した閾値設定ができると判断。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 19

② C E F R との対応づけ ~受信技能の分析~

Listening Reading ~Bookmark Method~

各問題を1ページあたり1問ずつ配置し、IRTの項目パラメータ情報より困難度順に易~難へと並べた小冊子 (OID: Ordered Item Booklet) を作成し、CEFRの各レベルのBorderlineに該当するページに付箋を貼っていく。

ReadingのBookletイメージ

ListeningのBookletイメージ

※英文素材、スコア、正解記号を記載。

※実際の音声聞くための音声CDも準備。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 20

② C E F R との対応づけ ~発信技能の分析~

Speaking Writing ~Contrasting-Group Method~

Speaking

Writing

受検者の解答を書き起こし、問題IDごと、テスト項目ごとに解答を並べた資料を作成。また、必要に応じて実際の解答音声を開けるように、PCを準備。

GTEC CBTについては、試験エンジンから抽出した受検者の解答を、GTECについては、マークシートのスキャンしたものを資料として使用。

78

82

GTEC
Base Test of English Communication
テスト 問題 & ルーブリック

PC

GTEC
Base Test of English Communication
テスト 問題 & ルーブリック

解答用紙 (GTEC)

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 21

② C E F R との対応づけ ~分析の流れ~

スタンダードセッティングの流れ (各技能共通)

- ① 【全体会】
CEFR各レベルのディスクリプタを見ながら、Borderline Personの英語力のイメージを議論して一致させた。
- ② 【分科会】
2名ずつ複数グループの分科会に分かれ、資料を見ながら分析を行い、仮閾値を設定。
- ③ 【全体会】
再度全体会に集合して複数グループ合同での協議。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 22

② C E F R を活用したウォッシュバック効果

CEFR

学習到達目標

教材作成のガイドライン

シラバス・カリキュラム作成

テスト結果のフィードバック

英語指導・学習への良い波及効果 (Washback) を期待

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 23

② C E F Rを活用したウォッシュバック効果

スタンダードセッティングで決定した閾値をもとに、CEFRのレベルごとに、GTECの問題に合わせた答案例を作成。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 24

③ 大規模受検の対応

名称	GTEC	
	PBT (Advanced/Basic/Core)	CBT
構成概念	英語を使って、英語の使用場面で、タスクを解決する — 『4技能』で思考力・判断力・表現力を測る—	
受験会場	47都道府県	47都道府県
実施回数	年度 5回 (予定)	年度 3回 (予定)
CEFR 測定領域	A1~B2	A1~C1
実施時間	R : 45分、L : 25分 W : 20分、S : 25分	R : 55分、L : 35分 W : 65分、S : 20分
実施形態		

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 25

③ 大規模受検の対応

スピーキングも「指導と評価の一体化」の原則

全員が指導を受ける ← 一体化 → 全員が評価を受ける

↓ 学校授業により実現 ↓ 入試により実現

全国一斉実施のポイント

タブレット機器の活用
回答音声の取得 高等学校の会場利用
離島・僻地での実施

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 26

③ 大規模受検の対応

タブレット活用により「同日・同時刻・全員」でのSpeaking Testを実施。

実施概要

- 実施方法
 - 生徒1人につき1台のタブレット端末・マイク付ヘッドセットを使用
- 備考
 - ・生徒は自校のクラス・机で実施
 - ・交通費など検定以外の出費が不要
 - ・事前の機器の正常稼働の確認
 - ・試験開始前の機器操作中に、自分の発声が録音されているかの確認を仕組みで行う
 - ・オンラインでの実施
 - ・ネットワーク環境に依存せずにかなる場所でも実施することが可能

2016年度
福井県・外部検定試験の受検支援事業
1学年・約7,000名 (全体の90%以上) が一斉受験

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 27

③ 大規模受検の対応

課題とその打ち手

○スムーズな実施運営

タブレット機器の操作手順

○生徒が機器操作を始める ○音声のセルフチェック 音量・録音可否 ○試験官の指示により一斉にスタートボタンを押す

試験前準備 試験開始

試験開始前までの準備段階において、機器が正常に稼働するかの確認プロセスをアプリケーションの中に設けている。もしこの段階で異常があった場合には、別機器での対応を行う運用により、試験開始後のトラブルを未然に防ぐことが可能。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 28

④ 公平性・公正性の担保

9 試験監督及び採点の公平性・公正性を確保するための方策を公表していること。その際、次の(1)及び(2)の要件を満たしていること。

(1) 会場ごとの実施責任者及び各室ごとの試験監督責任者が、受験生の所属高等学校等の教職員でないこと。それ以外の試験の実施に協力する者としては、同教職員の参画を認めるが、この場合には研修や誓約書の提出を要すること。

(2) 受験生の所属高等学校等の教職員が採点に関与しないこと。

出典：文部科学省「大学入試成績提供システム参加要件より抜粋 平成29年11月8日」

課題とその打ち手 ~ 1, 試験監督 ~

○試験監督と採点について

- ・会場共通：検定主催より監督者を派遣。会場責任者を運営責任者として1名配置。また、試験監督員を受験室に常時1名以上配置。
- ・公開会場：人数は会場の規模・受験室数による。
- ・準会場 (高等学校)：人数は受験教室数による。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved. 29

④ 公平性・公正性の担保

課題とその打ち手 2. 採点～

○ライティングとスピーキングの採点の流れ

採点を行うための長年運用し続けてきたマニュアルをもとに上図の通り全答案・回答を2名で採点を行っている。また既定の基準に対し差異があった場合には、上位採点者が採点をし直すプロセスにより、正確かつ効率的な採点・点検を行うことができる基盤を整備。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

⑤ 受検料の配慮・障害のある受検者への配慮

7 経済的に困難な受検生への検定料の配慮など、適切な検定料であることを公表していること。

8 障害等のある受検生への合理的配慮をしていることを公表していること。

出典：文部科学省 大学入試成績提供システム参加要件より抜粋
平成29年11月8日

課題とその打ち手 1. 受検料の配慮～

○低所得者への対応

現段階では、低所得である世帯（例：生活保護の受給）を対象にした割引を想定しており、今後の受検想定（人数・形式）に応じて具体を定めていく。※予定

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

⑤ 受検料の配慮・障害のある受検者への配慮

課題とその打ち手 2. 障害のある受検者への配慮～

方針 大学入試センター試験における「障害等のある受検生への配慮」を参照し民間試験として可能な配慮を行う

問題冊子、および、実施上の主な配慮

視覚	全盲の受検者 点字冊子の提供	弱視の受検者 拡大文字冊子の提供
聴覚	高度難聴の受検者 L/Sの免除	中・軽度難聴の受検者 ヘッドフォンの貸与
養護関係	解答方法の配慮	試験会場・部屋の配慮

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

⑤ 受検料の配慮・障害のある受検者への配慮

視覚

- 大学入試センター試験と同一の配慮事項
- ◆大学入試センター試験にはないが、GTEC（検定回）で行う配慮事項
- ▲大学入試センター試験とは異なる方法で配慮を行う事項

	L	R	W	S	実施・運営上の配慮事項	
全盲	■点字用問題冊子の提供				◆点字問題冊子、および特別タブレット（準備時間・解答時間の配慮有り）の提供	■点字機器などの持ち込み許可
弱視	▲通常の問題冊子、および、拡大文字問題冊子（文字拡大2倍）の提供				◆拡大文字問題冊子（文字拡大2倍）、および、通常タブレットの提供	■受検上の配慮申請書・診断書提出の仕組の提供

補足) ■解答方法に関しては、点字用解答用紙などを用意する。また、試験時間は延長して実施するなどの配慮を行う。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

⑤ 受検料の配慮・障害のある受検者への配慮

聴覚

- 大学入試センター試験と同一の配慮事項
- ◆大学入試センター試験にはないが、GTEC（検定回）で行う配慮事項
- ▲大学入試センター試験とは異なる方法で配慮を行う事項

	L	R	W	S	実施・運営上の配慮事項	
高度・重度難聴	■免除	(通常実施)			※口話にも障害がある受検者 ◆免除 ※口話に障害がない受検者 ◆通常実施（一部のノートについて問題カードを提供） ◆採点拠点へ該当者について連携	■補聴器や人工内耳の装着の許可 ▲実施上の注意点を手話で説明する動画を搭載したタブレットの配布
中・軽度難聴	■ヘッドフォンの貸与 ■強音放送（CDプレイヤーで別室の対応） ■座席の配慮（前列指定）			(通常実施)	■受検上の配慮申請書・診断書提出の仕組の提供	

補足) 高度・重度難聴者に対しては、試験終了の合図は監督者が個別に行う。

Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

⑤ 受検料の配慮・障害のある受検者への配慮

養護関係

- 大学入試センター試験と同一の配慮事項
- ◆大学入試センター試験にはないが、GTEC（検定回）で行う配慮事項
- ▲大学入試センター試験とは異なる方法で配慮を行う事項

	L	R	W	S	実施・運営上の配慮事項
①座位を保つことが困難な者 ②両上肢の機能障害 ③①②以外で解答用紙にマークすることが困難な者	(通常実施)		◆タブレットを配布し、タイプして解答できるように配慮 ※障害の理由により、書字が困難な受検者 ※試験監督者がマークシートに転記	(通常実施)	■1階、障害者用トイレに近い教室 ■介助者の配置 ■特製机、車いす、杖の持参使用。試験室入口までの付添者の同伴、試験場への乗用車での入構。 ※障害の内容により、上記のような配慮を受検者が個別に申請
下肢障害者	(通常実施)				
病弱・発達障害	(通常実施)				

補足) ■解答方法に関しては、口述解答などの対応・配慮も行う。また、試験時間は延長して実施するなどの配慮を行う。■スピーキングの実施では、試験監督が個人情報の入力などの前準備操作部分は代理で行う。

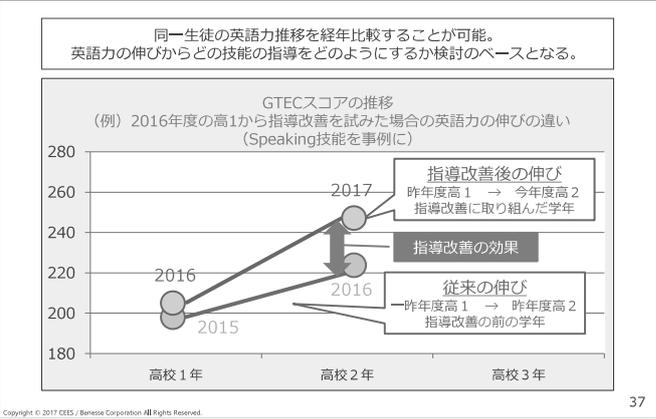
Copyright © 2018 Benesse Corporation All Rights Reserved.

英語民間試験による学校指導のサポート

成長段階に合ったテスト群

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

英語民間試験によるウォッシュバック



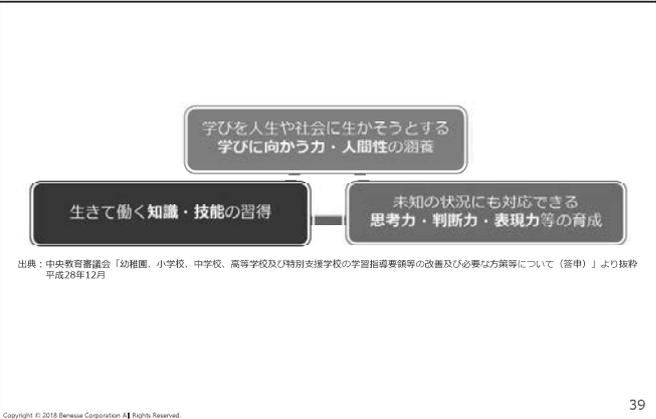
「高大接続システム改革」における英語

高大接続システム改革の全体イメージ-主体性を持って、多様な人々と学び、働くことのできる力を育む-

Copyright © 2018 Benesse Corporation. All Rights Reserved.

出典：文部科学省「高大接続システム改革会議「最終報告」平成28年3月31日

「育成すべき資質・能力の三つの柱」における英語



発表は以上です。
ご清聴いただきありがとうございます。

連絡先：

込山 智之（こみやま ともゆき）
komiya@mail.benesse.co.jp

スピーキングテストの開発・運営から見てきたもの

京都工芸繊維大学教授

羽藤 由美

南風原：

それでは、これから後半に移りたいと思います。後半は、大学、高校の現役の先生方ということになります。最初に羽藤先生、よろしくをお願いします。

羽藤：

よろしくお願ひいたします。今回の入試改革に反対される方には、そもそも「英語4技能の統合育成」や「スピーキングテストの入試導入」自体に反対される方が多いですが、私はどちらにも賛成する者として、大学や高校で、スピーキングテストを開発し、運営してまいりました。本日は、その経験に基づいて、今回の大学入試改革の問題点や改善点について考えたいと思います。

私たちは、リングフランカとして英語を使う能力を測るテストを開発し、大学や大学院の入試に導入することを目標としています。具体的には、京都工芸繊維大学では、コンピュータ方式のスピーキングテストを、京都工学院高校では、テレビ電話で生徒とフィリピンの面接官を結ぶスピーキングテストを、開発・運営してまいりました。大学の方の取り組みは、「教育再生実行会議」等の提言で、大学入試の4技能化がクローズアップされる前から取り組んできたものです。小規模なパイロットテストに加えて、2014年度からは、毎年1回、1年生全員に



テストを実施しています。また、昨年12月には、このスピーキングテストが大学のAO入試に導入されました。

高校での取り組みは、大学での実践を通して、スピーキングテストを普段から実施する必要があると強く感じたことが発端でした。これまでに4回、「英語表現」という科目の学期末考査として実施しました。大学も高校も、まだ「波及効果」について説得力のあるデータはありません。それでも、スライド8ページのように大学のテストの受験後アンケートでは、毎年多くの学生が、「自分の英語のスピーキング力の課題が見つかった」とか、「テストを受けて、スピーキング力を伸ばす意欲が湧いた」などと答えています。高校のテストでも、9ページは昨年9月に、京都市立の全高校の2年生がGTECを受けたときのスピーキングの得点分布です。工業高校でありながら、特に下位層が少ないという結果が出ました。ですから、スピーキングテスト導入の波及効果に

期待すること自体に大きな問題があるとは思えません。

しかし、今回の入試改革はあまりにも拙速で無謀です。特に、これまでの大学入試で最大限に重視されてきた「公正性」や「公平性」が担保できなくなるということが、国民や受験者に知らされていないことは深刻な問題だと思います、

例えば、センター試験では、「監督要領」に基づいて、全国の試験会場で、同時刻に全く同じことが行われ、受験者に鼻血が出たときの対応まで一律であることが求められます。受験生の子どもを持つ大学教員は、入試運営には関わりませんし、テストの印刷や運搬も時代錯誤かと思われるほど厳正に行われています。そして、ひとたび間違いがあればあらゆる角度から非難を浴び、年度をさかのぼって追加合格者を出したり、経済的保証をしたりということになります。現状が良い悪いは別にして、これが、これまでの大学入試の現実です。

ところが、2020年度からは複数の民間試験が導入されることによって、その公正性や公平性が担保できなくなり、それが大きな混乱や入試制度の破綻そのものにつながる可能性もあると思います。最大の不公平は、構成概念、つまり、「何を測るか」が違うテストが併用されることです。試しに、13ページに「体格 CEFR 対照表」を作ってみました。仮に、身長と CEFR、体重と CEFR の対応づけはそれなりに正当性があるとしても、「Cm で測られる身長」と、「Kg で測られる体重」を比べて、170 と 65 は同じ体格だとは言えません。ちなみに、私は、身長は B1 レベルで体重は B2 レベルです。

しかし、これと同様のことがこの国の大学入試で行われようとしています。「英語運用能力」という実体があるわけではありませんから、テストによって測る能力はそれぞれに違います。そもそも、このスコア対照表はよく更新されます。例えば、文科省の山田さまがスライドの 30 ページに上げられた対照表と私の 14 ページの対照表は、GTEC と GTEC CBT の数字が違います。

また英検は、CEFR ができる何十年も前から実施されている、標準化されたテストであるはずですが、それぞれの級が CEFR の枠組みにすっぽり入るという不思議なことが起こっています。

このように、民間試験と CEFR の対応づけ自体が、テスト業者の言いなりのものです。その上に、測るものが違うテストを対応づけるのですから、スコア対照表に科学的な正当性はありません。

さらに、スコア対照表には、中間層の選抜ができないという欠陥があります。例えば、15 ページの広島大学や鹿児島大学のように、「B2 以上」という高いレベルや「A1 以下」という低いレベルで線を引いて、「みなし」や「足切り」に使うことはできるかもしれませんが、16 ページの表のように、私が勤める京都工芸繊維大学をはじめ、多くの大学で選抜しなければならないのは、A2、B1 レベルの受験者です。だからといって、そもそも正当性のない対応表を、さらに正当性のない基準で細分化するようなことを、大学たるものがするべきではありません。

「大学入試英語成績提供システム」には、18 ページのように、24 種類ものテストから

の申し込みがあったそうです。テストの数が増えることで、対応表が輪をかけていい加減なものになることが危惧されます。

例えば、海外からの留学生を選抜する際に、それぞれの国や地域で受験できるテストを受けてもらうしかないという場合もあるでしょう。そういうときには、仕方なく数種類のテストの対応表が使われます。また、日本の大学でも、単位認定などには、教員が付け焼き刃で作ったスコア対応表が使われてきました。しかし、「頑張った生徒には単位をあげよう」という制度と、「一人が通れば一人が落ちる」という入学試験を一緒にすることはできません。

異なる構成概念のテストを併用する時点で、入試制度として破綻しているということは、多くのテスト研究者が指摘しています。にもかかわらず、この愚策がどんどん進められているのは、今回の入試改革の目的が、生徒の中で育てている能力を厳正に測ることではなく、育てていない能力を大学のテストの波及効果で育てることだからです。ならば、なおさら期待される波及効果を生み出すテストを作ったり、選んだりしなければいけないはずですが、今回の入試制度では、そのような検証は全く行われていません。

例えば、20 ページはベネッセのウェブサイト上でGTECの問題例として紹介されているものです。先ほど登壇された込山さまが紹介された意見展開の問題が同じサンプルテストの Part D で、こちらが Part B の問題です。受験者はこのスケジュール帳を見て、“What are you doing this Saturday?”という質問に15秒で答えます。土曜日の欄

には、“grandparent’s house”と“gym”と書いてありますので、“I’m going to my grandparent’s house and gym”というように答えれば、満点がもらえるのかもしれませんが。

もし、GTEC を入試に導入するのなら、また、大きな波及効果を期待するのなら、なおさら、この問題が真に質問を聞いて対応する能力を測っているのか。解答が、どのような採点基準で、どのような採点者に、どのようなプロセスで採点されているのか？最終スコアが、どう算出され、受験者にどのようなフィードバックがなされるのか？そういうことを慎重に検討する必要があると思います。

これは、何の証拠もない私の個人的な感想ですが、この問題の回答を2人の英語話者で並行採点する必要はないと思います。むしろ、“grandparent’s house”と“gym”という2語をキーワードとして、機械採点されていても不思議ではありません。もしそうだとすると、それが悪いと言っているわけではありません。国として大学として、必要な透明性を確保し、すべき検証をしていないことに問題があると思います。

現に、高校の先生方の間では、「GTEC の Part B は完全正答かも」というような憶測が飛び交っています。本当かどうかは別にして、そのことが教育にどのような波及効果を及ぼすかを、国として大学として、検証してからこういうテストを使うべきだと思います。

スピーキングテストは、時間や採点コストのために多くの問題を出せません。問題数が少なくなれば、必然的に妥当性の担保

は難しくなります。歴史の浅いテストが、短時間で多数のテストバージョンを作ろうと思えば、十分なパイロットを経ていない性能の悪い問題が出されることもあります。機械採点が導入されている場合には、測りやすさを優先した問題が出る可能性もあります。

民間のテスト業者が営利を追求するのは当然のことです。しかし、こと大学入試ですから、国や大学は、それを踏まえて必要な検証をしなければなりません。安河内先生のお言葉には反しますが、私は、懸念点があれば払拭することを優先すべきだと思います。また、どのテストを使うかは極めて重要な問題だと思います。

複数の民間テストを使うことで、入試制度が内部で破綻する可能性はほかにもあります。受験者が、合格ラインに到達しやすいテストに走るのは必然です。一方、テスト業者はそういう印象を作り出すことで、自社テストの受験者を増やすことができる立場にあります。例えば、B2 レベルに少しだけ足りない受験者のスコアを水増しし、ボーダー周辺ではない受験者のスコアを下げれば、平均点や標準偏差は維持できますし、ヒストグラムを見ても分かりません。実際にそういうことが行われると言っているわけではありません。国や大学は、そういう可能性を踏まえて適切な対応をしなければならない、そういうことを申し上げています。

採点についても不安な点があります。スピーキングテストの採点は難しいと言われるますが、手間をかければ、納得できる採点結果を得ることはできます。例えば、私たちが開発したテストは、昨年12月の京都工芸織

維大学のAO入試に使われました。受験者は、一次試験に合格した10名で、採点のシミュレーションだけに5人の教員が丸一日かけました。このテストは、25ページに示したようにリングフランカ、つまり、母語の違うもの同士が「共通語」として英語を使う場面で、「伝えなければならないこと」を伝える能力を測るテストです。問題は45秒あるいは60秒で答える全9問です。評定基準は、与えられた課題をどれほど効果的に達成したかを見るTask Achievementと、どれほど流暢に遂行したかを見るTask Deliveryです。

AO入試の採点シミュレーションは、パイロット受験者10名の回答音声を用意し、3つの異なる母語を持つ5人の教員が参加しました。毎回、最初の1問は採点基準を合わせるために使い、第2問以降を各採点者が採点しました。最終スコアは、5人の採点者が付けたスコアの最高点と最低点を除いて、真ん中の3つのスコアの平均を取りました。

シミュレーションを重ねると、私たちが肌で感じる受験者の「伝える力」の違いを、数字で適切に表す評定結果が出るようになりました。つまり、10名の受験者に対して、5人の大学の英語教員が丸一日かければ納得のいく採点はできます。しかし、通常のスピーキングテストでは、それだけの手間や時間をかけることができません。

27ページの表の三角印は、シミュレーションで5人の採点者が付けたスコアに、「外れ値」（つまり、他の採点者から大きく外れる採点）があった場合を示します。外れ値の多さや評価観点間の偏りが、「話す力」を測

ることの難しさや危うさを表していると思います。

毎年、京都工芸繊維大学の1年生に課しているのも、同じ仕様のテストです。しかし、こちらはオンラインの採点システムを利用して、合計で6000から7000集まる回答音声の一つ一つを、日本にいる英語を母語とする採点者と、フィリピンの英会話学校に勤める採点者が並行採点しています。6段階の採点で、両者のスコアの隔たりが1段階だけのときは平均を採用し、2段階以上のときには、上級採点者が採点し直します。

29ページの表は、直近3回のテストで、2段階以上の隔たりが出た評定の割合を示すものです。採点者訓練の改善もあって、不一致率は年々下がってきました。それでも、全体で7.3パーセントの不一致があります。

30ページの表は、今年度の採点の隔たりを、テストバージョンと評価観点別に見たものです。青が、2人の採点者が付けたスコアが完全に一致した割合です。一致率が50%を切るケースがあることもお分かりいただけると思います。

IRTで分析すると、私たちのテストの信頼性に大きな問題はありません。しかし、採点者訓練で採点のずれを強調したために、ペア採点者とのずれを恐れて、中間、3ですよね、中間段階のスコアを多く出す採点者が出るなど、いろいろな問題が舞台裏では起こります。

このように、スピーキングテストの採点の質の維持は、かけた時間と手間、テスト業者から見れば、かけた費用次第という面があります。そもそも、スピーキングテストは

費用対効果が悪く、そのためにTOEFLなどもスピーキングの導入が遅れました。

31ページに、京都工芸大の1年生対象テストの運営費をあげました。ここから費用を削るとしたら、テスト実施に不可欠な費用を削るわけにはいきませんので、採点の質や、テストの性能維持にかかる経費を減らすしかありません。

今回の入試改革では、民間テストの受験料に差があるとよく問題にされます。しかし、受験料が高いほうが信頼できるテストである可能性もあります。スピーキングテストを導入しさえすれば良いというのなら話は別ですが、正確な能力測定や波及効果に期待するのなら、受験料の差が何を意味しているのかを検証する必要があります。

受験者が、スピーキングテストを受ける際の不公平感を許容できるかも、不安材料です。多くの受験者は、テスト中に自分一人が話す状況になるのを嫌います。その一方で、32ページのように受験後アンケートでは、「他の受験者の回答音声で、自分の回答の妨げになった」とか、「意図すれば、他の受験者の回答を真似することができた」などと答えます。回答音声の採点をしていても、当該受験者の回答が、大きな声で話す他の受験者の影響を受けていることに気付くことがあります。

騒音については、ノイズキャンセラーの付いたヘッドセットを使うこともできますが、遮音が十分でない上に、コストがかさみます。私たちは、カンニングを防ぐために、座席が近い受験者には、異なるバージョンのテストを配信するシステムの構築を考えたこともあります。しかし、そうなると、各

問題の開始や終了を同時にしなければならぬという難題が発生します。それで、結局は、一つの会場では同じバージョンを使うことにして、受験者が同時にテストを始めることに細心の注意を払います。先ほど込山さまのお話を伺って、GTEC も同じことをされていることが分かりました。

受験後アンケートからは、不公平感の要因について明確な結論を導くことはできません。もしかしたら、受験者の感じ方の影響のほうが大きいかもしれません。それでも、33 ページのように、同じ部屋でも席の配置次第で不公平感は違います。また、会場ににぎやかな受験者が一人いると、他の受験者の不公平感は一挙に増します。どのスピーキングテストにも、このような不公平感やカンニングの可能性はつきまといますが、これまではインターネット等でさやかられるだけでした。しかし、それが入試となると、「監督者同士の話がうるさかった」とか、「イビキが聞こえた」という苦情がくるもともとの風土がありますから、受験者がどのような反応をするかは予想ができません。業者や国に苦情が殺到する可能性も含めて、十分な対策を取っておく必要があると思います。

センター試験のリスニングと同様に、機器を利用したテストにはトラブルも付きものです。例えば、GTEC はタブレット、私たちは PC を使ったテストですが、先ほど PC を使われることもあるとおっしゃっていましたが、先ほどの込山さまのお話を伺うと、テスト前の音量確認や回答音声の録音チェックは、ほぼ私たちと同じ手順でされているようです。私たちは、回答音声の回

収についても、学生の個人フォルダから、複数の中継サーバを経由して回収するとともに、USB メモリにもバックアップを取るなど万全を期しています。それでも、35 ページに挙げたようなトラブルを避けることはできませんでした。

とりわけ、受験者の回答音声回収できないというのは、あってはならないことです。しかし、これはスピーキングテストには頻発するトラブルで、テスト業者の中では、ひもが切れて誰のものか分からなくなった回答音声“orphan (孤児)”と呼ばれていたりもします。

私たちも、イタチごっこのように問題解決に当たっていますが、タブレットであれ PC であれ、機器を使えばこのようなトラブルは当然起こります。しかし、テスト業者はこのようなトラブルにどう対応したか、どうやってスコアを出したかを開示してはいません。

これまでの入試制度では、問題作成のミスで追加合格者を出すことまでしてきたわけですから、民間テストのトラブルについても、これまでと同様の透明性を担保するか、あるいは、民間試験についてのみ特別な対応を取るかを、国や大学として考え、受験者や国民に明らかにする必要があると思います。

民間試験の利用によって生じる問題はほかにもあります。まず、改革が確実に実行できることが担保されていません。受験者は、50 万人×2 回の 100 万人ではありません。「成績提供システム」に提出できるのが 2 回というだけですから、経済的に余裕のある受験者が何度受験するかは分かりませ

ん。また、誰でも受けられるテストが大学入試に使われるのですから、小学生から高校生まで、受験者数は増大することでしょう。国には、これらを踏まえて、2020年度以降の入試が円滑に遂行できることを担保する責任があるはずです。

今、国の愚策のために、テスト業者は正確な受験者数を読めないままで投資を迫られています。このままでは、受けたのに受けられないというような混乱が起こる可能性もありますが、そのときの対応は検討されていません。そのほかにも、2020年度以降は入試の問題を作る人、採点する人、試験運営に関わる人が、世界、また日本中のあちこちにいることになり、不正や問題漏えいの可能性は一挙に増します。

また、現在、TOEIC等の団体実施のスコアは公式スコアと認められないことが多いですが、高校の教室で、先生が介在して行われるテストが入試に使われることになることで、これまでになかった問題が発生することも考えられます。さらに、テストの作成業者が、テスト対策のサポートをするのもこれまでの入試にはなかったことです。

ほかにも起こりうる問題を挙げれば切りがありませんが、利益もリスクも業者に丸投げするというのでは、国や大学が、受験者や国民に対して果たすべき責任を果たしているとは思われません。

今回の問題は、財界からのプレッシャーがある中、予算をかけずにスピーキングテストを導入するには、民間に丸投げするしかなかったというシンプルな話なのだろうと、私は思っています。しかし、もしそうなら、先行事例を増やすことではなく、制度の

維持に必要な透明性を担保する手段を考えるべきです。「どうか、受験者や教育関係者、テスト業者を振り回すのはやめて、国が本来果たすべきことを果たしてください」とお願いしたいです。

イギリスでは、TOEFLの不正が起こり、ビザ申請にはTOEFLが使えなくなっています。民間試験の名前と「不正」という言葉で検索をかければ、中国や韓国だけでなく、日本でもいろいろな事例があることが分かります。一点刻みの入試はやめて、この中に踏み込んでいくなら、それでも入試制度の維持ができるだけの準備が必要なはずです。準備を怠れば、滅びるのはこの国の入試制度のほうかもしれません。

38ページには、今回の入試改革のオルタナティブとして稚拙な案を挙げてみましたが、今日は時間の都合がありますので、割愛させていただきます。端的に言うなら、「2020年度にこだわらず、もっと柔軟な発想で、堅実なやり方でスピーキングテストを導入しましょう」ということです。

最後に、今日お越しくくださった中でも特に大学関係の皆さま、今、ボールは私たちの手にあります。私たちが、大学という最も **well-informed** であるべき組織を支えるものとして、受験者や国民に対して責任のある決断をしなければいけないと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

南風原：

羽藤先生、どうもありがとうございました。今、GTECのテスト項目への言及がありましたが、たくさんある英語試験の中で、なぜ今日GTEC、ベネッセだけが選ばれた

のかとお思いの方もあるかもしれません。
それは、別にたたくために選んだわけでもなく、持ち上げるために選んだわけでもなく、本日の私と同じように全くニュートラルであります。特別に東京大学のお墨付きというようなことでは全くありませんので、そこは一言お断りしておきたいと思います。

1

2018.2.10
 東京大学大塚研究開発センター主催シンポジウム
 大学入学者選抜における英語入試のあり方をめぐって

スピーキングテストの開発・運営から見てきたもの



京都工芸繊維大学 羽藤由美

2

- ◆「4技能を統合して育むこと」「入試にスピーキングテストを導入すること」を支持する立場から、
 - ◆大学生・高校生対象のコンピュータ方式およびテレビ電話を介したインタビュー方式のスピーキングテストを開発・運営してきた実践に基づいて、
- 2020年度大学入試改革（英語）の問題点を指摘し、改善策を提案します。



3

- ◆ 事業目標：(1)リンガフランカ（共通語）として英語を使う能力を測るテストの開発
 (2)大学・大学院入試へのスピーキングテスト導入

京都工芸繊維大学 (KIT) におけるコンピュータ方式 (CBT) テスト

- ・対象：大学1年生（必修科目Interactive Englishの学年末試験）
- ・受験者：約600名+モニター受験者
- ・評価観点：2つ (Task Achievement [TA], Task Delivery [TD])
- ・1回の実施に複数のテストバージョンを使用
- ・IRTによる標準化（年度内のみ）
- ・受験者に事前・事後アンケート
- ・AO入試への活用（2017年~）



4

京都市立京都工芸院高等学校 (KGH) フロンティア理数科におけるテレビ電話 (インタビュー) 方式テスト

- ・対象：高校1, 2年生（「英語表現 I」、「英語表現 II」の学期末考査）
- ・受験者：2クラス（約55名）
- ・評価観点：4つ (Prepared Speech: Content + Delivery, Spontaneous Interaction: Response + Interaction)
- ・単一のテストバージョンを使用
- ・標準化は行わない
- ・受験者に事前・事後アンケート



5

- ◆ 京都工芸繊維大学 (KIT) におけるCBTスピーキングテストの開発・運営

- 2012年10月 副学長、英語科目担当教員、アドミッションセンター所属教員による研究開発チーム立ち上げ
- 2013年 1月 KITシンポジウム「入試改革を考える：大学入試への英語スピーキングテスト導入の可能性をさぐる」開催
 5月 科研費 基盤研究(C)「大学入試への英語スピーキングテスト導入にむけた調査研究」採択
- 2014年 7月 (株)イー・コミュニケーションズ(CBT開発運営会社)、(株)KJホールディングス(河合塾)との共同研究契約締結
 9月 「スーパーグローバル大学創成支援」事業採択
 10月 テストスベック確立、CBT実施システム・オンライン採点システム完成
 初めてのパイロットテスト実施
- 2015年 1月 第1回(2014年度)学部1年次生全員対象テスト実施
 9月 株式会社QQ English(オンライン英会話レッスン提供会社)との共同研究契約締結
- 2015年10月 情報科学センター所属教員、テスト理論および心理統計の専門家(学外)を加えた第2次研究開発チーム結成
- 2015年12月 第2回(2015年度)学部1年次生全員対象テスト実施
 国内と並行してフィリピンでの採点開始
 英語必修科目成績へのスコア組み込み開始
- 2016年 5月 科研費 基盤研究(B)「入学試験や定期考査に利用できる英語スピーキングテストシステム構築のための指針策定」採択

6

2016年10月 CBTライティングテスト実施システム開発着手

- 2017年 1月 第3回(2016年度)学部1年次生全員対象テスト実施
- 2017年 3月 オンライン採点システム改修完了
- 2017年12月 AO(ダビデン)入試グローバル枠への導入
- 2017年12月 第4回(2017年度)学部1年次生全員対象テスト実施
- 2019年 6月 博士前期課程推薦入学特別(3×3)入試への導入 (検討中)

回数 (実施年度)	実施日	受験者数	テストバージョン
第1回 (2014年度)	2015年1月20~22日	1年次生 551 モニター 45 合計 596 (延べ686)	Ver. 1, 2, 3
第2回 (2015年度)	2015年12月20日	1年次生 575 モニター 69 合計 644 (延べ713)	Ver. 4, 5
第3回 (2016年度)	2017年1月7, 8日	1年次生 568 モニター 53 合計 621 (延べ727)	Ver. 6, 7, 8
AO入試 グローバル枠	2017年12月2日	一次試験合格者 10	-
第4回 (2017年度)	2017年12月16, 17日	1年次生 567 モニター 77 合計 644 (延べ798)	Ver. 9, 10, 11

※モニター：異なるバージョンを受けた受験者のスコアを統計的に等化するのために、全バージョンを受ける受験者

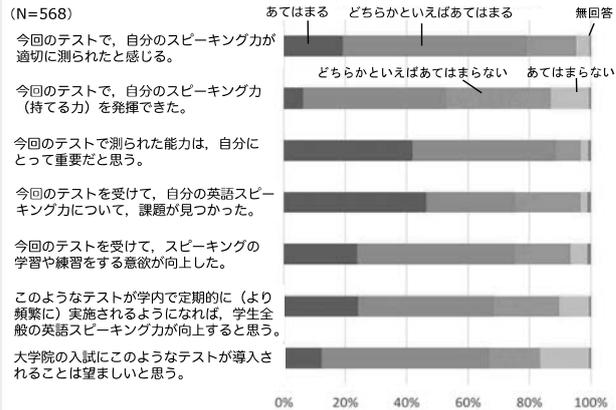
◆ 京都工学院高校 (KGH) におけるテレビ電話方式スピーキングテストの開発・運営
フロンティア理数科2クラス(62名)対象、「英語表現 I および II」の各学期末考査

	1年生1学期末	1年生2学期末	1年生3学期末	2年生1学期末	2年生3学期末
実施日	2016年7月4日	2016年11月28日	2017年2月6日	2017年6月26日	2018年2月13日 (予定)
受験者	58名	58名	54名	54名	-



◆ KITテスト受験者のテストに関する印象 (2017年度受験後アンケートの結果より)

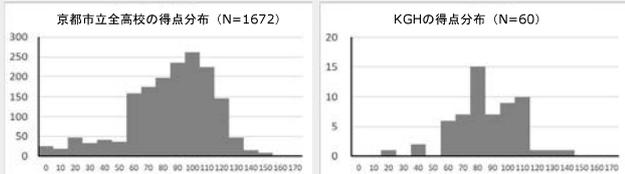
(N=568)



あてはまる どちらかといえばあてはまる 無回答
 どちらかといえばあてはまらない あてはまらない

今回のテストで、自分のスピーキング力が適切に測られたと感じる。
 今回のテストで、自分のスピーキング力(持てる力)を発揮できた。
 今回のテストを受けて、自分のスピーキング能力は、自分にとって重要だと思う。
 今回のテストを受けて、自分の英語スピーキング力について、課題が見つかった。
 今回のテストを受けて、スピーキングの学習や練習をする意欲が向上した。
 このようなテストが学内で定期的に(より頻繁に)実施されるようになれば、学生全般の英語スピーキング力が向上すると思う。
 大学院の入試にこのようなテストが導入されることは望ましいと思う。

◆ KGHテスト：民間試験（スピーキング）の結果からみた波及効果の可能性

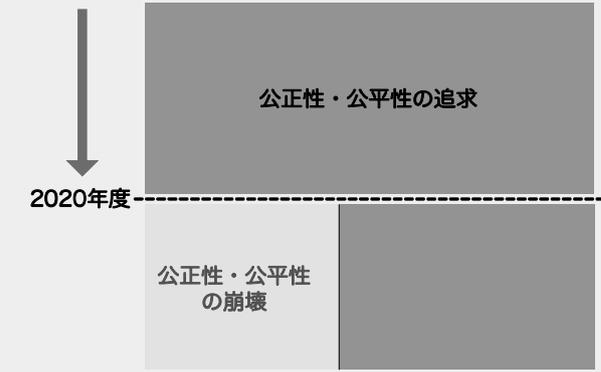


京都市立全高校の得点分布 (N=1672) KGHの得点分布 (N=60)

下位層が少ない (1組3人、2組0人)

「やり方次第で、大きな正の波及効果を期待できる」という手応え

とはいえ、今回の英語入試改革はあまりにも拙速で無謀



2020年度

公正性・公平性の追求

公正性・公平性の崩壊

【主眼】 阪大の入試ミス 独善性が事象長引かせた 産経ニュース 2018.1.14 05:01

京大、昨年の入試で出願ミス 17人が追加合格 外部からの指摘で判明 朝日新聞 2018年02月02日 09:09:07

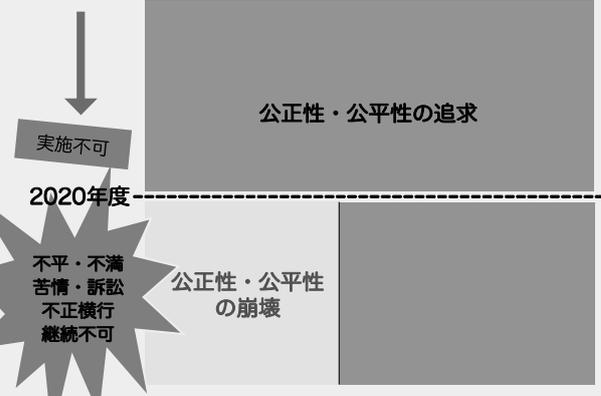


NHK NEWS WEB 2018年(平成30年)1月7日

文科省「大変遺憾、再発防止徹底を」

文部科学省は「受験生への影響は計り知れず、大変遺憾だ。今後、より詳細な報告を求めたい。これから本格的な入試の時期を迎えるが、再発防止を徹底してほしい」と話しています。

混乱・破綻の可能性



2020年度

公正性・公平性の追求

公正性・公平性の崩壊

実施不可

不平・不満 苦情・訴訟 不正横行 継続不可

最大の不公平：構成概念（何を測るか）が異なるテストの併用

体格CEFR 対照表

2017年度対照表 2017年7月10日更新

体格 CEFR	身長 (Cm)	体重 (Kg)	CEFR	Cambridge English	英検	GTEC	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive (12歳以上)	TOEIC L&R TOEIC S&W
C2	190~	85~	C2	CPE (200+)				8.5 9.0				
C1	180~	75~	C1	CAE (180~199)	1級 (2630~3400)	1370	7.0	4.00	800	95		1305~1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	170~	65~	B2	FCE (180~179)	準1級 (2304~3000)	1190	5.5	334	600	72	341	1085~1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	160~	55~	B1	PET (140~159)	2級 (1980~2600)	960	4.0	226	420	42	322	790~1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	150~	45~	A2	KET (120~139)	準2級 (1728~2400)	690	3.0	150	235	300	385	785~ L&R 225~ S&W 180~
A1	~149.9	~44.9	A1	3級5級 (419~2200)		689	509	2.0				200~390 L&R 120~ S&W 80~

◆ 正当なスコア対照はできない

2017年度対照表 2017年7月10日更新

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive (12歳以上)	TOEIC L&R TOEIC S&W
C2	CPE (200+)				8.5 9.0				
C1	CAE (180~199)	1級 (2630~3400)	1190	1160	5.5	334	600	72	341
B2	FCE (180~179)	準1級 (2304~3000)	1290	1360	6.5	399	755	94	352
B1	PET (140~159)	2級 (1980~2600)	960	880	4.0	226	420	42	322
A2	KET (120~139)	準2級 (1728~2400)	690	510	3.0	150	235	300	385
A1		3級5級 (419~2200)	689	509	2.0				

- ・ 頻繁な更新 ・ 各テスト業者の申告によるCEFRとの対応
- ・ 科学的正当性のないテスト間の対応

(1000歩譲って) 同じものを測っていると仮定しても、各レベルに属す膨大な人数が同時期にすべてのテストを受けなければ、正当な対応表は作れない。(←不可能)

◆ 「見なし」「足切り」しかし、中間層には利用できない

鹿児島大学、国立大学で全国初の取り組み

鹿児島大学は2017年度入学入試の外国人入試及び一般入試（前期日程・後期日程）において、外部英語試験でスコアを測ってきた大学の入試センター試験【英検】の得点を採点とみなす承認制度を創設。鹿児島大学で初めて大学入試で取り入れた。対象となった学習・学科は前期の選考で大学入試センター試験【外国語】を課す学部・学科等です。

この制度では、対象となる英語検定を判定する外部英語試験で基準スコア及び等級を満たした場合、受験する年度の入試センター試験の【外国語】の得点が満点となります。ただし留意する点は、外部英語試験のスコアを提出する場合でも、大学入試センター試験【外国語】を受験する必要が有ることです。

外部試験	基準スコア・等級
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	FCE 以上
英検 (英検国際試験)	準1級以上
GTEC CBT	1250点以上
IELTS	5.5以上
TEAP	334点以上
TOEFL iBT	72点以上
TOEFL Junior Comprehensive	341点以上
TOEIC L&R及びTOEIC S&W	1095点以上 (L&R 785点以上及びS&W 310点以上)

広島大学、英検準1級で大学入試センター試験英語がみなし満点に

英語外部検定試験の一般入試等での活用について

1. 趣旨
英語外部検定試験の活用は、英語力に優れた学生を、外部英語検定試験の結果に基づいて、入学試験の英語科目で満点とする。また、外部英語検定試験の結果に基づいて、入学試験の英語科目で満点とする。また、外部英語検定試験の結果に基づいて、入学試験の英語科目で満点とする。
2. 対象学部
この制度は、前期日程・後期日程の一般入試（前期日程・後期日程）において、外部英語試験でスコアを測ってきた大学の入試センター試験【外国語】の得点を採点とみなす承認制度を創設。鹿児島大学で初めて大学入試で取り入れた。対象となった学習・学科は前期の選考で大学入試センター試験【外国語】を課す学部・学科等です。
3. 留意事項
この制度では、対象となる英語検定を判定する外部英語試験で基準スコア及び等級を満たした場合、受験する年度の入試センター試験の【外国語】の得点が満点となります。ただし留意する点は、外部英語試験のスコアを提出する場合でも、大学入試センター試験【外国語】を受験する必要が有ることです。

◆ 志願者を選抜できない

京都工芸繊維大学入学者のTOEIC (L&R) スコア分布

CEFR	TOEIC (L&R)	2015年度入学生 [2015/4/25実施] (n=588)	2016年度入学生 [2016/4/16実施] (n=598)	2017年度入学生 [2017/4/15実施] (n=589)
C2		0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
C1	945~	7 (1.2%)	1 (0.2%)	1 (0.2%)
B2	785~	6 (1.1%)	6 (1.0%)	14 (2.4%)
B1	550~	141 (24.8%)	153 (25.5%)	173 (29.4%)
A2	225~	408 (71.8%)	438 (73.1%)	398 (67.6%)
A1	120~	6 (1.1%)	1 (0.2%)	3 (0.5%)

※ だからといって、対照表を細分化することで、ミスを重ねないで！

II. 換算表

【工業系の加点の換算表】

前期	後期	2技能級	TOEFL		GTEC		実用英語技能検定(英検)
			Junior comprehensive	iBT	Junior standard	for Students 3技能	
30点	15点	830	352	85	—	1400	1級
16点	8点	785	341	72	80	1250	準1級
4点	2点	550	322	42	740	675	2級
2点	1点	350	300	25	640	485	準2級

【注】加点する際には、各入学者選考試験の配点を参照しなす。

【情報工学科の算換の換算表】

前期	後期	2技能級	TOEFL		GTEC		実用英語技能検定(英検)
			Junior comprehensive	iBT	Junior standard	for Students 3技能	
50点	満点	600	325	45	770	740	1100
45点	満点	550	320	40	740	675	1000
40点	満点	478	316	36	740	610	900
35点	満点	400	310	30	670	550	800
30点	満点	350	305	25	640	485	700
25点	満点	300	300	20	620	425	600

【注】英検1級、準1級の場合、一般入試(前期・後期)及び推薦入試で50点以上の得点を得た学生は、推薦入試1級で満点とする。

九州工業大学「平成25年度入学入試センター試験(前期・後期日程、推薦入試)「推薦入試」で採用される英語外部検定試験の換算表について」[No.8]より <https://www.kyutech.ac.jp/archives/003/201510/kanzan.pdf>

◆ 正当なスコア対照はできない

大学入試英語検定システムへの参加の申込みのあった学校・検定試験一覧 (n=1,110)

学校・検定試験実施主体	実施・検定試験種別	ウェブサイト
1. 1	トランスリット英語検定	
2. 2	CE Proficiency	
3. 3	CI Advanced	
4. 4	BE First for Schools	
5. 5	Cambridge Assessment: English	http://www.cambridgeenglish.org/
6. 6	ケンブリッジ大学英語検定試験	
7. 7	BE Proficiency for Schools	
8. 8	AE Test for Schools	
9. 9	AE Key	
10. 10	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
11. 11	TOEFL iBT Academic	http://www.toefl.com/academic/
12. 12	International English Language Testing System (IELTS)	http://www.ielts.org/
13. 13	TOEFL Listening & Reading Test of Computer Based Test (CBT) (聴き取り・読解)	http://www.toefl.com/cbt/
14. 14	TOEFL Speaking & Writing Tests	http://www.toefl.com/speaking-writing/
15. 15	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
16. 16	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
17. 17	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
18. 18	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
19. 19	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
20. 20	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
21. 21	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
22. 22	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
23. 23	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/
24. 24	TOEFL iBT	http://www.toefl.com/

【注】1～4は大学入試英語検定システムへの参加の申込みがまだありません。

2020年度英語入試改革の目的

- × 選抜 (在る能力を厳正に測る)
 - 波及効果 (そもそも育っていない能力を測る)
- ↓
- 「やること」自体が目的化

波及効果を求めるなら尚更、当該の教育コンテキストを踏まえて、期待される波及効果を産み出すテストを開発・運営(選別)する必要がある。

Benesse GTEC: https://www.benesse-gtec.com/ta/speaking/sp_speaking

出題例 | Part B 質問を聞いて応答する

Part Bは全部で4問です。与えられた情報をもとに、質問に対して英語で答えてください。はじめに準備時間が10秒あり、そのあと質問が始まります。解答時間はそれぞれ15秒です。

What are you doing this Saturday?

Your: _____

準備時間 00:09

"What are you doing this Saturday?"

妥当性の検証が棚上げされている

出題例 | Part B 質問を聞いて応答する

Part Bは全部で4問です。与えられた情報をもとに、質問に対して英語で答えてください。はじめに準備時間が10秒あり、そのあと質問が始まります。解答時間はそれぞれ15秒です。

What are you doing this Saturday?

Your: _____

準備時間 00:09

"What are you doing this Saturday?"

レベル	スコア	試験形式/タイプ/ジャンル	Speaking content
7	170	Advanced Plus Lesson	大学での授業 教員と学生が 教わる
6	150	Advanced Learner	海外留学中の 日本人の日記 の書き出し
5	130	High Level 聴取と読解 レベル	海外の旅行記 の書き出し
4	110	Intermediate Learner 聴取と読解 レベル	海外旅行記 の書き出し
3	90	Pre-Test Level 聴取と読解 レベル	海外旅行記 の書き出し
2	70	Pre-Intermediate Learner	海外旅行記 の書き出し
1	0	Pre-Test Level	海外旅行記 の書き出し

どのような問題が出され、どのような採点基準で、どのような採点者に、どのようなプロセスで採点されるのか？ 最終スコアがどう算出され、どのようなフィードバックがされるのか？

スピーキングテスト

- 問題数が少ない (多様な問題を出せない)
- 妥当性の担保が難しい
- 短時間で多数のテストバージョンを作ろうとすれば、パイロットを終わらない性能の悪い問題も出る。
- 機械採点が導入されている場合は、測りやすさを優先した問題が出る可能性もある。

※ 作問・テスト運営・採点・評価のプロセスの総合的な検証が必要

懸念点があっても、2020年の大学入試改革への歩みを止めるな！

一番大切なのは、どの試験を使うかではなく、2技能が4技能かです！

4技能—新テスト・高品質4技能試験対策サイト「2020年内覧会」による、2020年4技能入試で日本人の英語学習は激変する！」より

◆ 合格しやすいテストをめぐる混乱の可能性

複数のテスト：どのテストを受けたかで合格ラインへの達しやすさが異なる (印象)

受験者：合格しやすいテストに走る

テスト業者：スコア分布をコントロールする (当該テストを受験した合格者を増やす) ことができる立場

【例】ボーダー周辺の受験者の点数を合格ラインまで上げ、ボーダーの周りでない受験者の点数を下げておけば、平均点や標準偏差は維持できるし、ヒストグラムを見ても分からない。

※ する・しないは、利益を追求するテスト業者の良心に任されている。

※ 業者がテストの品質保持のために、関連情報を秘密にすることは許されている。

受験者や国民は、事実を理解し納得しているか？

国や大学は、訴訟でも争える覚悟や準備をしているか？

話す能力を測ることの難しさ (採点の質と受験料のトレードオフ)

KITテスト 実施実績

回数 (実施年度)	実施日	受験者数	テストバージョン
第1回 (2014年度)	2015年1月20~22日	1年次生 551 モニター 45 合計 596 (延べ686)	Ver. 1, 2, 3
第2回 (2015年度)	2015年12月20日	1年次生 575 モニター 69 合計 644 (延べ713)	Ver. 4, 5
第3回 (2016年度)	2017年1月7, 8日	1年次生 568 モニター 53 合計 621 (延べ727)	Ver. 6, 7, 8
AO入試 グローバル枠	2017年12月2日	一次試験合格者 10	-
第4回 (2017年度)	2017年12月16, 17日	1年次生 567 モニター 77 合計 644 (延べ798)	Ver. 9, 10, 11

※モニター：異なるバージョンを受けた受験者のスコアを統計的に等化するために、全バージョンを受ける受験者

採点シミュレーション (英語教員5名、約8時間)

【KITテスト】 リンガフランカとしての英語 (ELF) を使う能力を測る

↓
**テストのあらゆる面に反映 (タスクタイプ、視覚・聴覚プロンプト、
 評価基準、評価者、評価プロセス)**

問題番号	タスクタイプ	プロンプト	リハーサル(秒)	回答(秒)	21 st century skills: Learners should ... (試される21世紀スキル)	Spoken language proficiency: Learners should ... (試される言語能力)
1	Imagine 想像する	Photo 写真	0	45	think creatively and demonstrate originality 創造的に考え、独創性を表現する	speak coherently and clearly 流暢を立てて明確に話す
2	Compare 比べる	Two photos 2枚の写真	0	45	analyse alternatives and draw reasonable conclusion 選択肢の特徴を突きわけ、合理的な結論を下す	compare, decide and justify 比較し、決断し、理由を述べる
3	Identify different values 価値観の違いを見きわめる	Audio dialogue & photos 会話音声 & 写真	0	45	understand diverse values and perspectives 多様な価値観や見方を理解する	summarise and contrast different points of view 異なる意見を要約し、対比する
4	Take position 立場を定める	Audio dialogue & photos 会話音声 & 写真	0	60	evaluate arguments and decide own position 対立する意見を客観的に評価し、自らの立場を定める	state and justify own position 自らの立場を明らかにして、正当化する
5	Identify problem 問題を発見する	Audio dialogue & photos 会話音声 & 写真	0	45	interpret information to identify problem 情報を適切に解釈して、問題を発見する	describe problem 問題を説明する
6	Problem solving 問題を解決する	Audio dialogue & photos 会話音声 & 写真	0	60	find solution to problem 問題の解決法を思い出す	propose solution to problem 問題の解決法を提案する
7	Plan and organise 立案する、企画する	Nil なし	60	60	identify and organize component parts to make a plan 目標達成に必要な成分や中点を突きわけ、計画を立てる	suggest a plan and series of steps to achieve goal 目標達成に向けた過程や中点を提案する
8	Persuade 説得する	Nil なし	60	60	promote and influence 奨励して、物事を動かす	persuade by presenting a positive image and message 肯定的なイメージやメッセージを伝えて、物事を説得する

KITテスト 評価基準

Score	Task Achievement (80% weighting)	Task Delivery (20% weighting)
5	The task is achieved, being developed with a satisfactory level of detail.	- The delivery is mostly confident. - Given time is well used without obvious problems with delivery such as intrusive pauses, hesitations, or repetitions.
4	The task is mostly achieved, with some supporting detail in places.	Given time is quite well used despite some problems with delivery such as slow rate of speech, pauses, hesitations, or repetitions.
3	The task is minimally or partially achieved, being supported with some basic detail.	General meaning comes across, but given time is not effectively used because of problems with delivery such as slow rate of speech, pauses, hesitations, or repetitions.
2	The task is addressed, but there is no or very little supporting detail.	The speaker keeps trying, but problems with delivery (e.g. slow rate of speech, pauses, hesitations or repetitions) allow a very limited amount of meaning to be conveyed.
1	The task remains essentially unachieved, though there may be some relevant words.	The speaker gives up trying, or problems with delivery (e.g. slow rate of speech, pauses, hesitations, repetitions) are fatal to meaning coming across.
0	There is no relevant contribution (e.g. content is entirely unconnected to topic).	The speaker does not start the task (e.g. s/he is silent, utters only fillers, or just says, 'I don't know').

話す能力を測ることの難しさ (採点の質と受験料のトレードオフ)

【KIT: AO入試 採点のシミュレーション】

- 項目数 9, 受験者数 10, 採点者数 5
- TA, TDの2観点について評価
- 第1問目の評価は評価者訓練として使用

TA (80点満点)										TD (20点満点)											
TA	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	E8	E9	E10	TD	E1	E2	E3	E4	E5	E6	E7	E8	E9	E10
Q1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Q1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Q2	-	-	▽	▽	-	-	-	-	▽	▽	Q2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Q3	-	-	▽	▽	-	-	-	-	▽	▽	Q3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Q4	-	-	▽	▽	▽	-	-	-	▽	▽	Q4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Q5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	Q5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Q6	▽	▽	-	-	-	-	-	-	▽	▽	Q6	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽
Q7	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽	Q7	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽
Q8	-	-	-	-	-	-	-	▲	▽	▽	Q8	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽
Q9	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽	Q9	-	-	-	-	-	-	-	-	▽	▽

外れ値 ▽: 平均より12点以下の評価者あり
 ▲: 平均より12点以上の評価者あり

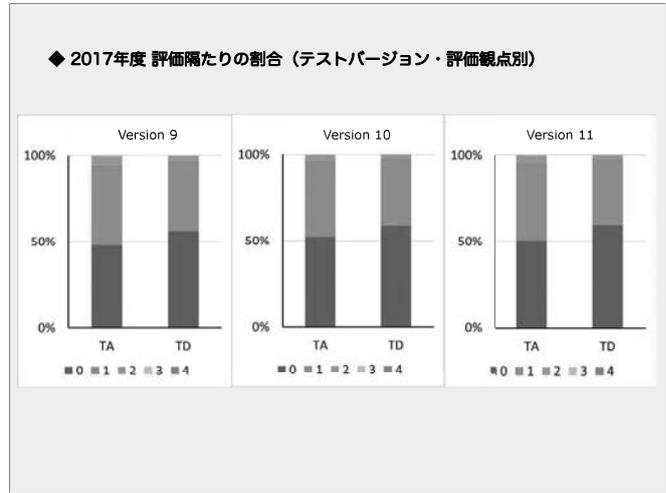
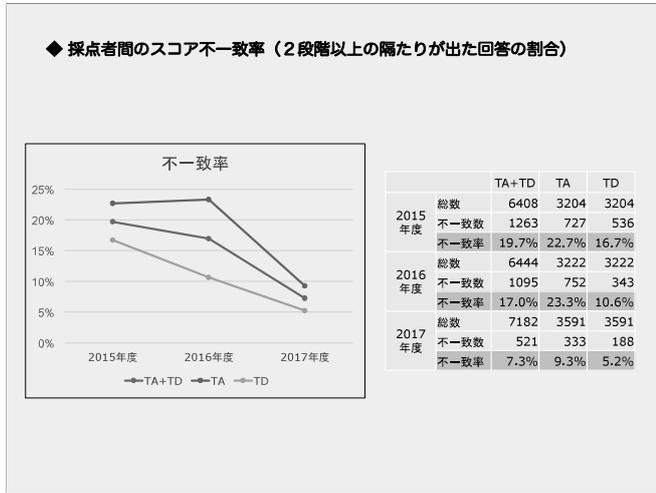
▽: 平均より3点以下の評価者あり
 ▲: 平均より3点以上の評価者あり

KITテストのオンライン採点

	第1回 (2014年度)	第2回 (2015年度)	第3回 (2016年度)	第4回 (2017年度)
実施日	2015/1/20-22	2015/12/20	2017/1/7, 8	2017/12/16, 17
評価件数	12,060	12,816	12,888	14,364
採点者	NS 7名 (日本在住) NNS 7名 (日本語話者)	NS 9名 (日本在住) NNS 9名 (フィリピン在住)	NS 9名 (日本在住) NNS 9名 (フィリピン在住)	NS 9名 (日本在住) NNS 9名 (フィリピン在住)
採点方式	1人の採点者が、均等に 配分されたバージョンの 9問すべてを採点	1人の採点者が1問のみ を担当して、全テストを 採点	1人の採点者が1問のみ を担当して、全テストを 採点	1人の採点者が1問のみ を担当して、全テストを 採点

評価件数: 採点対象延べ人数×問題数(9)×評価観点(2)

- 1つの回答について2人 (NS, NNS) の評価者が、TA, TDを6段階で評価
- 2段階以上の隔たりが出た場合は、上級評価者が採点し直す
- 隔たりが1段階の場合は、平均を採用



◆スピーキングテストは費用対効果が悪い → 採点の質の維持が困難

2017年度 KITテスト運営費

- ・1年生567名対象
- ・システム構築、PC・ヘッドセット等の機器、教員労賃、会場費等含まず

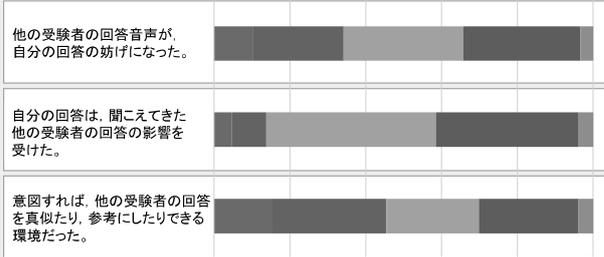
合計	3,548,425円
採点経費	1,543,500円
(NS採点者, NNS採点者, 上級採点者への支払い)	
パイロット・モニター受験者謝金	152,625円
受験者一人あたり	約6,258円

※ 受験料を抑える=採点の質を下げる

受験者は受験環境の不公平感を許容できるか？

【KITテスト受験者アンケート】

N=1,700 (2015年度: 575, 2016年度: 557, 2017年度: 568)

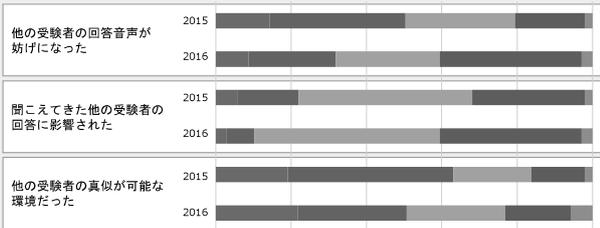


■当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまらない ■当てはまらない ■無回答

受験者は受験環境の不公平感を許容できるか？

- 2015年度：席を空けずに詰めて着席
- 2016年度：一席ずつ間隔を空けて着席

情報演習室Aで受験した学生の回答 (2015: N=141, 2016: N=69)

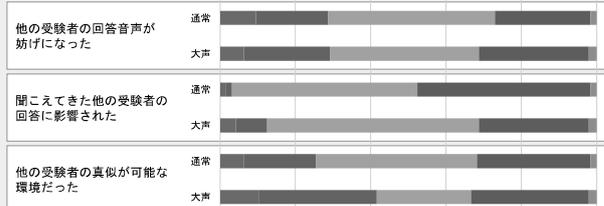


■当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまらない ■当てはまらない ■無回答

受験者は受験環境の不公平感を許容できるか？

- 2017年度：実施日、部屋、席の配置は同じ
- 2回目のテスト時に、感情を込めて大きな声で回答する能力の高い受験者がいた。

同じ日に情報演習室Bで受験した学生の回答 (通常: N=63, 大声: N=48)



■当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまる ■どちらかと言えば、当てはまらない ■当てはまらない ■無回答

◆トラブルは不可避

【KITテスト】回答音声回収のための万全策にもかかわらず

- 2014年度 3名：全9問を回収できず (ヘッドセットのケーブルがPCから外れていた? →事前の確認強化)
- 3名：途中の1問だけ回収できず (モニター上で次の問題に移るためのボタンをダブルクリック → システム改修)
- 2015年度 1名：最後の3問を回収できず (テスト中にヘッドセットケーブルがPCから外れた?)
- 2016年度 1室：テスト開始直後に外部から工事(ドリル)の騒音(→事前の確認強化)
- 2017年度 1名：新調したヘッドセットのマイク初期不良 (録音された回答音声が聞き取りにくい →事前の確認強化)
- 1室：能力の高い受験者が大声で回答
- 採点：改修したオンライン採点システムの誤作動(一部スコア上書き →改修)
- その都度、当該受験者に知らせて個別に対応 + 問題解決

民間試験：2020年度までの大学入試、および、並行して行われる他の大学入試との折り合いをどうつける？ 同等の透明性を担保する？ 民間試験についてのみ特別な合意形成をはかる？

◆民間試験の利用によって生じうる新たな問題

- ・ 予想できない受験者数(50万人×2回ではない)への対応
- ・ 問題漏洩(例：国内外で入試運営に直接かかわる膨大な人数の管理は困難、問題情報を得るための受験を妨げることもできない)
- ・ トラブルや不正行為への不適切な対応や隠蔽
- ・ 団体実施の管理不備
- ・ 問題管理(例：テストが何バージョンあるのか？ 同じ問題にあたることはないのか?)
- ・ テスト作成業者とテスト対策サポート業者の一体化

国や大学は、受験者や国民に対する責任を果たしているか？

Student visa system fraud exposed in BBC investigation
By Richard Watson
BBC Panorama
10 February 2014

BRITISH COUNCIL 日本
英会話スクール 各種試験 英語留学 イベント情報 フォート 英語

急増する中国人の不正入試、米大学に難題「替え玉受験」も

韓国のTOEIC試験で新手の替え玉受験が...
理統治のこの国ではかわいいもの
Record china

ただ一つ言えるのは、「組織も個人も変わらなければ減びる」ということです。
(月刊私塾界2017年12月号より)

4skills—新テスト・英語民間4技能試験対策サイト「実用内閣省が語る、2020年4技能入試で日本人の英語学習は激変する！」より

◆オルタナティブの提案

公正・公平を期すなら、テストの一歩化、国の管理下の運営が不可欠

- ・大学入試センターがテストスペックを作成、業者に運営を委託
- ・まず、スピーキングテストだけで実施することもできる

「入学者のXX%は英語4技能のテストを経た者とする」というような枠を設け、具体的な運用は各大学に任せる

- ・多様な入学者選抜が行われる
- ・口頭のコミュニケーションが苦手な志願者（聴覚・発達障害等のある者を含む）は別のルートを選ぶ

- ↓
- ・入学者の多様性を高める
 - ・複数の大学の併願がしやすくなる
 - ・国として投資を煽った民間テスト業者への責任を果たせる

厳正な査察をする制度やノウハウを構築する

- ・査察に協力できなければ認定しないというような厳しさが必要

大学は
well-informed decisionを！

hato@kit.ac.jp
大学入試への英語スピーキングテスト導入プロジェクト
<https://kitspeakee.wordpress.com>

スピーキング入試でスピーキング力は上がるか

東京大学准教授

阿部 公彦

南風原：

続けて阿部先生、お願いします。

阿部：

阿部です。よろしくお願いします。多分、皆さんお疲れですよ、そろそろ。いつものことながら発表となるとつい原稿をがむしゃらに書いてしまい、原稿用紙 50 枚ぐらいになったので、とても時間内に収まらないと思います。なので、原稿そのものと要点をパワーポイントにしたものを紙で配ってあります。足りない、喋れなかった分は後で読んでいただければと思います。今の、羽藤先生のお話があまりに強烈だったので、もはや私が言うことは何もないかというくらいなのですが、ちょっと気分転換に音を少しだけ聞いていただきたいと思います。

(音声 1) (音声 2) (音声 3)

南風原先生には、こんなもん使うなと言われたんですけども、ちょっと流しちゃいました。何で、これをわざわざ今流したのかは、後でご説明します。これを、ちょっと今、一端、にぎやかに流したところで本論に入りたいと思いますけれども、あらためてよろしくお願いします。

本日は、どうなんですかね。たくさんの方にお越しいただいて、多分、賛成派、反対派ともに殺気立っているんじゃないかと思ってドキドキして来たんですけど、それでも



ないようなので、ちょっと安心したような物足りないような感じですが。本日の私の報告のタイトルは、『スピーキングテストでスピーキング力は上がるか』となっています。もともとは、『スピーキングテストでスピーキング力が落ちるのはなぜか』としてありました。ただ、こういうタイトルにしたところ、周囲からまあまあと言われて少しトーンダウンしたという次第です。

このタイトルからもお分かりだと思いませんけれども、私は、スピーキングそのものが不必要だと思っているわけでは決してありません。ペラペラ喋れるようになりたいと思っている方もいらっしゃると思いますし、そういう方は、是非、お望み通りペラペラしゃべれるようになっていただければとも思っています。また、今の英語教育は役に立たないのではないとか、役に立つ英語を教えろとか、英語は使えないとか、そういうふうに産業界の方々が声を上げてしまう気持ちも分からないではないです、賛成するか

どうかは別として。ただ、業者さんのスピーキングテストを導入しても、むしろ、スピーキング力も、役に立つ英語の力も落ちるとというのが私の持論です。もちろん GTEC さんをはじめ、業者試験そのものが劣悪だと思っているわけではありません。適切な使われ方をすれば、日本社会の中で一定の役割を果たしますし、今、現在、既に大学でも利用されているところが多いということですから、意味はあると思います。ただ、既にそれだけ利用されているのに、何で、じゃあ、英語力が上がらないのかということがあまり考えられていないのは少し不満です。たとえば TOEIC、TOEIC というけれど、TOEIC の受験生が世界で一番多いのは日本なのに、どうして日本の英語力が世界一にならないんだろう？という素朴な議論が出てこないのか。どうして TOEIC を受ければ日本人の学生の英語力は上がるっていう議論になるのかがよく分かりません。まあ、それは、実際に誰も検証していないことですから、今、あまり言ってもしょうがないことです。

ただ、私が今、問題にしたいのは、業者試験を大学入試に流用するっていう考え方がやっぱりおかしいんじゃないかと。そこですね。そこをやっぱり問題にしたいと思います。

そういう意味では、きわめて非現実的な政策に翻弄されている業者の方々も、被害者の一部ではないかと私は思います。業者の方だってイケイケのところもあると思いますけれども、ただ、こういう形で業者試験が使われるとなると、それに乗らなければビジネスが成り立たなくなるのは明白です。

つまり、国のお墨付きが与えられたところと与えられていないところっていう、今までなかった線引きがされてしまう。これは、どうにもおかしいことじゃないかと私は思っています。それぞれの業者試験さんのメリット、デメリットはあると思いますし、役割がそれぞれ違うと思います。それを、一緒にして入試に使うっていうことの意味が、全然検討されていないというふうに考えています。

そういうわけですので、本日の私の報告は、今の、ペラペラ喋れるようになりたいとか役に立つ英語を教えろっていう問いにも、「そんなのはどうでもいい」「黙れ」っていうふうに突っぱねるのではなく、なるべく向き合いつつも、じゃあ、どうしたらいいかということも考えるとこまでいきたいとは思っていますが、多分、時間的には、前半の問題点指摘で終わってしまうのじゃないでしょうか。

それで、今までのお話で、文科省の山田さんをはじめ、皆さんすごくよく考えられた政策というか、よく考えられたご発表と言ったほうがいいですかね。いろいろと、私もなるほどと思うところもなきにしもあらずでした。と同時に、どうなんだろうと思うところもあります。取りあえず、今の段階で一つ二つだけそこに触れておきたいと思いません。

これは有名な経済学者が言ったことだと思うんですけども人間のシステムはどっちみち完璧なものにはなりえないので、うまくいっているという幻想をふりまくよりは、うまくいっていないところをきちんと見つけ出すことが大事になります。今ま

でのご発表を聞いていて、素晴らしい素晴らしいという話がほとんどだったんですけど、素晴らし過ぎて、私は何か変だなという気がするんですね。絶対問題があるはずなのに、問題点が全然触れられていない。あるいは、問題点があったとしても、何かそこは語られないっていうのが、私は非常にいかがわしいと思っています。

それで、これは是非、例えば、GTEC さんであれば、さっきこれも羽藤先生が既に触れたことですが、スピーキングの採点をしていて、どういう事故があったのか、どういふところがうまくいかなかったのか、っていうところを言ってもらえないと、全く信用できない感じがします。うまくいったことばかり言うのは、おかしいんじゃないかということです。

それからもう一つ。今、2月10日ですから、試験の真ただ中なのですね、私の周囲は面接試験ウイークなんです。昨日も、一人1時間半ぐらいかけて修士論文の面接をしたばかり、その前には、修士課程の入学試験で一日10人ぐらいの面接してもうクタクタでした。面接となると、もう10人もやるとほんとクタクタになるんですね。会場にもご経験のある方が多いのではないかと思います。そのときのことを、今、生々しく思い出すんですけども、面接会場に入ってくる学生さんというのは、どの人もものすごく緊張していて、こっちの相槌を打つタイミング一つで、しゃべり方が全然変わったりします。スピーキングっていうのはそういうものかということです。逆に言えば、それだけしなければ、スピーキングの試験としても意味がないのじゃないかというこ

とでもあります。それだけデリケートじゃなきゃ意味がないし、面接の現場では、そういうことを実際にやっていくわけです。向こうがすごい緊張してやってきて、こっちも、その緊張が乗り移って、体に取り付いて何かよく分かんない澱だか呪いだかみたいなものになって、今でも何か疲れが取れないです。

私が言いたいのは、受験生の一人一人の顔っていうのが、面接試験っていうのは見えてくるんだけど、その話がほとんど聞かれなかったというのが、ちょっと物足りない。つまり、おおまかなシステムのことは話題に出たんですけども、個々の対応がどういふふうになっていくかっていうイメージが全然見えてこないっていう印象を私は持ちました。それぞれの受験生の個性がもろにでるのがスピーキング試験なのだけれども、それぞれをどうしたいのか。今のままだと、出来る生徒にも、スピーキングが得意でない生徒にも、不幸なシステムとなるように感じています。これは、ひょっとしたら、まだいろいろとお話をお持ちの方もいらっしゃるかもしれないので、具体的な実感がわくような形で是非それをおうかがいしたいです

それで、実際に私が用意した話のほうに移っていきたいと思いますけれども。スライドの2ページで示した公平性の問題は、羽藤先生が大体お話になるだろうと思って、あんまりしゃべらないつもりでしたし、実際割愛するつもりです。

ただ一つだけ。業者試験の問題管理のことは今まであまり触れられていないように思うので、話題にしておきたいと思います。

業者さんによっては問題を持ち帰り禁止にしているところもあるようです。その理由のひとつは、問題の一部を再利用しているからでしょう。また同じ業者がそうした過去問を問題集として販売していることとも関係しているかもしれない。あるいは、テストとテスト対策をセットで営業利用しているということもあるかもしれません。でも、もし入試で使うのであれば、全ての過去問を開示しなければいけないのではないのでしょうか。今の阪大や京大で問題になっているように、入試は検証の目にさらされます。いろんな人が血眼になってアラを探して、これはおかしいと文句をつけたりする。

なぜ開示しないといけないかというと、もし非開示にしたとしても、かならず塾などの対策業者は問題を手に入れようとするからです。業者試験は誰もが自由に受験できますから、過去問の持ち出しなど、その気になればいくらでもできる。そうすると、過去問にアクセスできる人とできない人との間に、明らかに不公平さが生ずる。

ところで、さっき個別の受験生の顔が見えないっていう話をしたときにひとつ触れておきたかったことがあるので、今のうちに補足しておきます。すごく大事なものは、上位、中位、下位という層をそれぞれどうしたいのか、ということだと思います。さっき音を流したのが、ここでつながってくるんですけども。みなさん、さっきの音を聞いていかがだったでしょう。音声の問題もあると思いますけれども、よく分かんないという方が多かったと思います。私だって、突然あれを聞かされたらよく分かんなかったと思います。でも、多分、あのレベルの音声が

聞こえるようにならないと、「仕事で使える英語」というふうにはならないと思います。あれ何だったかという、一つ目が、スターウォーズですね。「フォースの覚醒」です。二つ目が、ラグビーのシックス・ネーションズ。イタリアがイングランドからトライを奪った瞬間ですね。私は、この時期、いつも2カ月だけwowowに入ってシックス・ネーションズを見るという、ちょっとモニターカスタマーみたいな人間なんですけれども。そこから採取しました。三つ目は、BBCのRadio4という番組のIn Our Timeっていうやつで、これすごく面白いし授業でも使いやすいのでもしご存じじゃなかったらおすすめです。毎週テーマを変えてかなり骨太な議論をする番組です。この回のテーマはキケロ。ciceroですね、英語で言うと。これは、内容的にはそれなりに骨があるものでした。では、どうしたらいいか。私としては「あれが聞けるようになるには何をすべきか」というところから逆算して「仕事で使える英語」ってものを考えたらいんじゃないかと思っています。実はああいうものでも、コンテキストの中で聞くとけっこう聞けるんですね。映画を見ながらあの部分が出てくれば分かるし、ラグビー見ながら、映像が流れてれば分かったりする。もちろん、キケロはちょっと難しいかもしれない。でも、キケロの話だって分かっていたらもっと分かるかもしれない。だから、コンテキストとか背後の物語というのが大事なわけです。そもそも日本語のスイッチを英語のスイッチに切り替えるというところからコンテキストづくりは始まっています。さっき日本語の中で急に聞いてわからなく

ても、もともと英語的な環境にいたらもっとわかるかもしれない。

ただ私が同時に言いたいのは、現実の英語は、コンテキストから切り離されている場合が非常に多くなってきています。たとえば、パーティーでワイワイ喋りたいとかいう人がいましたけれども、パーティーでワイワイとかってというのは、大体誰かの話に横から入っていったりするわけですね。ということは、「仕事で使える英語」で大事になるのは、自分がどういう状況に置かれていて、その状況と、自分がどう取り組むかということ短時間に把握する能力だということです。それがわかっていなければ会話なんてできない。コンテキストということ言えば、たとえば自分にどういうことが期待されているかっていうのが分からないでしゃべっても意味が無い。私が今、このシンポで「持ち時間 20 分」と決まっているのに、延々1 時間喋ったら石が飛んでくると思います。そういうことも含めてのコンテキストなのです。

ということは、「仕事で使える英語」ということでスピーキング能力、スピーキング能力って、やたらと発声としての英語が期待されてるみたいですけども、そもそも、日本語能力でそういうことが試される機会が非常に少ないのですね、われわれは。だから、まずは日本語でそういう能力を鍛えるべきではないかと思うわけです。それも単なる形式的なプレゼンテーションとかディベートではなくて、きちんとものを読んで考え、それを言葉にするというプロセスをへるべきだと私は思います。その延長で、英語でもそれをやろう、というのが適切な順

番ではないでしょうか。形だけプレゼンテーション英語でやりますとか、ディベート英語でやりますとか言っても全く身に付かないですし、そもそもモチベーションもないですし、道は遠いと思いますね。だから、仕事で英語をっていう人がいらっしゃるのであれば、もうちょっとその辺のところを考えないといけない。なぜだか英語の行政にかかわっている方は英語という土俵の中で「コミュニケーション」という旗をふるのがお好きなようですが、それがゆがみにつながっていると私には感じられます。

もうあまり時間がなくなったので、なぜ「スピーキング試験でスピーキング力が落ちるのか」という点、最後にもうちょっと触れておきます。まず、スピーキングの困難の大きな原因である「心理的な抵抗感」がテスト化でむしろ高まると私は言いたい。これは、私も『史上最悪の英語政策』という本でも書いてますけれども、要するに、日本人が英語をしゃべろうとするときに、何よりハードルになるのは気持ちの問題だということです。さっき、これも羽藤先生がちらっとおっしゃってましたけれども、人前で喋るっていうのにすごく抵抗感を持つ子が結構いるんですね。自分の声が人に聞こえること自体が嫌らしい。気持ちが分からなくもないですが。ということは、ほんとうはその抵抗感を取り除くことが大事なのに、テストで採点するとなったら、多分、さっきベネッセさんの説明でもありましたけれども、音を一つ一つチェックしたりするわけですね。

今、“s” 言わなかったねとか、今、“a” と “the” を間違えたねとか、単語の現在形と

過去形違ったねっていうのを、多分、採点することになるのではないのでしょうか。後で、じゃあ、ベネッセさんにご説明をいただきましょう。ちがうのですか？ ただ、CEFRのグレード分けを見ても、いずれは採点することになってきますよね。

いずれにしても、自分の言葉が採点されているということを意識した途端に、硬くなるということは誰もが感じる。私だってそうです。今、採点されているとしたら、多分、硬くなると思います。本来、生徒に英語を発声するための勇気をもたせるためには、変な緊張感や抵抗感をとりのぞくべきなのに、どうして「テストを課せばできるようになる！」という方向に行くのか、私はどうしても納得できません。

それからもう一つ、とても大事な問題があります。さっき障害者の話が出たにもかかわらず、このポイントが触れられなかったのは驚きです。何しろ発声を伴う試験がこれほど一律に大規模なレベルで行われるのは今までになかったことです。日本語ですら、今まで行われたことがないんです。そのことから生じうる問題がほとんど語られていない。聞こえないという話だけではなくて、しゃべることに困難がある人は非常に多いです。まずは音がはっきり言えないっていうレベルとか、例えば、方言が気になるとかそういうレベルから始まって、もうちょっと深刻な緘黙症とかですね、自閉症、吃音、それから構音障害というものもあります。構音障害というのは器質的な問題である種の音がうまく言えないという症例です。

つまり、発声をめぐる障害だけでもさまざまなレベルのものがあるのですが、それ

に加えて、もっと微妙な問題もある。言語障害という形で臨床的に認定されなくても、例えばスライドの6ページに書いてあるように、対人恐怖症とか強迫神経症、緊張症とか、試験官との相性とか、うつ病とか抑うつ状態とかさまざまな要因でうまくしゃべれない、発声できないということがある。実際に面接をすると、そういう事情でうまくしゃべれないという人はとても多いです。われわれの場合は、たとえ多少の心理的なハードルがあっても、自分の専攻に来る適性があるかどうかというレベルで見ているので、おまけして見ることもできるし、その向こうの能力を見ればいいという考え方もできるけれど、スピーキングそのものをテストするとなったら、判断ができなくなると思います。いったいどうしたらいいのでしょうか。病気の部分をなしにして評価するのか、そもそも、臨床的な認定がある人はちょっと上げ底にするのかとか。そんなことが可能なのか、とか。いずれにしてもそのあたりが全く考えられていないと思いますね。ここは是非議論していただきたいと思います。

ともかく実際に受験にまきこまれる親や受験生の中で、業者試験導入ですよ、という話を聞いて喜んでる人はほとんどいないです。「スピーキングができるようになりますよ」って言われて喜ぶ人はいるのかもしれないけど、業者試験が始まりますよという話で、「わーい」という人はいない。ほとんどの人は青ざめてたし、そもそもほとんどの人が事情をよく知らないんです。これも大問題だと思います。いつの間にかするすつと決めちゃった。

それもこれも、やはり「発声」をテストされることに対する拒絶反応が強いということでしょう。さっきのようなクリニカルな例ではなくとも、日本語話者でたとえば“th”の音がうまく言えないって人は、とても多いです。多分、日本語の発音の特性との関係だと思えます。それから、これもよく皆さんご存じだと思いますが“see”と“she”“スィー”と“シー”の違いが言えないというのもよくありますね。あと“f”の音ってみんなちゃんと言ってないんですね。“full”とか“fulfill”っていうのは、“フル”とか“フルフィル”じゃないんですね。“ful”とか“fulfill”。そう言わないと、結構、通じない。

じゃあ、それを全員にやらせるようにするのか。でも、例えば、読み書きのレベルがすごく高い人でも、そういう音が言えなかったりするってことがあるわけですね。そういう人は、おそらく必死になって何とか言えるようにしたいということになるかもしれない。でも、努力しても意外と言えないようにならないんですね。では、そのために語学学校に通うとか、クリニカルな治療を受けるとか、そういうことまでする必要はあるのか。治療を受けても、どうなるかわかりません。でも、そういうことがありうるわけですね。

そうすると、そうした発声の部分の点数と、読み書きの部分の点数の比重をどうするかという話になってくる。もし読み書きの能力がものすごく高い人がいたとしても、thの音がうまく言えないせいで自信がなくなって「スピーキングテスト」全般の点が低い。で総合点だけみると、せっかく読み書きのレベルが高いのに、その能力が反映され

ていないように見えてしまう。今回の政策の中で「4技能均等」とか「4技能をバランスよく」という話がさも美しいことのように連呼されてますが、この人たちはこのことの意味をほんとうに考えてるのかなあと私はずっと疑問に思っています。均等って何なのでしょう？ 授業の時間数？ 教科書のページ数？ 単に試験の配点？ で、あなたはちょっと読解レベルが高すぎるから、もうちょっと読解を低くして、スピーキングの低いレベルにそろえようね、とか言うのでしょうか？ そもそも、「4技能」というフレーズをさも良きことであるかのように言い続ける感覚が、私にはよく分からない。4つにわけるのは、単に便宜上区別してるだけですよね。別に脳の中が4つにわかれているわけではないし、基底にある英語の運用能力、たとえば語彙力とか構文理解力とかはどの技能でも共通して必要になるものです。「4」というのは単に能力の「あられわれ」の問題です。本質的にわかっていないものを、無理して4つにわけても無駄な形式主義に陥るだけです。何で「4技能」などという看板がイデオロギーになるのかが、私はいまだに、頭が悪いせいかわからないのです。とにかく「4技能」看板というのは、何だか文句のいいようがない善きことのようにかかげられて、ベネッセさんも、朝日新聞の大きな広告で、センター試験の日に、『これから4技能』って書いてある。でも、4技能が何？ どうするの？ ってことがよく分かんなかった、正直。そこは是非、またお伺いしたいです。均等っていうのは、ベネッセさんのお考えかどうか分かりませんが。

政策推進者の理屈としては、テストを 4 つに分けて行っている試験を採用するだけで 4 技能できるようになるとかいう話なんですけれども、まったくおかしいことです。例えば、じゃあ、『CEFR の標準に即してます』っていうお答えが返ってくるかもしれませんが、日本人の高校生で、例えば、ネイティブスピーカーの高校大学レベルのものが読めますという人は一定数いると思いますけれども、他方で、その人たちはスピーキングとなると小学生レベルかもしれない。その現実の中で、「均等」ってことを言ってどういう意味があるのでしょうか。それだったら、できるところ伸ばしたほうがいいじゃん、私は思います。まさに、仕事で使える英語ということであれば、読解力とか書く能力が高くなければ全く意味がないですし、そういう能力の偏りのおもしろさを無視して 4 技能 4 技能って言葉だけが一人歩きしている。

もう一つだけ。「4 技能」連呼の結果、スピーキングのことばかりが注目され、時間の争奪戦になって、ほかの技能に割く時間がなくなる可能性があります。英語運用能力の基底の部分がおろそかになるわけです。さっきの音を流したのは、ああいうリスニングを目標地点にすえるためには、単語の知識とか、構文の知識がなければ、全く駄目だということも示したかったからです。英語ってというのは、皆さんご存じだと思いますけれども、しばしば、否定するものと肯定するものを並べて行って、こっちは駄目だけどこっちはいいんですっていう言い方をするんです。ところが、構文や話の方向の取り違いをやると、逆の意味に取っちゃうこ

とがいくらでもある。だから、生半可な英語の知識で、名詞の意味だけ拾っておけば大体言っていることが分かるなんていうのは、全く間違いですね。知的な議論であればあるほど、議論の方向性を理解しないと、とんでもない致命的な勘違いをしてしまうことがある。そういうことを頭に入れないで、どうやって仕事に使える英語をマスターするんだろうというのが、私の主張です。

やはり時間が足りなかったのですが原稿にして書いてありますので、もしお時間があれば、後で眺めていただければと思います。ありがとうございます。(拍手)

南風原：

どうもありがとうございました。私もいろいろな場で意見表明してきましたけれども、その都度、私の意見は、大学人としてはマイルドなほうだと言ってきたんですけれども、それが今、よくお分かりになったかと思えます。

1

スピーキングテストで スピーキング力は上がるか？

東京大学人文社会系研究科・文学部 准教授 阿部公彦

2

(0) 公正性・公平性の欠如

- 公平な採点の問題
- 採点者の質の問題
- 出題や採点の秘密性の問題
- 責任の所在(出題ミスや採点ミスがあったときに誰が誰に対して責任をとるのか)
- 出題や採点事故の管理(これだけ回数が多い試験を誰がチェックするのか。)
- 過去問の扱い
 - 現在、テスト問題の持ち出しを禁じたり、過去問として販売している業者もあるが、入試に使うなら過去問はすべて無償で公開の必要あり。可能なのか？
 - そうしなければ試験情報が一部対策業者に漏る可能性大で、不公平。(対策業者は何かの形で問題を手直し、一部受験に教えるという状況が考えられる)

3

概要 (1) スピーキングテストの問題点

- 1 スピーキング困難の大きな原因である心理的抵抗感は、テスト化でむしろ高まる。
- 2 発声を伴う試験を一律に課すことの弊害が十分に検討されていない。
- 3 スピーキング導入とセットの「4技能」看板の問題
 - (1) 「4つ均等」の根拠は？ 「均等」の意味は？
 - (2) 試験を4つに分けるだけで英語力が高まる？
- 4 時間の争奪戦が生まれ、他の技能に割く時間が減る
- 5 受験生が過度で無駄な試験対策に走る。
- 6 そもそもスピーキング能力とは何か？

4

概要 (2) ではどうしたらいいか？の提案

- 1 英語の音のシステムに慣れ、リズムを体で体得する。
- 2 スイッチ切り替えとコンテキスト把握
- 3 「コミュニケーション」概念の混乱をおさめる
- 4 「人間科」(ヒューマニティーズ?)の設置

5

1-1 スピーキング困難の大きな原因である心理的抵抗感は、テスト化でむしろ高まる。

- 日本人の子供がスピーキングを苦手とする大きな理由の1つは、心理的ストレス。
- スピーキングの訓練はリラックスさせ、ストレスを少なくした状況で行われるべき。
- 細かな発音や文法をチェックされる「テスト」に向けて練習されるのはむしろ逆効果では？
- テストでの体験やテスト準備がトラウマになる可能性も大。

6

1-2 発声を伴う試験を一律に課すことの弊害が十分に理解されていない。

- そもそも「発声」を伴う大規模なテストの影響やノウハウが蓄積されていない。母国である日本語ですら、こうしたテストはない。
- ささまざまな「障害」をどう扱うか？: 緘黙症、自閉症、吃音、構音障害。グレーゾーンも多数あり。
- 発声を伴うテストはメンタルな要素もからみやすい。明確な言語障害以外でも、対人恐怖症、強迫神経症、緊張症、試験官との相性...
- 医療的な診断がくだっていないくとも、一時的に問題が発現することも多い。どう対応するか？
- 日本語話者特有の器質的困難の可能性: thやsが言えない。bとv、lとrが言い分けられないなど。高学歴の人、知的レベルや読み書き能力が高い人でもある。
- 困難のある人の「点数」が低くなることの非合理性。
- 困難解消のための過度な努力やコストは無駄(希望者だけで十分)。
- 困難解消のための機会の不均衡(地域格差、所得格差)

7

1-3 「4技能」看板の問題。

- 「四つ均等」の根拠は？ 「均等」の意味は？
- 何を「均等」に？ 授業時間？ 配点？ 教科書の頁数？
- 順序や難易度の違いについての無理解
- 教員や生徒の適正に応じて柔軟な対応するのが現実的
- 「能力の均等」を目指すことの珍妙さ。
 - 高校生の読解能力は英語話者の高校生・大学生レベルにも達する。それを小学生以下の「スピーキング力」にそろえる？ (現状の方向)

8

- そもそも「4つ」にわけるのはテストをつくる側の都合もある。
 - 難易度とテストデータの安定化がしやすい。
 - 問題作成をルーティン化・マニュアル化しやすい。
- 現実の英語では、ひとつの技能が純粋にあらわれることはまずない。むしろ複合的に使われるのがふつう。
 - 読んで書く、聞いて書いてしゃべる、しゃべって聞く、など。
 - ＝4つばらばらは、むしろ「現実の英語」「役に立つ英語」から遠くなる。
 - ＝なぜセンターのアクセント問題を廃止？ センター試験を劣化させ、業者試験に誘導するため？
 - 学習の際にも、リスニングと作文や、音読と読解を組みあわせるなどした方が効率的。
 - 「4技能」についてきちんと考えている人は、むしろ技能間の連携・連動を考えている。

1-4 時間の争奪戦になり、他の技能に割く時間が減る

- ▶ただでさえ英語の時間は足りないのに、さも目新しいことをするかのような錯覚を生むことで、必要不可欠な基礎訓練が足りなくなる。各種業者試験を見てわかるように、そもそも単語を知らなければ話にならない。
- ▶現状、すでに時間の取り合い。
- ▶授業を無理に英語でやることの不効率
- スピーキングを一律に課すより、余力とやる気のある生徒に、希望すれば金銭的負担なしでスピーキング訓練を受けられるシステムをつくるべき。

1-5 受験生が過度で無駄な試験対策に走る。

- ▶ペーパーテストとは大きくやり方が違う一方、試験そのもののヴァリエーションは少ないので、「対策」がものを言う。
- ▶業者ごとの方式の違いに頭を悩ませることの不毛さ。
- ▶すでに塾などは「4技能」のマジックワードをかかげつつ、実際にはスピーキング対策を売りにした営業攻勢をかけている。
- ▶テスト形式対策にエネルギーを使うよりは、英語の勉強に時間をかけるべきでは？

1-6 そもそもスピーキング能力とは何か？

- ▶「パーティワイワイ」ができないのはなぜ？
- ▶重要なのは、相手への「関心、興味。
 - 配慮、意図の読解。
 - 相手の文化に対する知識
 - 双方向的な感性
- ▶知的動機づけや自発性の伴わない形式的なスピーキング練習は非効率的で、将来的にも役に立たない
 - 後述

(2) ではどうしたらいいのか？の提案

- 2-1 英語の音のシステムに慣れ、リズムを体で体得する。**
- ▶アクセントの重要さの再認識。日本語と英語の音韻システムの違いにこそ注目。
 - ▶退屈な練習をどうやらせるか、に工夫の余地あり。
 - ▶英語に触れる時間を増やす。
 - ▶家庭学習で数値目標をきめ、リスニングの練習。

2-2 スイッチ切り替えとコンテキスト把握

- ▶意味がとれない、音が聞こえない原因の多くは、コンテキストの不明からくる
- ▶選別能力が高い人は、コンテキスト把握能力が高い。
- ▶「流れ」、「コンテキスト」、「物語」を把握する能力を身につけるには？
 - 「想像力」を鍛える。
 - 背景知識を得る。
- ▶はじめて出会った「部分」から、背景を想像する練習。(通常の国語や英語の読解問題も役に立つ)
- ▶リスニングに関しては、もともと問題を洗練させる余地あり。雑音の中の会話や、細切れの断片を聞く練習。(アクセントを聞く練習ともからむ)
- ▶答を一つに決めない練習の可能性。
- ▶スピーキングの練習はこのあとで十分。大学に入ってから？ 高校まではむしろ基礎力を充実させる。

2-3 「コミュニケーション」概念の混乱を解消する ①西洋文化崇拝と「英語」の宗教化

- ▶コミュニケーション概念の曖昧化の障害
- 1) 教員と生徒間の信頼関係。善意。愛(!)？
- 2) 教員と生徒間の、双方の意図の具体的な認知？
- 3) 教員と生徒間の口頭のやり取り(日本語での)？
- 4) 教員と生徒間の英語によるやり取り？
- 5) 単なる英会話の授業？

立派な文書がてんこ盛りの学習指導要領(鳥飼玖美子『英語教育の危機』(ちくま新書)の指摘)

- = 英語の授業が道徳や「疑似宗教」の肩代わり？
- > 石原千秋の国語批判も参照。国語の道徳化。
- = 学校や部活の役割肥大ともバラレル
- = 英語授業への過度な期待
- = 背後には、依然として西洋文化崇拝に根ざした「英語信仰」？「4技能」のカルト化？
- = 英語論争に宗教戦争のきな臭さがともなるのもそのため？(阿部、少しだけ反省……)
- = 英語教育をめぐる「百家争鳴」状況と、「信じる者は救われる」の心理

②オーラルはまず日本語から

- ▶そもそも日本語でも、「スピーキング」の練習は最近行われるようになったばかり。
- 英語的な「オーラル」の文化を身につけたいなら、ヨーロッパ古典古代の雄弁術や哲学的ダイアローグ、近代の会話術、社交術、polite Englishといった伝統を参照して、「対話的な知」に触れるべき。
- = 科学的知見と言語の整備もセット。
- = ダイナミックな知の実践がoralityと深く結びついたのが西洋近代。
 - > 最近の英語教育の「反知性主義」は状況を悪化させるばかり。
- = 欧米の「コミュニケーション」観の背景には、ヒューマンイズムの伝統。
- = 小説の文章も「ずっとしゃべっている」。文章のスタイルにもオーラルのリズムが反映。
- ▶日本では、そうした「オーラルの知」の伝統がないため、プレゼンやディベートが表層的で形式的なものになりがち。
- ▶内容との有機的な統合の欠如が問題。議論を踏まえ、思考を促し、そのあとではじめて「やり取り」がくる。無内容な「スピーキング技術」を妄想するのはまさに勘違い。

2-4 「人間科」(ヒューマニティーズを学ぶ)の設置

- ▶ 「英語」の授業は語学の訓練と割り切り、知識吸収と訓練に重点。
- ▶ 適切なやり取りの能力は、知的な関心と結びついてはじめて鍛えられるので、人間について広く関心を持ち、本を読み、思考し、批判するプロセスを中心にすえた枠をつくって、その延長上で口頭のやり取りや作文の練習をさせる。→ 大学教育にもつながる。
- ▶ ただし、生徒の興味に応じて、町歩き型、パロディ、創作&合評...などの「おもしろ発見型学習」の可能性も残す。
- ▶ 言葉はまずは日本語を使い、その拡大版として英語によるやり取りや発表を行わせる。場合によってはちゃんぽんもあり。他の言語の混入もあり。
- ▶ 肝心なのは、単なる「技能」とせずに、「本気の興味」を持たせること。

試験制度についての提案 (センター試験で統一スピーキングテストが導入された場合)

- ▶ スピーキングは、知的能力や読解・作文などの重要な英語力が高くても十分点数がとれない可能性がある。努力が報われないことも多い。
- ▶ 必ずしも英語でのやり取りを必要としない分野に進学したり、英語と無関係の職業に就く人も多い。
↓ ↓
- ▶ 一律にスピーキングの試験を課すことはしない。
- ▶ 「スピーキングを鍛えたい人にそのための選択肢を提供する」という形にして、スピーキングが苦手であるとか、不必要であるという人はペーパーテストのままにできる方式にする。
- ▶ ペーパーテストの一部にかえて、スピーキング実技テストで受けることを可能にする、スピーキングはあくまでオプション、という形が現実的。

これからの大学入学者選抜に望むこと

東京都立西高等学校長 全国高等学校長協会長

宮本 久也

南風原：

それでは、最後に、実際に受験生、高校生と常に接しておられる宮本先生、どうぞよろしくお願ひします。

宮本：

東京都立西高等学校の宮本でございます。私だけが高校の関係者ということです。私は、高校の校長ですが、専門は歴史でして、英語ではございません。都立高校の校長ではありますけれども、最初にご紹介がありましたように、3年前から全国の高等学校長協会の会長をさせていただいております。南風原先生や片峰先生と一緒に、システム改革会議から、ずっと高大接続の議論に加わっております。また、いろんな県を実際に回りまして、全国の高等学校がどういう状況なのか、今、何を考えているのかということ、情報を取りながらいろんな形で発言をさせていただいております。今日は、そういったところをベースにこれからの大学入試に望むことということで、英語の4技能についてしばってお話をしたいと思ひます。

最初に、山田室長さんのほうからお話があったように、今の高等学校の英語の現状は、必ずしも十分とは言えないところもあるのではないかと。特に、書くことや話すことについては、ほかの技能に比べると、やや劣



っているのではないかとという指摘があることは事実です。そういう中で、高等学校では、これからこの4つの技能をしっかりと育成をするということ、この取組みを、もっと熱心に取り組んでいかなければいけないという共通認識は、しっかり今、持っていますし、またそれを、大学入試で評価するという全体の方向性については、このこと自体を否定するというものでは全くありません。むしろ、やはりこれからの時代、高等学校においても、もっと英語の力を付けていかなければいけない、そのことについての理解は進んでいると思っています。

しかしながら、今、ここでも話題になっていますけれども、その4技能の評価を民間の資格や検定を使って行うということについては大変心配をしている、そういう声が多いというのは事実であります。

この不安の理由は、いくつかあるわけで

すけれども、まず一つは、学習指導要領との整合性（スライド3ページ）。と言いましても、英語の学習指導要領は、ほかの教科に比べるとかなりアバウトで、トータルでいけば、4技能を育成するというふうになっていることは間違いありません。ですから、学習指導要領の整合性と言いますけれども、実際は、今、高等学校の英語の授業で行われている内容との整合性というふうに、考えていただきたいと思います。

前に、アンケートの結果を挙げております。全国の普通科の校長会の中には、いくつかの研究委員会がありますが、その中の大学入試について研究をする委員会が、去年の7月に、全国の各都道府県の中で学校を抽出をして、いくつかアンケートを取りました。その中の一つの項目です。民間の英語の検定と、今、各学校で行われています、英語の教育の整合性についてどう思いますかと。また、どういうふうに新しい仕組みを作って入試の改革の中で実施すればいいですかという設問については、新しい検定試験を作ってもらって、それで一本化して、この4技能を測ってもらいたいという声が6割、それができないのであれば、今ある認定試験と共通テストを両方課すというのも仕方がないのではないかとという声が16.8パーセントということで、4技能を、民間の検定試験だけで評価をしてもらいたいと考えている校長先生はほとんどいらっしゃらないというのが、このアンケートの結果であります。つまり、4技能を測るのであれば、文部科学省が新たな検定試験を開発して実施してほしいというのが、高等学校の本音です。

このアンケートは、A案B案がちょうど提示された時期に取りましたので、民間の資格・検定試験を使うということであれば、平成36年度以降も、共通テストとの併用を継続すべきである。民間の検定試験に一本化するということはとんでもないというのが、高等学校の多くの声であります。全国高等学校校長協会でも、この旨を意見表明しています。

もう一つは、家庭の経済力に対する影響ということ（スライド4ページ）。当然、検定試験を受けるとなれば、お金がかかります。いくらぐらいがいいですかという項目では、1,000円から3,000円が7割。3,000円から5,000円が、27.9%という結果です。今、一番安い4技能検定でも5,000円を超えてるんですよ。それでいいと答えているのは3%しかないのです。やはりどうせやるのであれば、できるだけ値段を抑えてもらいたいということです。経済的な負担というのは、ものすごく大きな問題です。これが本音です。今度3月に、大学入試センターから認定の結果が出てきてその際検定料の情報も出るのでしょうか、われわれは注目しております。

そして、三つ目です。地域格差による影響（スライド5ページ）。センター試験は、ある意味公平です。同じ日に、全国同じ会場で同じ条件で試験が行われます。しかし、民間の検定はどうでしょうか。種類によって、会場の数も違います。場合によっては、そこに行くのに相当な交通費と時間をかけて行かなければいけないという、そういう所に住んでいる高校生もいます。よく、僕が地方に行ってこういう話をすると、宮本先生のと

こはいいですよねって言われます。パスモで、すぐどこの会場でも行けますから。うちの学校の生徒は、県庁所在地まで行くのに、バスで電車で何時間ですよと。これ、同じと言えますかと言われて、僕は、申し訳ありませんとしか言えないですよね。現実でもそうなんです。そこを、じゃあ、どうするのかっていうことですね。つまり、試験を受けるってことにさえ、これだけ差がある。これが現実なんです。そういうふうなところを、どのようにしてもらえるんだろうかということ、ここはすごく大きな問題だと思います。

そして四つ目。高校の先生方の心配はここですね。高等学校における英語の教育が変わってしまうのではないかと（スライド 6 ページ）。つまり、民間の資格検定で、いいスコアを取ることが大学に合格するための、大きな要素となった場合ですね、高校の英語の授業が、ともすれば民間の資格検定対策になっちゃうのではないかと。先ほどもありましたけれども、色々なテキストみたいなものが民間の業者の方から提供されるとなると、教科書で、あるいは教員が作った教材で英語の授業をするよりは、そのワークシートを使って勉強させたほうが検定には受かりやすいのではないかと。それが、じゃあ、果たして本当に、高等学校の英語の教育と言えるのかということなのですね。

そして、実際の大学入試は検定の試験だけではありません。共通テストもありますし、各大学の個別選抜もあります。それぞれに応じた準備をしなくてはならなくなりますから、高等学校は大変ですよ。まずは検定のことをやって、一方では共通テストの準備

をやって、そして個別の大学入試の対策もしなくてはならないです。

こういった状況になると高等学校における英語教育というのは、ものすごく窮屈にならざるを得ないと思います。今でさえ多忙と言われていています。いろんなことを学校でやっている中で、でも、こういう対応をきっちりしなくてははいけません。でも、じゃあ、学校が十分できるのか。もし、十分できないとなればどうなるかということ、学校外の教育機関に依存するという傾向が残念ながら強くなるのではないかと。検定対策を行ってる学校外の教育機関に行ったほうが、これはもう、明らかに効果が出るのではないかと。そういうところに行ける子どもはいいですよ。また、そういう場所が近くにある子どもはいいですよ。そうじゃない子どもはどうなるのでしょうか。

そういう心配があるし、もっと根源的には、先ほどからもいろんなお話がありましたように、大学教育で必要とされる英語力というのは何なのかということ。それを、じゃあ、本当にどういったことで身に付けることができるのかということなのですね。こここのところに対しても、どうなのだろうか、大丈夫かなというのが正直な気持ちであります。

そしてもう一つは、じゃあ、この検定を、今の段階で大学入試においてどう使うかっていうことが、全く明確になってない（スライド 7 ページ）。これは、今、各大学がこれからお考えになるわけですが、現在でも推薦や AO でいろんな形で使われています。応募資格として使っている大学もあれば、

その資格によっては、加点をしていくというふうになってきて、それぞれの大学で違ってきています。この辺も、新しい入試において各大学がどうするかが分からないから高校としてもどうしていいか分からない。そして、そもそも大学入試ってというのは、大学教育を受けるに足る各教科の力を見るものが大学の入試です。つまり、そもそも大学教育を受けるに当たって、英語の4技能のうち、どの能力がどれくらい必要なのかということが、全く議論されていないのですよ。なのに、とにかく4技能が必要だと言われて、どうなんだろうというところが、やっぱりよく分からない。そういう中で、今、いろんなことが進んでいるわけであります。

そして、最大の問題は、今、私が言ったような民間検定活用についての懸念は、もう2年半ぐらい前ですか、この英語の4技能を外部で検定で使うという話が出たところから、ずっと同じ話をしています(スライド8ページ)。こういう懸念がありますよ、こういう懸念がありますよ、こういう懸念がありますよと。

経済格差の問題、地域格差の問題、中身の問題、ずっともう、これは2年半以上言い続けています。しかし、文科省は検討します、検討します、検討しますと答えるばかりでいまだに分からない。新制度で使われます民間の資格・検定試験の内容も、3月まで分かりません。どういう場所で、どういう形で、いくらでやるのか、これはまだ分からないし、大学がどう使うのかもまだ分からない。ずっと分からないまま、今、ここまで来ているのです。初めから、この懸念はずっと

われわれは指摘をし続けているのですけれども、一向にその答えが出てこない。これではしょうがないですよ。実際、我々の懸念に対する答えは民間がいろいろと考えて出すわけですから。非常にわれわれとしては不安です。

その上で、大学の入試における4技能に向けた提言ということで、何点かお話をさせていただきたいと思います。一点目は、これももう本当に当たり前のことですが、高等学校での学習実態を踏まえた形で、是非、入試をお願いしたいと思います(スライド9ページ)。大学入試は、先ほども申しましたように、高等学校の学びの成果を評価するものだと思います。これは、高大接続改革でも、今回もそういうふうに言っています。だから、高校の多様な学びを評価しようと言っているわけです。ですから、そここのところをやっぱり外していただきたくない。少なくとも、高等学校の授業が検定対策になってしまったのでは、高等学校の教育が変質するだけではなくて受け入れる大学のほうも多分困ると思いますよ。

そういう意味で、われわれは、現在のセンター試験は、よく考えられた試験だと思っています。おそらく、それを引き継ぐ大学入学共通テストも、これもやはり同じように、高等学校の学習の成果を踏まえたものになるだろうと思っていますから、是非、これは、継続的に活用していただきたいと思います。また、個別選抜においても、高等学校の学習実態を踏まえた内容にさせていただきたいと思っています。

そして、二つ目です(スライド10ページ)。今日は、大学の方がたくさんいらっしゃい

ますので、ここを私、今日一番言いたかったのですが、もう、今さら 4 技能をやめるってことはないと思います。本当はちょっと立ち止まってほしいんですけどね。でも、ここまで来てますからしょうがない。であるならば、まずは、4 技能を定着させるということ優先するしかないでしょう。その上で、各大学にお願いしたいのは、民間の資格検定のハードルは低く、ウエイトは小さくです。初めから、うちは B1 以上、B2 以上。B1、B2 なら加点しますよ、といったような高いハードルを設定されてしまうと、その高いハードルを越えるための教育を、高等学校でやらざるを得なくなってくる。まさに検定対策になってきてしまいます。ですから、もう A1 とか A2 でいいんじゃないですか。普通に高校の授業を受けて、普通に高校の英語をやっていたらできるぐらいのハードルにしてもらえれば、授業で検定対策なんかやらなくていいわけですよ。その分、ほかの、本当に大学教育に必要な英語のいろんな力を付けることができるわけです。これを、大学がハードルを上げてしまうと、逆行するんじゃないのかなと僕は思います。ウエイトも同じです。極力小さくしていただきたい。もう 10% ぐらいとか。もう、受けてればいいんじゃないのぐらいのところから、僕は始めてもらいたいと思います。だって、後は、各大学で見ればいいんですから。そうでしょう。後は、各大学が自分のところで見ればいいわけですから、一応、ちゃんと 4 技能もやってるんだねというぐらいのところから始めてもらわないと、ここが、今言ったみたいにウエイトが重くなる、大きくなる、ハードルが高くな

っちゃうと、本当にこれはおかしくなってしまうと思います。

なぜなのかと言うと、今、前に書いてあるように、今の高校生の英語の力っていうのは、やっぱり A2 レベルの子が 36.4% ぐらいなんです。これが、ここ数年でいきなり上がるわけがないし、今、各都道府県の教育委員会の中でも、英語の教員の資質能力を上げていこうとか、英語の授業を良くするためのいろんな研修が、始まっているところ。それを受けた教員が、今、英語の授業改善を、一生懸命、始めようとしています。また、新しい学習指導要領では、小学校 3 年生から英語をきちっとやろうとしています。その子たちが、大学を受ける頃に考えればいいわけで、今度 4 月から中学校から高校へ入ってくる子たちは、そういう教育を受けていないんですよ。なのに、いきなりドーンとハードルを上げるっていうのは、これは、本当に僕は高校の英語教育がおかしくなるのかなと思います。是非、そのところは大学の先生方にお考えいただきたい。そのためには、大学とやっぱり高校がちゃんと意見交換をすべきだと思います。そこがないと、せっかく 4 技能使わなきゃいけないのだから、やっぱりこれは、ある程度ハードルを上げようかなと大学側が考えてしまうとおかしくなると思います。

3 目です (スライド 11 ページ)。安心して、この民間の資格検定を活用できるという条件整備を、是非していただきたい。最初も言いましたように、経済格差や地域格差、この不安は依然として大きいわけです。これ以外にも、大学入試改革に伴って、高校生の負担は確実に増加します。学びの基礎

診断、これも、民間の試験を使いますからお金がかかります。あるいは、共通テストも、記述試験が入ったら受験料が上がるのかなと思ったりします。つまり、今回の改革は、結局高校生や保護者に対して負担が大きくなることではないですかということです。

先ほどもおっしゃっていましたように、2回受けられるっていったって、結局、オフィシャルなものが2回なわけですから、当然、高1高2から検定試験を受けるということになってくると、この受験料は半端な額ではありません。相当大きくなってきます。そういうようなことが、何十万人という大学を受けようとする高校生の負担に、これからずっとなっていくってことです。当然、これは支援の方策をしっかりとやっていただきたい。

これは、経済的な困窮者だけの問題ではありません。全ての高校生に対する支援が、僕は必要だと思います。高等教育の無償とかいろいろ言っていますけれども、高等教育に入る前の段階でこれだけ負担が大きくなるってことに対して何等かの支援は是非お願いをしたいと思います。

そして四つ目は、各大学が求める英語の能力や、大学での英語能力の育成計画です(スライド12ページ)。つまり、大学ではこれだけ英語の力を伸ばすから、せめて高校では、これぐらいのどこまでしてもらいたいってことを、やっぱり出してもらいたい。それをわれわれも受け止めて、じゃあ、高校では、ここまでこういうことをやりましょうというようになると思います。このためには、やっぱり高校と大学がしっかりと話をし、お互い共通理解を図ることだ

と思います。

そして最後です。当面4年間は、共通テストと民間の検定試験の併存を行う。その間に、十分検証を行うと書いてありますので、是非、ここのところを、しっかりと検証をしていくべきだと思います。十分な検証を行った上で、その後どうするのかというようなところは、是非、やっていただきたい。

さまざまな課題がある中で、とにかく今、改革をしようという方向があって、一步踏み出そうとしているわけですけれども、しっかりと踏み出していくためには、やっぱり、まずは制度の定着をしっかりと図るように、さまざまな配慮をするということと、そして、十分な検証をした上で、その後のことを考えること。このことを、是非、お願いをしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

南風原：

どうもありがとうございました。最後のほうは、いかに改革によるダメージを少なくするか、という切実なお話で、立ち止まってほしいという要望もありましたけれども、その前に大学側からも、立ち止まるべきという意見があり、意見が一致しているんじゃないかと思いますが、その辺り、後半のディスカッションで掘り下げてみたいと思います。

ここで休憩を取ります。後半部分の質問も、ピンク色の紙に書いていただいて、スタッフに渡していただければと思います。4時15分をめぐりにお戻りください。

1

東大 高大接続研究開発センター
シンポジウム資料
平成30年 2月10日

これからの大学入学者選抜 に望むこと

東京都立西高等学校長
宮本 久也

2

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ①

(1) 現状

「高校で英語4技能を育成し、それを大学入試で評価する」という全体の方向性への理解は進んでいる。

校長、教員からも否定的な声はほとんど聞かれない。

4技能評価に民間の資格・検定を活用するということに心配の声は多い。

3

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ②

(2) 不安の理由

① 学習指導要領との整合性

全国普通科校長会大学入試研究委員会調査より

A 民間の検定試験と高校の学習指導要領との整合性について

新たな検定試験で一本化	60.6%
認定試験と共通テストを両方課す	16.8%
どちらともいえない	16.8%

* 4技能を測るのであれば、文科省が新たな検定試験を開発し実施すべきといった声が多数。

* 民間の資格・検定試験を活用し続けるのであれば、平成36年度以降も共通テストとの併用を継続すべきという声が多数。
(全高長でもその旨を意見表明している。)

4

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ③

② 家庭の経済力による影響

全国普通科校長会大学入試研究委員会調査より

B 認定試験の受験料

1,000円～3,000円	69.8%
3,000円～5,000円	27.9%
5,000円～8,000円	2.1%
8,000円以上	0.8%

* 各都道府県協会長会議等でも経済格差に関する懸念が強く出されており、安価な受験料での実施が強く求められている。

5

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ④

③ 地域格差による影響

* 現在実施されている民間の資格・検定試験の中には、実施会場が県庁所在地などに限定されているものもあり、地域によっては会場までの交通費、時間等高校生の負担が大変大きくなる可能性がある。

6

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ⑤

④ 高等学校における英語教育が変質してしまう懸念

- * 授業が民間の資格・検定対策にならざるを得ないのではないか。
- * 民間の資格・検定、共通テスト、個別選抜それぞれに向けた対策が必要となり、高校における英語教育が大変窮屈になる。
- * 学校外の教育機関に依存する傾向が強くなるのではないか。

●大学教育で必要とされる英語力を身に付けることができるのか。

7

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ⑥

⑤ 大学入試での活用方法が明確になっていない

民間の資格・検定の結果が実際の入試でどう使われるのか。
応募資格、加点など各大学の個別選抜における英語の試験がどうなるのか。

- そもそも大学教育を受けるにあたり、英語4技能のうちどの能力がどれくらいのレベル必要なのかが明らかになっていない。

8

1. 大学入試改革における 英語の扱いについて ⑦

【最大の問題】

- 新制度で活用される民間の資格・検定の内容が3月末まで明らかにならないこと、各大学が民間の資格・検定をどう活用するかが、新年度にならなければ明らかにならないことが大きな問題。

9

2. 大学入試における 英語 4 技能評価に向けた提言①

(1) 高校での学習実態を踏まえたものにする

大学入試は高校での学びの成果を
評価するものであるべき。

* 高校の授業が検定対策になっては、高校教育が変質する。

- 大学入学共通テストを継続的に活用
- 個別選抜においても、高校の学習実態を踏まえた内容に



10

4. 大学入試における 英語 4 技能評価に向けた提言②

(2) まずは英語 4 技能評価を定着させることを最優先にする

- 民間の資格・検定のハードルは低く、ウエイトは小さくする。
共通テストでの過度なウエイト、個別大学選抜での加点は、過度な競争を生む。
高校生の英語力の実態（CEFR A2レベルの生徒は36.4%）
都道府県教育委員会として英語教員の資質能力の向上に向けた研修や各学校で
指導内容・方法の改善・充実の取組みが始まったばかり。

* いきなり高いところを求めるのではなく、小学校から系統的に英語学習を行って
きた子供たちが受検する時期を見据えながら徐々に変えていくべき。



高校と大学が意見交換する場を持つことが必要

11

4. 大学入試における 英語 4 技能評価に向けた提言③

(3) 安心して民間の資格・検定試験を 活用できる条件整備を行う

経済格差、地域格差についての不安は大変大きい。

民間の資格・検定試験の受験料以外にも、大学入試改革に伴って
高校生の負担は確実に増加。



支援方案は不可欠
経済的困窮者だけでなく、全ての高校生に対する支援が必要

12

4. 大学入試における 英語 4 技能評価に向けた提言 ④

(4) 各大学が求める英語の能力、 大学での英語能力の育成計画を明示する

高大接続という考えに立てば、
「高校でここまでの力を育成してほしい(だからその力を入試で見る)。
大学ではこのようにして伸ばしていく」といったものを示してほしい。

(5) 民間の資格・検定の実施・活用状況等の 検証を十分行う

検証の実施体制・方法を早めに決め、時間をかけて慎重に、十分
検証・検討を行ったうえでその後の対応を決定する。

13

ありがとうございました。

討 論

—パネルディスカッション—

討論 —パネルディスカッション—



南風原：

それでは、これから全体討論に移りたいと思います。討論の前半は登壇者の間での意見交換、そして討論の後半に皆様から頂いた質問、全部は無理だと思いますけども、一部紹介してお答えいただくというふうにしたいと思います。

それでは、ここまでのご講演を聞かれて、こういう質問をしたい、こういう意見があるということがありましたらどうぞ。

阿部：

いろいろあるんですけど、忘れないうちに。さっき聞くのを忘れちゃったので、まず山田さんに。山田さんになんの恨みもないんですけども、山田さんのご担当の箇所だと思うので。

そのプレテストのお話で、共通試験に関してアクセントと語順整序と発音の問題が廃止、まあ取りあえずやめるというお話だったと思うんですけども、実際の音を聞かなきゃいけないよっていう議論は分かるんですね。つまり、発音記号とかアクセントの位置だけで完了すると誤解する生徒がい

ると良くないと。ただ実際の、例えばリスニング問題でアクセントの位置を確認するって問題はたぶんないですし、たぶんこれからも出ないでしょうし、そもそもああいうアクセントとか発音っていうのをやるのは、日本語と違う英語のシステムに目を向けるための非常に有効な方法だと私は思っているんですね。もし発音記号は「実際の音」とは違うから害悪だ、という理屈をつきつめると例えば実際の音楽を聞かなきゃいけないから楽譜は廃止しようとか、将棋は実際の駒でやんなきゃいけないから棋譜は要らないとか、そういう話にもつながってくるように私は思います。安河内さんあたりは、発音記号の位置を覚えている学生がいるから弊害になるってような理屈で、この発音問題廃止案を推進されていたような気がしますけれども、その辺のことについてのお考えを、もし何かあればお聞かせ願いたいと。

山田：

ありがとうございます。さっき、ちょっとご紹介しましたがけれども、来週からセンタ

ーが実施する共通テストなんですね、プレテスト、ご指摘のように実施をしています。今回、まだ問題はもちろん公表じゃないんですけど、その問題からは発音問題だとか並べ替えの問題は落ちてます、なくなってます。これは今年度プレテストをやって来年度、来年度といっても今年のもう11月ですけども、さらにプレテストをもっと本番に近い形でやって32年度の本番に結び付ける、そういうスケジュールなんですけども。

今回、昨年11月にやったのも、この2月にやるのもかなり英語に限らず、新しい意図で出題してみる問題を多く含んでいて、いろいろ検証をさせていただこうと思っている中で、今ご指摘あったような発音ですとか語順のものは取っていると。最終的に来年度、これを踏まえてどうするかということは検討はいたしますけれども、一方で先ほどご紹介したように4技能のテストも並行してセンターから成績をご提供するという中で、リーディングとリスニングに特化してお聞きしたほうがいいんじゃないかという考えで今回のプレテストはそういった問題を落としている。

対策の話、いろいろ出ました。私も先週末ぐらい本屋をぶらぶらしてて、いろんな英語の本を見ましたけど、やっぱりセンターの対策本っていうのもあって、当たり前ですけど、発音記号はこういうion、何とかションとかいうときはここら辺にアクセントがあるよみたいな、記憶問題のような形で扱われているような本もあったのは事実なので、プレテストということを実施してみたいと分析をしてみたいと思っています。

阿部：

ちょっとよく分かんなかったんですけども、ionのときはここに来るよっていうのを覚えてはいけないんですかね。実際に音を聞くのが役に立つというのはもちろんだとは思いますが、だからといってほかの接触方法を閉ざす必要はないのではないかな。あらゆる情報、あらゆる機会を捉えて少しでも英語に慣れるっていうことが何より合理的だと思うのです。アクセントのところに記号をふるっていうのは、私自身今でもやっています。見たことのないことばがでてきたときに、アクセントの位置を忘れないように印をつけておく。これはまったく問題ないことのような気がするんですけど。

もう1つ、とんがった問題にしようということだったわりには、むしろ問題を読解とリスニングに、要するに限定するという事なんですよね。先ほどから時々話題に出てますけど4技能といったときに、その問題を本気で考えていらっしゃる方は関係とか、各技能をどうやって組み合わせるかっていうことに注意を払ってると思うんです。それに比べると、なんかセンター試験をわざわざ読解とリスニングに限定して劣化させるというか、そぎ落としてスリム化するっていうのは、逆の方向に向かっているように私には思えるんですけども、その2点、今ちょっと疑念として浮かびました。

山田：

いや、おっしゃるとおりで、センターもいろいろ工夫をしているので、だからこそそのアクセント問題とか並べ替え問題も出してきて、いい問題も含まれているとは思

んですけれども。で、アクセントってほんとに大事で、そこがない日本語と一番違うところなんで、それを独立して聞くっていうのは大変意義あることだと思うんですけども、これから民間の試験を、しかも4技能の試験を課していく中でスピーキングのテストもする。どういうリズムでスピーキングをしているのかということもテストをしている中で、この限られた時間はアクセントの問題じゃなくて、読解の問題を中心にしてはどうかという、今回プレテストを実施しているということです。

南風原：

山田さんは英語の専門っていうわけでもないのに、英語学者とこういうアクセントの問題とかを議論しなくちゃいけないというのは非常に不利な立場ですよ。なので、今日は私、山田さんに優しく接するという事に決めています（笑）。

ほか、いかがでしょうか。

羽藤：

優しく接してあげようと思われたかもしれませんが（笑）。まず山田さん、それから片峰先生にもお伺いしたいです。

それぞれのテストがどんなテストかをご存じですか。今、候補になっている、導入されるテスト、それぞれですね、具体的に。例えば、審査というのは自己申請に基づく審査ですよ。そこから踏み込まないんですよ。

私がお話ししたことは、透明性をもう少し国として担保するべきじゃないかということなんですけれども。ここで込山さんにさっき言ったんですよ、「ベネッセを責めたんじ

ゃないですからね」って。そうじゃなくて、民間テストっていうのはそういうもんだということ的前提に国として対策を、むしろ非難したとしたら国を非難したつもりでいたんですけれども。そういうところに立って、それぞれの問題を、テストを見る、検証するというようなことはされているのか、それとも、入れたらいいのか。何でもいからスピーキングテストが自己申請でセンターが出している基準に到達すれば、もうそれでOKと。

その後、第三者審査もわりと民間の業者を育てようというような審査が行われると聞いてますけれども、その辺の透明性の担保とか、あるいは審査の厳正さとか、そういうことについてはどういうふうに思われますか。

山田：

日本には、もちろん私も専門家ではありませんけれども、いろんなテストがご存じのように実施されています。それは、いろんな目的で実施されててビジネス系が強いところ、留学に強いところ、あるいは日本の学習指導要領を極めて強く意識してやっているところ、いろんなテストがございます。先生のご指摘のとおりです。それは、当然特性がもちろん違って、それぞれに重点を置いているところ、目的が違うので、そうじゃなければ1つのテストでいいわけですから、いろいろなものがある。

で、われわれがしようと思っっているのは、いろんなテストがあります。私は、例えば商学部に行きたいと。商学部に行くのでビジネス系の強い、例えばTOEICさんの4技能のを受けてみようかなというような生徒さ

んもいるかもしれない。いや、うちは学校で実施してくれる GTEC とか英検で大学入試に臨みたいっていう生徒さんもいるかもしれない。いろんな選択肢がある中で、われわれのほうとして、「いや、これは駄目です」っていう選択肢をつぶすのではなくて、いろんなものをご活用いただけるような方策を取りたい。で、なるべく先生がおっしゃった透明性って大変重要なキーワードだと思うんですけども、この要件をご覧いただくと、こういうことを公表しているとか、こういうことを公表しているっていう要件をいっぱい書いて、むしろ皆さんがご覧いただけるような状態にして、どれを選ぼうかなっていうことを受験生が考えられる。大学もそれを活用するときに、どういう試験かっていうのを把握して活用できるようにする。その上でセンターがそのスコアを団体から大学にご提供をすると、それが重要かと思って、そういう審査をしています。みんな同じ問題を作るべきという形で審査はしていません。

羽藤：

ベネッセさんが、あるいはテスト関係どなたもそうですけれども、公表されているもので受験生がテストを選んだり、あるいは大学でもその情報を基に選んだりということはできないと思います。専門家じゃないと情報を見ても分からない。「公表してますよ」っていうのも、正直本当の情報かどうか分からない、そこも透明性がないわけです。何でも言えるわけですよ、ほんとに。今、ベネッセさんが「全問英語話者でダブルスコアリングしてます」って言ったら、「ああ、そうですか」って言うしかないわけです。

それは、そうなのかもしれないし、そうじゃないのかもしれないけれども、そういう状態に国が入試制度を置いておくこと自体に、ベネッセさんにも気の毒だし、ほんとにやってるのにね（笑）。

でも、私がこうやって疑うような条件。別に機械採点しててもいいわけです、今の流れなんですよ、それは。機械採点しててもいいんですけども、ただ、やっぱりもっと透明性を持たないと、今は日本中のみんなが、だいたいテスト・イコール・オーソリティと思っているわけです。そこが破綻したときには、入試制度自身が破綻するんじゃないか。要するにテストを疑うっていうことをあんまりみんなしないですから、テストに向かって努力するわけです。テストは決してオーソリティではないですから、人的に作っているものですから、そこの内部を国としてちゃんと審査するっていうのが業者のためでもあるし、受験生のためでもあるし、あるいは教員のためでもあるというふうに私は思うんですけども。

山田：

半分ぐらい私が話してますけど、今前提にしているのが、もう既に東大さんも含めているいろんな業者の試験、複数の業者の試験をご活用されているということと、私、この年明けからずっと入試のミスの問題にかかわる仕事を多くしてるんですけども、日本の皆さまが試験をすごく信じているというわけではないなということを実感しています。それは、もちろん CEFR の対照表のずるをしてスコアダンピングをするようなことがほんとに起これば、もちろん大学でもそういったものの価値を下げるってことも

あるでしょうし、われわれもそんなテストはセンターが提供するに値しないということで、対象から外すってことは当然あると思っています。

羽藤：

そういうことが起こらないのを担保しておくのが国の役割じゃないかと思うんですけども。

込山：

今の公平性・公正性というところですが、今回の認定の要件の中に第三者評価というところがかかれていています。われわれ GTEC としても全国検定振興機構というところにも参画をしております、来年度はその機構が監査をするというところも事業として考えておられるというところもあろうかと思っていますので、そこである意味、透明性を我々としては出したいと思っておりますし、先ほど羽藤先生がおっしゃられた CEFR のところですが、あれも、我々も含めてですが、各検定業者で先ほど私がご説明申し上げたスタンダード・セッティング、要は欧州評議会が正式にやろうとしているマニュアルに基づいて関連づけるというところが、今まさに作業して、その結果で今回 3 月までの中で審査されているはずですよ。

われわれ GTEC としても、もともとは被験者、受験者の Can-Do のアンケートを取りながら、その自己申告の回答とスコアをクロスさせたデータで今までも CEFR と関連づけをさせていたのですが、今回このような大学入試の動きになる中で、やはり CEFR に関してはオーソライズされたような形での出し方というのが、われわれも各検定業者

も絶対必要だということで、GTEC は昨年度に対応付けを終えていますし、他も今まさに取り組んでるところもあると聞いています。

もし、ただ、先ほどの話に戻します通り、これから変えるようなことがあったとしたら、その第三者評価とか、それこそ文科省、または大学入試センターの方でしっかり審査していただいて、それがおかしい話なのであれば、その基準から例えば外すとか、そういったところも含めて我々に対しては、いい意味での厳しさをしっかり持って取り組んでいきたいなと思っているところです。

羽藤：

これでやめようと思えますけども、検定「振興」機構の第三者評価は駄目だと思います（笑）。すみません。

片峰：

20 分じゃ言い足りなかったこともあるので、それも含めてなんですよ。まず、国大協から自由の身になってますので、国大協代表としてではなくて個人的な話として聞いていただければと思いますが。

先ほど申しましたように今回の改革っていうのは極めて大きな改革なんですよ。この改革を一步前に踏み出すためには、1つは楽観論が絶対必要なんだと思います。将来に対する、改革のその先にあるものに対する楽観論ですよ。この重要なものは羽藤先生も言われたけど、新しい入試、とくに英語の 4 技能の評価には解決すべき問題はあるかもしれませんが、導入すること自体の波及効果、高等学校等々に。これは絶対あると思いますね。実際に僕もデータで示

しましたけども、それは既に部分的にも大学入学者の資質という形で現れつつあるんだろうと思うんですね。これが1つ、重要なところ。

もう1つは、やっぱり大きな改革はスピード感を持ってやるっていうのがあると思ってる。その中で、ただ、問題は今議論になっていますけど、一方でスピード感を持って、楽観論を持って改革を進めるんだけど、そこには危機管理が絶対必要なんです。そういった意味では、先ほどから言われているようにいろんな問題があるわけですから、やっぱりそこにシステムが要るんだろうと僕個人は思っています。

その中で、データを収集して、修正すべきことは修正するし、文科省と業者の間のやりとり等々あると思うんですけど、やっぱりベストは羽藤先生が言われたように、将来的にはやはり文科省なりセンターなり国大協なりが独自の試験を作ること为目标として掲げるっていうのは、僕はあってもいいんじゃないかなと。そういうシステムがあつてこそ、初めてPDCAサイクルも回るし、きちっとした危機管理もできるし、これは理想形ですよ。

ただ、スピード感という観点で言えば、先ほど、今日ものすごい議論になったけど、やっぱりまだまだ情報が足りないですよ、それをやるためには。そのために今回は、32年度からは業者の皆さんの試験を横並びで、どういう認定結果になるか分かりませんが、導入しようということなんだろうと思います。しかしながら、その中でやっぱり文科省が主導する、あるいはそれができなければ国大協が頑張るとかで情報を収集して改善するシステムをきちっと作る、あるいは

は危機管理のシステムをやっぱりどっかが責任を持って立ち上げる必要がやはりあると思うんですね。そこはどうか、唯一の山田さんの味方なんであれなんだけど(笑)、そこはやっぱり文科省にも考えていただきたいっていうのが僕の感想ですね。

南風原：

ありがとうございます。ほかに質問やコメントなどありますか。

阿部：

今の片峰先生のお話の流れで、私も、だからスピーキングができるようになること自体は悪くないと思っていますね。ぜひ、皆さんにも機会があればやってほしいと。ただ、例えばさっきちょっと言い切れなかったような気がするんですけども、リスニングは勉強した分に比例して点数が蓄積される分野で、やって意味があるところだと思うんですね。で、スピーキングのほうっていうのは、皆さん常識で考えれば分かると思いますけども、モチベーションがないと全く身に付かない。無理やりやっても無理です。スピーキングを一律に無理やりやらせるなんて全くナンセンスな話です。

で、中高生っていうのは、私の中高生時代を振り返っても、大して言いたいこともないし、自分がそういう状況に置かれてもいないからスピーキングが必要な状況に対する想像力っていうのがあんまり働かない。スピーキング、スピーキングって騒ぐのは、経済効率が悪いんです。私の通った学校は、週に7時間も英語があつて、LL教室とかもあつて、全く私は真面目にやってなかったですね、ほんとに。やる気がなくて。それは

自慢するわけじゃなんですけども。まあ当時の自分の気持ちは分からなくもないですね。なんでスピーキングなんてやらなきゃいけないの、バカバカしいっていう気分でした。

今、先生もおっしゃったことと関連づけて言うと、入試の段階でもおそらくまだ自発的なスピーキングに向けた気持ちっていうのは育ってない人が多いんじゃないかと。ただ、すでにそこが育っている人の芽を摘む必要はないと思うので、例えばスピーキングは選択制にするのはどうだろうと思っています。正直言ってベネッセさんには申し訳ないですけども、今の業者試験への丸投げっていうのは私は反対なのですが、もしセンター試験でそれをどうしてもスピーキングをやるっていうことになった場合は、スピーキングをやりたくない人はリーディング、もしくはほかのテストをもってそれを代えるっていうシステムにしてもいいんじゃないでしょうか。

というのは、さっきも申し上げたように、いろいろな理由でスピーキングの点数が能力や努力に応じて上がらない人っているのはかなりいるんですね。この問題についてぜひベネッセさんにも伺いたいと思います。そういう領域を大学入試に導入するのはあまり合理的な判断とは言えないのではないのでしょうか。

わりに偏差値が高い某大学の某学部の話なのですが、その大学の医学部の先生によると半分ぐらい彼らは発達障害だって言うんですね。対人接触が苦手、相手に合わせられない。すごく口下手。まあ、茶飲み話の中でうかがった話なので、数字はそれほど厳密ではないと思います。発達障害って

うのは能力の低い・高いではなくてバランスの問題なので、一部の能力が高い人ほど全体のバランスが崩れてある種の症状が出やすい傾向があるそうです。そうしたときに、スピーキングにあまり高い配点をあげると、そういう人の能力を正しく評価できなくなる可能性があるような気がするんですね。今まで100年以上、そうしたテストが行われてこなかったのは、暗黙のうちにそういうことが分かっていたからじゃないかと思うんです。

もちろんスピーキング大好き！という人にはどんどんやらしてもらえばいいし、スピーキングが必要となる分野に進むつもりの人はおおいに鍛えればいいと思うんですけども、一律に課すっていうのは絶対おかしいと私は思ってます。

片峰：

確かに僕は講演の中で、国立大学の中で、今の民間試験、スピーキングテストも含めましてね、それを入試に使うことに関しては一定の合理性があるっていうことは、ある程度共通認識であるっていうことを申し上げましたよね。これは、細かい話ではなくて、スピーキングテストの評価なんてどこにもまだありませんから。全体の要するに点数やスコアと、特に上位の部分ということになると思うんですけど。入学してからの英語力、これは極めてよく相関するっていう実感をみんな持っているんですね。そういった部分でやっぱり合理性っていうのがあるんで、今言われたように、じゃあ、スピーキングのテストの部分はどうなのか、そこら辺は今からなんだと思うんですね、確かにね。

それと、先ほど英語4技能、4技能っていうことに対する弊害っていうことを言われましたけど、僕自身、自分自身の経験から言っても、やっぱり必要に駆られてしゃべることになるわけですね。僕の場合は留学したり、プレゼンテーションしたりっていうことで。それをやると、逆に今度、語彙力の不足を感じるわけですよ。そこに戻るわけですよ。そういったことも含めて、4つの技能っていうのは別個にあるものではなくて、お互いにやっぱり関連しながら向上していくもんだと思うんですね。だから、何が先で、何が後でっていうことではなくて、そういった意味では今までの英語教育っていうのは、若干スピーキングとかライティングっていうところにあまり重きが置かれてなかったんじゃないか。それには、入試のありようっていうのが非常に大きな影を落とすたんじゃないかという問題意識ですよ。だから、要するに何かを捨てるっていう話ではなくて、バランス良く学んでほしい、教えてほしいということなんだろうと思うんですけど、そこら辺に関してはいかがですか。

南風原：

ちょっと私も少し言いたいことがあるんですけど(笑)。最初の石井理事の開会の挨拶の中で、副学長会議などでは、入試改革がどうしてこうなったんだろう、というふうな疑問の声が多いと。私が副学長だったときの副学長会議も同じムードだったんですね。宮本先生の調査でも、ほとんどの人が反対だと。だけど国大協の、片峰先生が報告されたのは「賛成多数」ということで、調査の専門として非常に不思議に思うところなん

ですね。いったい誰が賛成しているのか、どういう大学が賛成しているのか、ちょっと教えてもらえますか？

片峰：

これは僕、いま、ちょっと答えられないですね。事前アンケート調査の結果、60何パーセントが概ね賛成とか、33%が保留とその他と、このデータは公表していいという許可を国大協からいただいています。ただどの大学がどういう意見だったかというのは、出さないでほしいということだったので、いまの質問はちょっと勘弁してください。

南風原：

私、この質問だけ持ってきたんですけど(笑)。えーと、国立大学というと、羽藤先生、京都工芸はどんな回答されたんでしょうか。

羽藤：

私はそのアンケートを全然知らなくて。国大協の理事会の報告、報道がされましたよね、総会の前に。国大協は6月に意見書を出されていて、文科省がちゃんと答えてないのに、前に進むみたいな話でびっくりして、入試課に問合せに行きました。こちらのほうから聞きに行きました。「こういうアンケートがありまして」というのが入試課から出てきて、正直、そのアンケートを見て、びっくりしたのは、「反対」の選択肢がないんですよ。3つ「賛成」というのがあって(笑)、「その他」というのが1つ。うちの大学は「その他」に○をして、「センター試験の継続について再考すべきだ」って書

いてありました。私個人はその意見に賛成ですが、せめて相談してよっ(笑)という感じはありました。で、入試課に言いましたけど、「とりあえず時間がなかった」と、「メールが来てから1週間とか、その辺で返事を求められたので、すみませんでした」ということでした。

片峰：

手続き的にはですね、最終的には総会での審議・決議ということなんですけど、要するに価値観としては、先生言われたように、いろんなリスク、あるいは効果というのを検証したうえで、さらには具体的にどう活用するか、ということまで議論して、1つの結論を出す。それは1つの見識だと思いますね。確かに。ただ今回の国大協の結論はですね、基本的な方針をあの段階で公表しないと、次のステップが動いていかないんですよ。それは宮本先生も言われましたけど、最終的には来年度のかなり早い段階で、各大学が33年度の入試の予告をすることになっていますので、それに向けて、ということ。少なくとも、いまの状況の中で国大協としては、どういう活用方法をとるかというのは、今後に延ばすとしてもですね、一体的な対応として2つの試験を少なくとも一般入試では課しましょう、というその段階での合意だったと思います。確かに複数の異なる試験を同じ1つのまな板の上で比較するわけですよ。そこはですね、おのずから公正性、完璧な公正性というのはものすごいやっぱり難しい面はあると思うんです。ただしですね、重要なことは、きちっと情報を出す。たとえば今回、業者さん、きちっと情報を出す。そのうえで受験生

の諸君に選択し、準備する時間をきちっと与えるというのは1つの重要な公正性だと思うんですね。そういったことで、あのタイミングで、国大協としてはああいう決断をしたということであって、おそらく次の山は先ほど申しましたように、それをどういう重みづけで、どう活用して、どの程度大学の自由度を担保し、どの程度やっぱり一体的に対応するのかというところがあり、その議論がいま行われているはずですよ。

南風原：

はい、ありがとうございます。いま、羽藤先生の中で、時間がなかったという、入試課が。これ私が回答に関わったときも本当に短時間で回答を求められた。だから英語の先生方に話を聞く時間もほとんどなかったというのは、東京大学でも同じでした。先ほど片峰先生の中で、スピード感ということがありました。この時間というのがいま大きな問題だと思っているんですね。昨年の6月に国大協から、先ほど片峰先生からも出されましたし、本日の参考資料にもありますけど、6月には国大協から、こういうことが答えられないと判断できないという、片峰先生が委員長のときの申し出があるわけですよ。それは私たちもその通りだと思っていたんですけども、その回答が来ないのに、国大協が賛成とか、2つ課しますというふうに言ってしまったんですね。で、その理由が、受験生があわてないように、もうタイムリミットだからと。そのタイムというのは何なのかということなんですよ。誰も求めてもないものを2020年に勝手に設定して・・・いまちょっと司会として自制しなくちゃいけないとブレーキが働きました

(笑)。そういう急いでやるようなものじゃないんじゃないか、非常に重要な大きなことをやろうとしているので、少なくとも、先ほどの調査結果がですね、このような時間のない中で、羽藤先生のようにまさに取り組んでいる方にも聞く間もなく答えられた結果が「賛成多数」だという、ここは重要な事実だと思うんですね。なので、この後も国大協からいろいろアンケートあると思いますが、先ほど羽藤先生のスライドで“well-informed decision”と出ました。informされて、十分な資料・情報をもとに、十分なディスカッションをして回答する、責任をもって回答する、少なくともその時間は必要だと思うんですね。最近、私が文科省に文句を言わないのはですね、相手は文科省ではなくなって、大学自身だと思うようになったからなんです。私たちが十分なディスカッションをしているか、十分な情報を求めて、納得のいく回答なり、答えをしているかと。6月に申し出をしながら、回答がないまま、いいですと言ってしまう、そのところに無責任な態度が出ているじゃないかということで、大学自身をいま問題だと思っているところです。

片峰：

先生の言われることわかるんだけど、読んでいただくとわかるんですけどね、国大協の意見書。認定の基準、公正性の担保、それから格差問題ですね、費用等々の問題等々に関してやっぱり明確にしてくださいと、当然の要求として書いたわけです。早急に。だけどもですね、おそらくあの段階で文部科学省としてもそれに対する明確な答えを出すということは結構困難だったんだと思

います。一番のポイントの1つは、そういったこともないままに、要するに既存のセンター英語を廃止するということを決断するのは極めておかしいだろうという2つめの論点ですね。先ほど申し上げた通り。そういった意味ではですね、文科省もなかなかそういうふうには言ってくれないんですけど、国大協としては、先ほど示しましたけど、文言が挿入されたわけですね。その認定試験の運用・活用状況を検討しながら云々と。その一言がわれわれの意見書に対応するかたちで付いたということはですね、やはりそのセンター試験廃止、ではなくて、存続の可能性は残したというふうに捉えたわけです。そういった意味ではですね、もう32年度に新しい共通試験が、システムが動き出すというのはほぼ確定したような状況でした。先ほど言ったような議論の中で、最終的には総会の審議を経て、あの方針が確定したという状況です。

南風原：

はい、ありがとうございます。時間がだいたい討論の時間の半分くらい来ましたので、この後はフロアの皆様からのご質問などを取り上げて、お答えいただきたいと思います。質問の整理と読み上げは、高大接続研究開発センター入試企画部門教授の濱中淳子と追跡調査部門准教授の宇佐美慧が担当します。お願いします。

濱中：

濱中でございます。私からは、まず山田室長と片峰先生に対しての質問を連続してご説明申し上げたいと思います。

まず、山田室長にきた質問で、複数寄せら

れていますのは、公平性関連のものです。経済的な理由による格差に関して、努力するというようなことはおっしゃられているんですけども、やっぱりそれだけでは説得力がない。納得のいく答えが欲しいんですけども、その点について文科省はどう考えてるのか、教えてほしいということ。

あとは、阿部先生もおっしゃっていましたが、スピーキングなど、メンタル面で不利に働く人たちに対していったいどういう配慮をするのかということ。公平とか均等というキーワードに結び付けますと、そもそもなぜ4技能均等なのかというようにことに関しても、追加で説明をしてほしいという要望が来ております。

続きまして、センター試験と比べたときのメリットが見えないという質問です。センター試験はいったいどこが駄目だったのか。これまで高校の先生方の間で比較的高い評価を受けてきたセンター試験がなぜ平気で捨てられるのか。ライティング、スピーキングが問われないということが理由だったと仮にすれば、リーディング、リスニングの今まで培ってきた高いノウハウを果たして捨ててもいいものなのか。民間の試験になることによって、この2技能に問題が生じる可能性というものは意識されていないのか。センター試験ほどのセキュリティーの保証に関して国はどう考えているのか。この点に関してセンター試験との比較という点で寄せられています。

やはり、もう1つ多いのがCEFRのことです。評価尺度であるものを到達目標にすること、これに対してやはり説明が難しいと思うのだが、その点に関してどう考えていらっしゃるのか。CEFRの不透明さとか粗さ、

その危険性に関して、踏み込んだ説明がほしいというようなことも来ております。

山田室長に対して、たくさん来ているんですけども、あと1つだけご紹介申し上げます。なぜ試験の一本化について質問が来ているのか。なぜ試験の一本化を諦めたのか、実は諦めていないのか。平成32年度～35年度の間は併用されることになるが、どちらがどうというようなことを検証するプランはあるのか。そのようなことをご質問で受けておりますので、ご報告申し上げます。

続きまして、私のほうから片峰先生への質問についてご説明を申し上げます。

まず、1点目なんですけれども、受験生が見通しを持ち、安心にというようなことで表明を出されているとのことですが、その安心という意味に関して、やはりちょっと疑問に思うということ。今の国大協の方針というのは、むしろ不安を高めているところはないのかというようなこと。そういったことに関して、ご説明を伺いたいということ。

2点目なんですけれども、国立大学が一体的に対応するという点に関して、それを危険だというような見方もできるのではないかと。というのは、改革の方向性が間違っているとすれば、国立大学がみんな倒れることになってしまう。国大協として、個別大学それぞれの判断を推奨し、リスク分散をねらうというように動けないのか、そのようなご質問が来ております。

そして、3点目なんですけれども、最後の先生のスライドのところでも大学側の努力の話が出てまいりました。入試改革にどう対応するのか、近未来の大学入学者への資質変容への想像力、大学教育改革のさらなる

推進というようなキーワードが出ておりましたが、一方で大学人はもう改革疲れでいっぱいいっぱいという声もよく聞かれます。そうした中、まだ、努力ができる余地があるというふうにお考えなのかどうなのかということをお教えいただきたいということと、あと余地があるにしても、きっとその余地は少ない、小さいので、その小さい余地で入試という大きな問題に取り組む、そのことのほうが無責任ではないだろうかというような質問が来ております。

ここでいったん、宇佐美に代わります。

宇佐美：

宇佐美です。たくさんのご意見を頂戴しましたが、特に込山さまの、まず最初多くいただいたんですけども、ちょっと簡潔に幾つか申し上げたいと思います。一番多かったものが方法論的のところ、手続き的のところになります。

1点目が、採点ですとかスコア化に関する、精度に関するご質問を多くいただきました。GTEC さんに限られたことではないのかと思いますけれども、特にスピーキング、ライティングを測定するっていうときの精度の問題です。特に出題可能な問題数に限りがあります。GTEC さんの場合は1つと、大きな大問が1つということだったと思いますけれども、ということはその問題の違いによって非常にぶれが生じると、評価結果が大きく変わるということで、その測定精度についてずばりということですけど、問題がないと言えるのですかというのがありました。

関連しまして、阿部先生の主張の中にもありましたけれども、そういった精度の中

で偏りがあり得る中で、4技能の得点を均等に扱うということの理念以前の方法論的な妥当性はあると言えるのかというご意見もありました。こちら辺の精度のことは、CEFRの対応スコアのことですとか、対照スコアのことですとかにも関わってくるところでご意見がありました。

羽藤先生のご意見にもあったところですけども、そもそもそれぞれの民間試験において異なる構成概念、コンストラクトを測定する試験をそもそも比較するということが方法論的に無理だというご意見はたくさんありますけれども、それについてどういうお考えかということですよ。

それに伴って高校現場に関わることでですけども、採点基準がそもそも明確にされていないということと、コンストラクトが違うことに伴ってウェイトを置く観点が当然変わってくる、試験によって変わってくるということが想定されるわけですけども、教育現場ではどのように指導すればよいのが分からないといった、その点についてどうお考えなのかということもご質問としてありました。

あとは、阿部先生のご指摘にもあったことですけども、対人恐怖ですとか、いわゆる言語障害以外の理由で支援や配慮が必要な受験生の対策としては、具体的に何を考えているのかといったところです。こちら辺については、羽藤先生についてもご質問がありましたのでちょっと重複してまいります。

あとは、羽藤先生も情報として今日お話しされてはいたんですけども、試験を受けての受験生の不満ですとか不安ですね、声のうるささについて、受験生の声というものを

集めているのかということです。これは GTEC さんのほうですね。そういうご意見です。

以上 GTEC の込山さまのほうですけれども、宮本先生。小中高の先生方から多く頂いた意見で、いろいろなご意見がありまして、そもそも高校の中にスピーキングが必要なかどうかというところでいろいろなご意見があるということが、まずこのアンケートから分かったんですけれども、そもそも英語を話すことにたけている先生が言語習得論に通じているとは限らない。そもそも、ですから指導体制として無理があるのではないかという、そういう意味で難しいのではないかと。

その一方で、ただ宮本先生のほうでもハードルを低くしたらという話もあったわけなんですけれども、それでは教育改革自体がなされないのではないかと。脱入試偏重型の教育を是正するという意味では、実施すること自体にポジティブな意味があるのではないかと。そのように賛成・反対というようなさまざまご意見があったわけですが、大きく言いますと、要は現状のままが良いとお考えなのかということと、あと宮本先生がご講演の中でされていた高校が育てたい英語の能力というのは、具体的にじゃあ何なのかと。逆に羽藤先生にも関係してきますけれども、大学が求める英語の能力はどうか。もっと言えば、この民間試験を利用するとか、しないかに限らず、このスピーキングの練習、またはテストというのが高校の教育の現場でそもそも必要なかどうか。そういった少し大きな問いになりますけれども、そういったご質問もすぐく受けました。

あとは具体的な対応策は何かということが少し意見として乏しいのではないかと。ということもついでに、宮本先生または羽藤先生に対してありました。こういった技術的またはセキュリティーの問題があるときにどのような形での、では利用方式ですね、みなし満点にするとか加算ですとかいろいろあったと思いますけれども、具体的な対応策としてどういうものがあるとお考えなのか。

そして、これは羽藤先生にということですが、すけれども、もしご自身が政策を決めることができる立場にいらっしゃるとすれば、今後 10 年、センター試験のような共通テストを続けるべきかどうか、それ以外のやり方があるのかどうかということをお教えいただければと思います。

あとは少し細かいところですが、羽藤先生の開発実践の中でスピーキング入試をされたときに、その入試を経て採った学生さんと、それ以外の通常の英語のテストを経て採った学生さん、または、そういうような教育を受けている学生さんとはどのような違いがあるかということを実感として受けていただけるかと、そういったご質問がありました。

濱中：

私のほうから最後、阿部先生への質問について読み上げたいと思います。3 点ほどに大きくまとめたいと思うんですけれども。

まず 1 点目が 4 技能の均等について。4 技能の均等やバランスという言葉は、私自身もとても気になっていました。そこで、この問題に対して批判的に検討されている阿部先生にぜひご意見を伺いたいんですけれども

も、この均等やバランスというものをどういうふうに考えればいいのか、先生のご意見をもう少し伺いたいというのが1点目になります。

2点目は、先ほど宮本先生のご講演のときに、ちょっと拍手も起きました新しい試験の4技能試験の活用方法についてなんですけれども、阿部先生は個人的にどう活用すればいいと思われませんか。ご質問が、「東大の活用について」と書いてあるんですけども、難しいようであれば、もう少し一般化してお答えになっていただければと思います。

そして3番目なんですけれども、やはりこれから子どもたちは実際に英語を使って、いろんな国の人たちと関わっていく必要は出てくるんだろうと思います。ですが、やはり入試に課さなければ話すことに取り組むということはやはりしないのではないかと思うのですが、その点についてどうお考えですか。阿部先生的英語の入試デザイン、英語教育のデザイン、そういったものを知りたいですという質問です。

これに関しましては、これからAIの時代になることを踏まえた意見をうかがいたいという声も寄せられています。AI時代になりますと、英語を巡る環境も大きく変わってきますので、その点についてもちょっと追加しながらご意見が欲しいということです。以上です。

南風原：

フロアの質問者だけでもシンポジウムができそうな、大変素晴らしい内容で、ぜひこれは整理して、今のは一部だと思えますの

で、全部を先生方にお渡ししたいと思えます。また、可能であれば、皆さんともシェアしたいと思えます。

それでは、質問の一部とはいえ、それでも大変たくさんの質問がありましたので、それぞれ、答えられるもの、答えないものを基本3分ずつぐらいでお願いします。

山田：

なるべくいただいたものを全て答えたいと思えますけれども、経済的な支援、ごもつともだと思えます。われわれも、もちろん先ほど申し上げた就学支援金とか奨学給付金とか、高校生の経済的な支援、これまでも実施しています。新しい経済パッケージでも大学の受験料という措置をさせていただきたいというふうに考えてます。団体への働き掛け、または国ができること全てのことについて取り組んでいきたいと思えます。

で、メンタルにかかわらず障害を持たれている方、私も今緊張でスピーキングに障害がありますけど、大学でぜひご配慮いただく部分もあるのかなと思っています。4技能、やっぱり技能数が増えれば増えるほど障害の影響を受ける場合がありますので、そういったところをぜひ勘案して、その成果を一律ではなくて、障害のある方については丁寧に聞き取って大学のほうで活用の際、配慮をいただけるとありがたいなと思ってます。

均等については、必ずしもわれわれのほうは均等と言ったことはたぶんなくて、極端な偏りがないようにということを申し上げています。時間的にはどんなテストも、たぶんスピーキングの時間は短くて、リーディングの時間は長いってというような状

況があると思います。それが即、悪いというふうには思っておりません。試験の特性でそういう場合が多いとは思いますが、絶対の均等性を求めるということはしていないかなと思っております。

センターの課題は先ほど申し上げたとおりで、センターはいろいろ工夫をしておりますけれども、先ほど申し上げたように2技能しか評価ができてない、それが高校の英語教育の足を引っ張ってるのではないかという認識をしております。A案、B案を並べたり、4年間しか共通テストの後継を今のところ明言してなかったりというのは、どちらかというむしろ高校生が両方に対策しなくちゃいけないというようなことから、そういう方針を出しているということです。2技能のリーディング、リスニングの力が落ちる、4技能をやると2技能の力が落ちるという結果は、私は複数の英語の専門家からお聞きしておりますけれどもむしろ逆で、スピーキングとかライティングに力を入れると色々な形で英語に触れるので、むしろ全体的に力が伸びるという話も聞いております。もしかしたら込山さんに、なんか言及していただけるといいのかもしれませんが、そういう話もあります。

セキュリティについては、基準のほうで確認をしております。Pマークの取得ですか、そういったところを確認して審査をしております。

試験の一本化については、片峰先生からも言及がありましたし、会場からもご質問をいただきました。ほんとは京都工繊大みたいに、われわれも独自で自分の試験ができればいいというふうに思っていましたし、将来的にももちろんできれば、それはそれで

理想なのかもしれませんが、その条件を整備するのに相当な時間がかかること、リスニングを見ていただければ分かると思っておりますけれども、リスニングですらあれだけの課題があったものを、一気にスピーキングを国が60万人一遍にできるということクリアできる今見通しが立ってないので、それは将来的な宿題とさせていただきたいなと思っております。

4年間、センター試験、共通テストとこの民間の事業は併存して、国大協からも強いご要請をいただいて、高校からも強いご要請をいただいて、4年間は少なくとも併存をさせます。課題について検証して、どういった形で民間の試験結果を活用できるのか、大学の方たちとも頭を突き合わせて検討をさせていただきたいなと思っております。

片峰：

ご質問に対する答えになるかどうか、もうちょっと総論的な話をさせていただきますけど。

今回の国大協の対応は、結構難しかったと思います。今からも難しいと思う。歴史的に共通試験、センター試験のスタートは国立大学が主催する試験であった。これが大衆化してきたわけですね、ある段階で。そして今回の新しい共通試験には日本の教育改革全体を担うという新しい僕はミッションが加わった。

その一方で日本の大学、国立大学も法人化以降、いわゆる個性化、あるいは機能分化、機能強化っていう中で非常に多様化をし始めているわけですよ。その中で、やっぱり入学生に対するいわゆる要求、ニーズっていうのがそれぞれの大学でやっぱり多

様化してるんだろうと思います。その中で国大協としてどういう対応をするかと、そこが非常に難しかった、あるいは難しいところだろうと思うんですね。

結局は、結論は先ほど申しましたけど、基本的にはそういう個性化、多様性というところは、やはり個別入試でそれぞれの大学が工夫して、やっぱりそこはやると。要求のレベルも違うでしょうし。

だけど、もう1つ、日本の教育全体に対する国立大学の責任という観点もあります。これから日本の18歳人口はどんどんどんどん減ってくるわけですよ。今の高校生の平均レベルが今のままだったら、東京大学といえども国立大学に入ってくる学生たちのレベルもおおのずから、定員が同じだったとすればですね、下がっていくわけですよ。そういった意味で国立大学にとっても全体の底上げっていうのは必要だし、先ほど申しましたように。しかも、その中で知識や技能のレベルだけではなくて、コンピテンシーであったり協働性であったり、あるいはもっと、暗黙知みたいなことであったり、そういった新しいものが要求されてくるわけですよ。

そういった中で、共通試験に対しては、非常に多様性のある国立大学なんだけど、国大協として一体的に対応することが要するに公益にも資するし、大きな目でいえば、それぞれの国立大学にも資するんだというのが基本的な考え方だったと思います。その中で今回のスピード感等々でいろいろ問題はあったのかもしれませんが、今まではご存じのとおりに対応でここまで来たということかなと思ってます。

込山：

それでは、私より数点、ご返答させていただこうと思っております。

採点そして測定の精度というところですが、まず測定の精度というところでご説明いたしますと、我々を含めて他の外部検定試験業者もスコアで出す絶対評価型のテストはIRT、項目応答理論を使っておりますが、それに関しては1つ1つの問題に困難度、難しさというところが定められていまして、それを決めるのに事前のテストが必要になります。その事前テストがいかにか受験者の能力の分布を正しく反映しているかというところで、その母集団が本物の母集団とどれだけ近いのか、このような説明を南風原先生の前でするのは何なんですけど、こういう測定の、いわゆるセオリーに則った形で我々は常に、この20年間測定をするために取り組んできたというところが1点目です。

もう1つは、採点の精度についてですが、羽藤先生は英語教育の専門家ですので、また詳しくあるかもしれませんが、第二言語習得の中では、この発話、そして書くことを含めた評価に関しましては、複雑性と正確さと流暢さ、この3つを測定すべきという原則があります。先ほど私がお説明申し上げた意見陳述の問題に関して、この採点基準をご説明しますと、まず、その複雑性というところであれば、ゴール・アチーブメントという形で意見と理由を書かせます。そして一方でリングイスティック・コンピテンシーと言っていますが、それを効果的に伝える力という点で、語彙、流暢さ、文法、発音の4つの観点で付けています。その最初の立脚点、複雑性・正確性・流暢さというところを意識することで正しい採点基準

になると思いますし、逆に採点基準を作ったときに、その採点観点の全てにしっかり受験生が存在していないと、それは採点観点の意味がありませんから、それが測定の部分で主に関わってくると思いますが、そのようなことを常にモニタリングしながら実際の被験者に合った問題作成をしているというところです。

先ほど阿部先生からありました th と s の発音についての評価ですけれども、そこは私たちパートの A の音読からパートの D の意見陳述、難しさに分けて、4 パターンに分けていますが、パート A、パート B のそれほど高い英語力、スピーキング力を測らないところに関しては、きちんと意が伝わっているかということで、英語話者の採点者が付けるときに、それは意味を阻害するものでなければ、そこは問わないという形にしていますので、逆に細かく見られるからモチベーションが上がりにくいという点は、GTEC の採点観点に関していえば、そのようなものはないという形で見ていただければと思っています。

2 目のご質問、4 技能均等論、方法論に関して、これも色々な方で意見があると思いますが、私は 1 つ、ティーチングとテストを大きく分けて考える必要があるのではないかと考えています。ティーチングに関しては、学習指導要領にも書かれております通り、技能は総合的に、統合的な活動を通して育むという形になっています。そうすると、例えばある授業の中で、耳で聞いて生徒が話をするという活動を指導計画として決めてた授業があったとします。学校の授業であれば、まず先生が発話し、聞かせたことに対して生徒が理解しているかど

うかというのを全員がきちんと理解しているかどうかを確かめます。その確かめるときには日本語も使います。学習指導要領の中では原則英語で活動することを基本とするのですが、日本語を使ってはいけないということは、決して駄目だと言っているわけではないと思います。その段階で、みんなが理解した上で、今度はじゃあ話す活動というのが授業、ティーチングのスタイルだと思います。

ただ、一方でテストングに関しては、生徒が話したときに、話せなかった原因が何だったのか、そもそも最初に聞いたインプットの情報が分からなかったから答えられなかったのか、それとも質問は聞いて分かったんだけど内容が分からなくて答えられなかったのかというのは大きな違いだと思います。アセスメントに関しては、アセスメント・ラーニングという言葉があるように、やはりウォッシュバックの中でその診断結果から次の学習者、次の指導者がどのような形で取り組んだほうがいいのかというところに示唆を与えるのがアセスメントだと思っていますので、その観点からやはりスコアを技能ごとに分けるというのはすごくリーズナブルだと私は考えています。

あと、最後にスピーキング指導が現場で必要かという話がありましたが、これも第二言語習得の中では 1980 年代にスウェインがアウトプット仮説という形で、アウトプットをすることによって、よりインプットの質も高まっていくということをカナダの例で実証していることもあります。またその後、エリスという研究者、またはロングという研究者がタスクベース、先ほど講演で学習指導要領の説明で申し上げましたが、

その中で、今まさにスーパーグローバルハイスクールでは特に CLIL (Content and Language Integrated Learning) といわれるようなやり方で、少しでも英語ですが、どれだけ言語活動を当事者意識を持って先ほどのオーセンティック・本物に生徒が触れるような素材の中で行うように指導していき相乗効果を高めていくかという理論に基づいて、今の現場の英語教育になりつつあると認識しております。いったん、回答としてはここで終わらせていただきます。

羽藤：

今、込山さんがおっしゃったことで、また、ここでごめんなさい。

まず、採点基準ですけれども、例えば complexity、fluency、accuracy っておっしゃって、それを5つに分けて15とかで、そんなのでは見れません(笑)。採算合いません。例えば TOEFL なんかはすごく複雑なのを出して、「公表用」って小さく書いてあります。現実には、少なくとも私たちがやってるところでは、そんなに細かく見れないです。だから、何を見ているか、それを中に入れて誰かが見ればいいだけで、全部出す必要はなくて、そこのところはやっぱり国の責任じゃないのかなと私は思います。で、そうしたほうが業者さんにとっても絶対いいと思います。

まず、私にご質問をいただいたものですが、コンストラクト、構成概念の違うものを入試に使うことについてどう思うかは、もうお話ししたとおりでアウトです。テストは一本化するしかないと思います。あるいは、「不公平です」と皆さんに分かってもらう努力をする、あるいは「不公平だけれ

ども、それをオーバーライドするこういうものがあります」ということをちゃんと国民に説明しないと、あたかも公平のようにまやかしの対照表を作って納得させるのは絶対よくないと思います。これは、違うものを測ってるんですから仕方がないと思います。だから、「不公平です。でもこういう利点があります」とか、そこまで国民を納得させるのであれば、そうされたらいいと思います。

それから、不公平性について声を集めているのかっていうのは、もちろん今日発表させていただいたのは、私たちが1年目は稚拙なアンケートしかできなかったんですが、そこから3年間は確実に同じもので集めているアンケートの集計を出させていただきました。講演資料(羽藤スライド33・34 ページ)にアンケート結果が出てます。ただ、見ていただいたら分かるんですけど、大半は大丈夫なんです。要するに「回答が妨げになったか」とか、「自分の回答が影響されたか」とか、「真似できる環境だったか」とかって、大半は大丈夫なんです。だけど、アンケートには自由記述のところもあるわけです。もうぼろぼろに書いてます。「カンニングをした」とかなんとかとか。要するに、少数派がひどい意見を書いてくるわけです。だから、さっきお話ししたように、もしかしたら個人の気質によるんじゃないかと思うっていうのは、そういうことです。

今は、うちの Interactive English っていう科目の成績の10%になるんです。それぐらいだったら、「いいかげんにしろ」とか、「カンニングするやつがいる」とかで済むかも分からないけど、入試になったらどうなのかなっていうのは想像がつかないです

というのを話しさせていただきました。
確実にデータに基づいたお話です。

それから、3番目の私に文科大臣させてくれたらというのですけれども、まず「一律」というのをやめたらいいと思います。さっき国大協のアンケートで、多くの大学が「一律にしてほしい」と回答したというふうにおっしゃられてましたけど、それは分からないからですね。どうしていいか分からないから、みんななんか目安が欲しいというふうに、それも短期間ですから、答えただと思うんですけれども。もう少し、さっきも言いましたけど柔軟な発想で堅実に、要するに急に4技能を均等に配点する、さっき宮本先生がおっしゃってましたけれども、突然そうするとか、突然一律とか、そんなんじゃないなくて、少しずつやることもできるだろうって思うんですけれども。テストというのは、在る能力を測るものですから、ない能力を測ってどうするんですかって。だから、能力がないとか、差がないとかって分かっているのに、そこを測ってどうするんですかっていう感じだから、均等配点ではなくって、少しずつ増やしていくというようなことができる条件を担保することが必要かなと思います。

それは、国立大学も同じで、「一律にみんなに」っていうのは、あたかも公平なように聞こえるけど、ちっとも公平じゃなくって、例えば、そのオルタナティブのところに書きましたけれども、これは全然どうにもならない案かもしれないけれども、例えば、「どこの大学も30%だけ4技能テストを経た人を入れましょう」みたいな枠組みで、「あとは各大学でしてね」っていう自由さもあっていいと思うんですよね。そうした

ら、さっきも言いました学習障害の人も、あるいは聴覚障害の人もほかの道を選べるし、あるいは東大がこのテストだから、絶対このテスト受けなきゃいけないっていうようなこともない、ほかの道を選べばいいわけですから。もうちょっとフレキシブルに頭を働かせてやることはできるんじゃないかと、私が文科大臣になったらしたいなと思います。

それを見ると、やっぱり今回は「民間ありき」だったんじゃないのか。最初からもう決まっていた、「民間ありき」やから、こんなに頭固いんやろうと。真面目に順番に考えていったら、こんなことには絶対ならへんかったやろうと私は思います。それだけです。

阿部：

だいたい私が言おうとすることは、いつも羽藤先生が言っちゃうので、もう言わなくてもいいんですけども、最後のところからフォローすると、その4技能型をどうすればいいですかっていうご質問があったので、時間のゆるす範囲でお話できればと思います。

おっしゃるとおり、何で4技能っていうキャッチフレーズが独り歩きしてるのか、どうも分かんないんですね。で、1つの答えとしては民間試験、ベネッセさんがいるときで申し訳ないですけど、民間試験が4技能型にしてるから4技能って言わないと話が通らなくなっちゃうという話かなっていう気もするんです。単に「発声もしましよよ」とか、「しゃべりもやりましよよ」と言ったって何の変わりもないと思うんですよね、実際には。何で4技能なんですかっ

ていうときに、こんどはそれを正当化するために、「均等」とか「バランスよく」っていうキャッチフレーズが出てきたんじゃないでしょうか。均等って言わないと、別に今もセンター試験で間接的に4つやってますよ、と言われてしまう。たとえばセンター試験のテストでは半分以上は会話文などを使っている。たぶん学習指導要領のオーラルコミュニケーション重視のスタンスをなるべく反映させようとして会話的な要素を取り入れようと問題作成者が考えてああいう問題になっているんだと思います。

先ほど私が山田さんにずいぶん細かいことで質問したと思われた人もいるかもしれませんが、なんかこう、わざわざセンター試験を劣化させて2技能にして、「センター試験は2技能だからいかん」という理屈を立てるのはどういうことなのでしょう。まさに某文科大臣の主張がそうでしたね。センター試験は1技能だとかって言うわけです。実際にはそうじゃないのに、違っていていう意見を封ずるためにわざと2技能にしている。これはほんとにしょうもないレベルの詭弁めいた問題のような気がします。それとは別に、なんか英語教育っていうのがほかの科目に比べてどうしてもキャッチフレーズ型になりやすいということも確認しておきたいです。「4技能」とか「コミュニケーション」といった耳触りのいい語を連呼したがる人がいる。

山田さんの使われたスライドの7ページのところで、学習指導要領の「聞くこと」、「話すこと」のコミュニケーション何とかっていう部分を引用されているのですが、私は僭越ながらこの部分を拙著で添削して、コミュニケーションっていう部分を全部取

ってみせました。そのほうがずっと意味が通ると言いたかったのです。こういう種類の「コミュニケーション」の濫用って、ほんと意味がないように私には感じられるんです。普通に言語能力と言い換えるか、取っちゃったほうが意味がよっぽどすっきりする。コミュニケーションっていうことをなんで1つのセンテンスの中でこんなに何度も言わなきゃいけないのかっていうと、なんかやっぱりそういうふうにある種のムードづくり、粉飾のようなことをしないと新しいことをしてるように見えないからということがあるのかなって感じがしています。

その理由を突き詰めて考えると、やっぱり英語っていう科目がもともと——今日の原稿の最後のほうに書いてあることですが——なんか西洋文化崇拜の成れの果てで英語信仰、英語教みたいなものの上に乗っかっていて、信ずる者は救われる的な世界からなかなか脱却できていないように思える。だから、どうしてもきらきらしたきれいなことをいわないといけなくなる。何しろ英語教なので。ところが、「きらきら看板」が現実とすごい乖離しているし、そもそも何言ってんだかよく分からない。こんなにコミュニケーションって連呼して、何を言ってるのか分かんないですよ。さっきの4技能と一緒に、聞こえがいいことだけを張り付けて、前に進めようとしているっていうのが、特に今回の政策の特徴です。もともとそういう傾向があるのが英語教育のカルチャーなのかもしれません。だから、そこはちょっと整理していただきたいなっていう感じがしてるわけです。

じゃあ、どうしたらいいか。あんたはどうするんだみたいなことを言おうと思ってい

たんですけど、私はリスニングっていうのが、やっぱり一番大事だと思ってます。リスニングは費用対効果がいいって言うんでしょうかね、時間をかければ誰でもある程度は身につく。よく海外に住むと6カ月目に突然聞こえるようになるって言います。これは、ほんと、みんな言うんですね。6ヶ月の次が1年目で、その次が2年目で、なんかある種、花粉症みたいな感じで、ある程度アレルギー物質がたまると突然症状がでるみたいな。私の経験でもそういうことはありました。なぜそんなことが起きるのか。いろんな要因があると思いますけども、間違いなく言えるのは海外に行くとき必死になるんですね。たぶん絶望を味わう。根源的な不安を知るんですね。何にもましてリスニングがそうだということです。周りの言うことが分かんないと、ほんとに不安になる。それを経験して6カ月たつと、何かが変わる。

今回の英語改革では、海外で勉強された方とか、自分は英語ができるんだって一言ある方がいろいろと意見をおっしゃってるわけですけども、この方達は、今私が言ったような必死の経験をしたりしてる場合が多いわけです。でも、そういう英語漬けを経験してきたときのロジックをそのまま日本の公教育に適用して、週5時間しか英語に触れてない人に適用することには無理がある。海外に行った人は、言ってみれば英語の海で泳いできたわけです。これに対し、英語の授業でしか英語を受けてない人っていうのは、たぶん水深10センチぐらいのところまで泳ぎの練習をしているのです。ところが海外組の人はそこで「俺と同じようなやり方で泳ぎを覚えろ」っていう。水深10センチ

なのに「英語の授業は英語で」とかいったら、もう全然必要なことが身に付かないです。水深10センチなら、水深10センチなりの勉強法があるのです。

そういう状況の中でどうしたらいいか。私はやっぱり、英語の基礎的な体幹を鍛えるためにリスニング中心と言いたい。英語という言語の「運動感覚」を学ぶにはリスニングが最適です。でも、それはちょっと細かい話なので今はあんまり踏み込めませんが、少なくとも言えるのは、やっぱり高校までの授業は土台の部分の鍛えるための助走期間っていうふうに考えるべきだと思うんですね。今の皆さんの4技能っていう言葉を使わせてもらおうと、高校までの授業で4技能を完璧にマスターしてる人は、ほぼいないと思いますね。海外から帰ってきた人などを別にすれば。

だからこそ、将来英語を使うかもしれない人が、その機会を奪われないように高校までの授業で準備してあげるっていう発想が大事になります。高校までの授業で、取りあえず4技能できるようになりますみたいなうたい文句をうたって、中途半端に表層だけできるようになったと言い張る「やったつもり4技能」とか、あるいは表層だけはアリバイ的に4技能したことにする「アリバイ4技能」っていうのは、害が大きいだけです。もちろん授業の中でも発声練習とかはするべきだと思いますし、スピーキングの体験もあつたほうがいいに決まっていますが、何より高校までで効率的に勉強できる部分には力を注いで鍛えるのが大事です。しゃくし定規に「均等」とか「バランスよく」といった「きらきらレトリック」をふりかざす人に限って、現実の言語習得のことを考

えていないように思います。

あと、ベネッセさんがちょっとおっしゃったことにも質問したいことが無きにしもあらずですが、またそれは別の機会に、また今後もどうぞよろしく申し上げます（笑）。

宮本：

何点かいただきましたけども、高等学校はもうご承知のように学習指導要領に定めた内容を教えるっていうことですから、当然英語について中身が変わってくれば、それに対応した教育をしなくてはならないので、スピーキングを含めた技能をより充実させなさいっていう方向性になっていますから、当然そういう方向でこれからも授業は行っていきます。

ただ、教える教員のほうは、これ大変です。ここにいる皆さんと同じような英語の授業を高校で自分が教わってきて、長年そういうふうな授業をやってきた先生方に、今度はもう少し授業を変えていきなさいっていうことを今求められているわけですから、当然、研修をして授業改善をして教えていかなくちゃいけないですから、そうはいってもいきなり求めるところまで行くっていうふうにはなかなかいかないだろうっていうふうに思っています。

それから、ハードルを低くするっていうことは改革に後ろ向きではないかっていうことなのですけども、一番今何が問題なのかっていうと、この新しいセンター試験の後継の共通テストの英語の部分を民間検定で見ましようっていうところに対して私は問題だって言ってるんです。つまり、ほかの教科は同じような目標で全部試験をやるわけです。英語以外。英語だけは、じゃあそ

うじゃなくて別のものを入れるっていうことで、他の教科と併せて評価ってできるんですかっていうことなんですね。つまり、今のセンター試験は英語も含めて全部の教科、科目に対して同じ目標で、こういう力を問うということを明確にしながら全部作問をしているわけです。でも、英語だけこれを外してしまったら、この英語って教科ってそもそも何なんですかっていうことになります。AOや推薦で今でも検定を使ってるじゃないかという意見もありますが、それは、個々の大学が個々の大学に入ってくる生徒に対する選抜のために使ってるわけで、それと今回のこの共通テストで検定試験を入れるっていうことは全く違うってことなのです。

国立大学などの大学に進学しようとする60万人近い生徒が等しく受ける試験であるってことです。しかも、ほかの教科と、科目と違う物差しでこれを測ろうとするってことが大丈夫なのですかっていうところに対する懸念だってことです。だから、そのところがまずいいのかどうかということ、やっぱりしっかりと考えていただきたい。

で、いろんな課題がある中で、それでもこの英語の資格・検定試験を使うという方向であるのであれば、ハードルは低くしたほうがいいんじゃないですか、そのほうがいろんな意味で影響はないのではないのでしょうか。で、他の科目と同じようなコンセプトで作っている英語の共通試験も併せて使ったほうがいいんじゃないんですかっていうことを言ってるわけで、改革に後ろ向きだっていうことではありません。

じゃあ、どうすればいいのか。これは公的な機関が新たな試験を作るという努力をすべきです。これは、いろんな事情があつてな

なかなかできない。でも、これからそれこそ AI を含めているような技術が進歩していく中で、今できないからと言って今の段階で旗を降ろすっていうこと自体が僕はおかしいと思うんですね。現に東京都は今度都立高校の入試の中でスピーキングの試験を導入する、そういうような方向性を去年の 12 月に発表しました。検討の途中まで出てきた課題は大学入試と全く同じです。ところが、結論が違います。東京都教育委員会は、民間の知見を活用して独自の試験を開発すると決めました。約 6 万人ですよ。センター試験受験者の 10 分の 1 です。それだけの人間に対して、スピーキング力を測る新たな試験ができないかっていう方向で検討を開始するっていうふうに方向を舵を切って、これから具体的にどうされるかっていうのは検討されるんでしょうけども。だから、そういうようなことも含めて、やはり将来的には先ほど片峰先生もおっしゃったように、国が英語の 4 技能を測る試験を開発するという方向に行くのが本来の姿ではないかっていうふうに思います。以上です。

南風原：

どうもありがとうございました。このまま、朝まで議論したいところですけども、終了時間となりました。本日は、実際に国の政策を進めておられる文科省の担当者の方から、その政策を史上最悪と称して本を書かれた方まで、まさに多方面の方においでいただいて、お話を伺うことができました。このシンポジウムを通して、趣旨で述べましたとおり、参加の皆さまの理解が深まって、今後の方向性の検討に役立つ知見が得られたのでしたら大変幸いに思います。

本日は、登壇者の皆さま、そして副会場を含め本当に多くの参加者の皆さま、誠にありがとうございました。これにて閉会いたします。どうぞ、お気を付けてお帰りください。(拍手)

フロアからの質問

フロアからの質問

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
1	山田, 込山	大学入試英語成績提供システム参加要件②について	<p>①山田先生へ 参加要件第4の9にかんして伺います。 試験監督として教職員の活用を認めていらっしゃるようですが、センター試験の代替のような、受験生にとっては人生を左右するような試験の監督は教職員にとって業務増大であるだけでなく心理的負担も大きいと感じますが如何でしょうか。</p> <p>②込山様へ Speaking Testにかんして、オフラインの環境ではテストをうけている生徒のtask、solving、competenceは測れるかもしれませんが、やりとりをするinteractionの力は測れないということでしょうか。</p>	B)小中高 教職員
2	山田	CEFRとの関連性について	かつて東京外国語大でCEFR事務局が講演を行った際、Can-Doリストは学習者の側の英語上達能力の判断材料で、資格試験化してはならないと言ったが、なぜ文部科学省は関連性を求めようとするのでしょうか？	B)小中高 教職員
3	山田	①大学入学共通テストでの英語4技能テスト結果の利用方法 ②GTECのCEFRでのレベルについて	<p>①大学入学共通テストを利用しない大学でも、英語4技能テストの結果の送付機能を利用する方法はありますか？</p> <p>②GTEC for studentsをC1まではかれるようにする計画はありますか？</p>	A)大学教 職員
4	山田	資格・検定試験の認定と評価について	CEFRの刻みが粗すぎて、入試で選抜に活用しにくいことに対して、対応する予定や考えがあれば伺いたい。	C)民間教育関係
5	山田, 込山	CEFR	<p>1) CEFRのCan-Doは、「評価の尺度」です。それを到達目標に使うことをどのように説明しますか？</p> <p>2) CEFRのgridは、非常にきめ細かく記述され、「話す」(spoken production)「やりとり」(spoken interaction)だけでも相当量あるのを、どう使うつもりですか？</p> <p>3) パソコンやタブレットで「話す力」が測定できますか？</p>	A)大学教 職員
6	山田, 込山	日本の英語教育におけるCEFRの導入について	CEFRは欧州評議会が複言語・複文化主義の理念を実現させるために作成した評価の尺度である。それをただ到達度目標として導入している。理念なく、テストのために用いるのはおかしい。CEFRが何のために存在するのか理解していますか？	D)学生
7	山田	CEFRの共通参照レベルについて	個人の中で、4技能でCEFRの共通参照レベル(A1,B2,...)にばらつきがあることがそもそもありえるのか。また、そのことは何を意味しているのか。	D)学生

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
8	山田	民間検定試験を入試の合否に使うことへの疑問	センター試験、国立二次試験、私大の一般入試は、実施の際に非常に厳密なセキュリティ体制で実施していると思います。そこに受験生からの信頼・信用があります。民間テストの結果を利用となると、同等の厳密な体制での実施を文科省が保証してくれるのでしょうか？準会場での実施、実際の試験教室での管理等でも厳密な実施を保證できることを表明できなければ、活用の理解は得られないと思います。GTECのスライド29くらいの対応では公平性・公正性は保証されるとは信じがたいものがあります。これまでのセンター試験には、信を得るだけの価値があります。すでにいくつもの大学で使用しているからという理由で、東大など競争のはげしい大学でも同列に導入というのは問題あると思います。	A)大学教職員
9	山田	現行センター試験について	現行のセンター試験は、それほどにも不十分な点が多いのでしょうか。では、今までのセンター試験はいったい何だったのですか。（「学習指導要領の改訂」によるからという理由以外でお答えください）	B)小中高教職員
10	山田, 込山	スピーキングとライティングの外部試験の採点の質の検証について	海外採点拠点まで含めて、実際にこのくらいの答案（スピーチ例）で、これくらいの得点になったという情報をベネッセは公開されますか？また妥当性を文科省は検証するのでしょうか。	C)民間教育関係
11	山田, 片峰	「なぜ民間試験なのか？」について	民間試験の問題点が指摘されている中、「なぜ民間試験を活用するのか？」「メリットがあるのか？」「問題点の解決に向けての取組はどう考えているのか」などを知りたいです。	B)小中高教職員
12	山田, 込山	書く、話すの採点基準について	何をもってすぐれた「書く」「話す」力であると判断するのか、それは外部試験間で共通しているのか	A)大学教職員
13	山田	「外部試験」のセンター試験化はできないのか	「センター試験では英語四技能は無理」と文科省、国大協が判断したが、民間にできることであれば、できるのではないかと、GTECにせよ、英検にせよ、それをそのまま国営で行う方が公平性を確保できるのではないかと。	A)大学教職員
14	山田, 片峰	センター試験の英語廃止について	なぜ全面的に外部委託なのですか。スピーキングとライティングテストが物理的に無理というのは方法を諦めているとしか思えません。高校の教科書を検定しておきながら、高大接続を保證するのが外部テストというのは、高校に外部テスト対策をすることを考えると整合性が認められません。	A)大学教職員
15	山田	教育の公正性について	教育という国と国民にとって非常に大切な分野が、事実上1つの会社による寡占状態になっていることに対して、どうお考えですか。 ・センター試験のデータ分析 ・Japan-e-portfolioに接続するシステム ・センター新テストの採点委託 ・4技能を測定するための民間検定などなど 現場にいと、あらゆる政策に特定の企業が入り込んでいることを感じます。	B)小中高教職員
16	山田	検定の受験機会の公平性について	河合塾では、入塾生にケンブリッジ英検の無料受験をしております。 ・受験の公平性 ・入試と民間業者の接近について ご意見いただけると幸いです。ご講演いただき、ありがとうございました。	C)民間教育関係

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
17	山田	障害を持った方の4技能評価について	GTECの説明にはあったが、国（全体）の方針として、4技能すべてを満足に発揮することができない（一部の能力が障害により発揮できない）場合、これに対する配慮には、公平性が保たれるのか。（資格試験により、扱いの差が出ないようにできるのか）	C)民間教育関係
18	山田	英語民間試験を活用することの弊害について	英語民間の活用とは、相応の私費負担を国民に求めるものであります。公教育を受ける世帯における私費負担の高さは、共通した社会課題であり、試験や就学をめぐる費用負担（公的負担）は、現状の教育改革では非常に限定的、かつ実質・実態を伴わないものであると言わざるを得ません。競争と隣り合わせである（外部試験、大学入試）やこの私費負担の現状を鑑みるに、より包括的な公費保障をしなければ、国民の権利として守られるべき公共性・平等性のある公教育の設計とは言えないのではないのでしょうか。これについて、つまり「英語民間試験活用による大学入学者選抜の弊害を文科省はどれほど認識しているのか」について、お答えいただきたいと思います。	D)学生
19	山田	民間の資格・検定試験を大学入試に導入する際に必要な条件について	①参加要件の中に問題と解答の公開がないのはなぜか。昨年の阪大・京大の入試で不適切な問題があったことが、外部からの指摘で明らかになりました。これは問題と解答が公表されたおり、予備校講師や高校教師が見つけたためです。こうした外部の目にさらす外部の指摘を受ける制度のない試験を活用した場合、入試がブラックボックスにおちいるおそれがあるのではないのでしょうか。②その際、もし不適切な出題があったと分かった場合、どう対応するのでしょうか。公開性と検証性の担保はどこで？	E)その他
20	山田	高等教育無償化について	経済的に困難な学生のため、大学授業料、受験料を補助することは素晴らしいと思う。しかし、英語の外部テストやspeaking、writingを入れていくことは、実際試験に臨むまでの準備に民間塾など大きな支出が見込まれるのではないか。この点、経済的に困窮している学生をどう支援できますか？大学協会独自にこうした英語検定を行うことはできないのか？現状では民間企業への外部委託と見えてしまう。	A)大学教職員
21	山田	民間試験を活用（センター英語の廃止）	・システム会議の最終報告では、「民間試験の知見を活用」とされているが、実施方針では、「センター英語を廃止し、民間試験に替える」となった経緯で、どのような議論が何処であったのか？ ・併せて「32年度から実施可能性について検討」から「32年度から実施」になったのは？（可能であると判断した根拠？）	E)その他
22	山田	制度設計について	貴省が進めようとしている高大接続の理念からいって、英語Speaking（Writingも）・記述式は、「基礎診断」の方に機能分担していただいた方が指導・育成に役立つと思います。制度設計の際にそのようなことは検討されましたか。また、制度設計の抜本的な見直しを考慮しておられますか。	A)大学教職員
23	山田	民間の英語資格・検定試験の利用について	・高校（特に私立進学校）の授業が検定試験対策となってしまう可能性が高そうですが、そのあたりに何か対策は講じられるのでしょうか？（4技能は良いと思いますが、民間の英語資格・検定試験の利用はもっと慎重にされた方がよいのではないのでしょうか？） ・民間テストは指導要項に則っているのでしょうか？	-

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
24	山田	英語⇆国際語について	英語が国際語になりつつあると言われたが、その学術的根拠は何か。グローバル化とは使用言語を英語に一本化することではなく、世界にあるすべての言語を尊重することではないか。学校では、子どもたちが将来、どの言語を学ぶ際にも対応できるよう、文法・読解の指導を中心に行うべきだと思うが、その辺はどう考えているか。	B)小中高 教職員
25	山田	新制度（新テスト）におけるスピーキング技能の取り扱いについて	ありがとうございました。現行センター試験に関するご説明の箇所（配布冊子11ページ、PowerPoint18頁）①definitely、②democratic等の英単語について「A1の子たちは使わない」というご主旨の発言でした。（我々自身、これらの英単語の強勢にはあやしいものがあります） <質問>「話す」「書く」を評価するという新制度（新テスト）において重視されるのは、例えばパーティーでわいわいやるときに使うような「A1の子たち」も使えるような語のスピーキング能力なのでしょうか。あるいは、やはり「強勢」について学ぶことは本質的ではないのでしょうか。	C)民間教育関係
26	山田	新テスト導入後の各大学の自主性について	現在のセンター試験、その前身の共通1次試験は、基礎的な良問でおおまかなふるいにかかけ、2次（個別）試験で十分に手間と時間をかけて選抜するということであつたと思います。「四技能」の新テストの議論では、あたかもそれがすべてであるかのような勢いですが、外部テストを導入した場合、各大学の要求する英語力を測る個別試験において、各大学の自主性・独自性は、保証されるのでしょうか？指導要領は「法的拘束力を持つ」ことから、各大学に圧力はかからないのか、懸念しています。	B)小中高 教職員
27	山田	外部検定試験の成績の請求、提供について	JEPでは全ての外部検定試験一括で成績を請求、提供とあるが、実施は可能でしょうか。	A)大学教職員
28	山田	大学共通テスト、リスニング試験実施について	スライドP29の欄外に「個別音源機器以外の方法で実施する予定であるため」とありますが、具体的にどのような方法をお考えなのでしょう。	C)民間教育関係
29	山田	共通テスト英語について	H36年度以降も継続されるのではとの疑念がぬぐえませんが、本当になくなるのでしょうか。	C)民間教育関係
30	山田、片峰、込山	検定試験の実施会場について	例えば、英検の準会場実施やGTECの学校受験のスコアは、大学に提出する正式なスコアとして認められるかどうか。	B)小中高 教職員
31	山田	4技能測定の目的について	4技能を測定しなければならない理由は何でしょうか。4技能測定の目的をひとことで教えて下さい。	C)民間教育関係
32	山田、片峰	高等教育終了時の英語力担保について	学生の英語での発信力向上に関して、他国では入試ではなく、大学卒業時での英語力達成基準を設定しているケースが多くあるが、日本ではその議論があまりなされていないのはなぜでしょうか？入試よりも効果があるという論文もあります。	E)その他
33	山田	各大学の個別試験に関して	東大を始め、難関大で個別試験が変わらない限り、高校現場では学びの二面性が生じる。どう考えるか。	E)その他
34	山田	-	センター試験、現行のICP（個別音源）はどういうあたりに変わりますか？	C)民間教育関係
35	山田	外部試験の審査について	「大学入試英語成績提供システム」に参加申込のあった外部試験が参加要件を満たしているかどうかは、国が外部試験の内部に入り込んで審査するのでしょうか。それとも、業者の申告だけに基づいて（＝業者の言いなり）判断するのでしょうか。	A)大学教職員

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
36	山田	-	日本の大学入試センターが独自の4技能テストを開発する予定はないのか？ 統一テストのほうが公平ではないか？	C)民間教育関係
37	山田	本改革によって、本当に高校の英語教育が変わるのでしょうか。	私は、最近まで難関大進学校から「教育困難校」まで様々な高校現場にいた者です。高大接続改革の一つの趣旨として、大学入試を変えることによって高校教育の改革を図るものと理解していますが、先ほどの話では英語教育の改革においては、そうではないとのお話でありました。現実地方の多くの高校では必ずしもセンター試験を受けて大学進学にチャレンジする生徒ばかりではありません。そのような高校では、4技能の育成を図るねらいは実現されないように思います。大学入試を変えることによって高校教育改革を図ることの限界を感じざるを得ませんが、いかがでしょうか。	A)大学教職員
38	-	小中高の児童生徒の英語4技能（5領域）の力の涵養について	高等教育での学士力やグローバル人材の育成を目指す上で、その資質を有した児童・生徒を育成させる必要があることは理解できる。その為に大学入試の改革に取り組むことも理解できるが、根本の対策は初中教育に関わる教員の力量を備えられるような教職課程の充実や人材確保がまず国として取り組まねばならないと考えるが、いかがか？ 例えば、英語の教員養成課程では1年以上の海外留学を必須に、教員となった際には、その費用（留学に係る）を補てんするなど。	B)小中高教職員
39	山田	高校生の英語力に関わる問題意識について	speaking、writingに課題を抱える高校生の英語力の問題は、むしろ、学校現場における語学教育の限界だと考えることは出来ないのでしょうか？学校の授業で英語がマスターできるという幻想が問題では？	A)大学教職員
40	片峰	国大協による活用方法の統一化について	資格・検定試験の利用方法は受験生の志望校選定プロセスに影響を与えたいと思います。例えば高いスコアを持っている受験生は、そのスコアがアドバンテージとなる方法を採用している大学を選ぶ傾向が高くなり、低いスコアしか持っていない受験生は、そのスコアがハンデとならない方法を利用する大学を選ぶ可能性が高くなると思います。また優秀な学生を確保するための優遇措置として加点方式を採用する大学同士でも、うちは30点加点です、いやいやうちなら50点ですというような競争になってしまうのも望ましいことではないと思います。そうならないためのルールを、各大学が利用方式を決める前に、作っておくことが必要なのではないかと思いますが、その点についていかがお考えでしょうか。	A)大学教職員
41	片峰	-	共通テストの外国語で英語以外の外国語（例えば中国語やフランス語）を選択した受験生に対しても英語の認定試験を課すのが国大協の基本方針と考えてよいか？（一般入試の全受験生に認定試験を課すというお話だったので）	A)大学教職員
42	片峰	外部試験の配点は国立大は統一するのかについて	外部試験の得点化する場合「C2」を6点と読むか60点と読み換えるかで受験生の対応は変わってきます。どうお考えでしょうか。6点なら受験生は対策を講じないと思います。	C)民間教育関係

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
43	片峰	資料26ページ上段 国大協基本方針への 会長談話	受験生が見通しを持ち安心して準備に専念できるようとあるが、この「安心」とはどういう意味か？ 複数の外部検定が長期にわたり（4月～12月）複数回認められるとする現行の動きは、全く「安心して」とはならない。不安を高めるばかり。全体に対してひとつの試験を一時期に一回行うよう訴えることはできないものか。国大協の知見を結集して創るべきでは？それが受験者の安心につながるはず。	B)小中高 教職員
44	片峰	「共通試験への一体的対応」について	一体的対応を強調されていたが、改革の方向がまちがっていた場合、全員が失敗することになる。少なくとも外部試験の活用方法まで国大協で統一すべきではないと思うがどうか。それとも、未来を予測できているのだろうか。（皮肉です）	A)大学教 職員
45	片峰	高い英語力と、抽象 的思考を伴う英語力 と入試との関係	高い英語力をもつ学生であっても、トップレベルの海外大学でやっていくのは難しいとのことでしたが、では抽象的思考力を伴う英語力とはどのように育成されるのか。そして、新テストではそのような力は測定できるとお考えですか？	B)小中高 教職員
46	片峰	留学について	世界のトップレベルの大学の専門性の高い授業についていけないことを、英語力のせいにするのはやや乱暴な印象を受けましたが、いかがでしょうか。	D)学生
47	片峰	P26 認定試験の結果の 活用法	異なる認定試験の結果の評価で、CEFR以外の基準を策定するか？とありましたが、CEFR以外の基準で参考にしようとしているものはございますでしょうか。よろしくお願いたします。	C)民間教 育関係
48	片峰	統一か例示について	いずれの方針かをやはり知りたい	-
49	片峰	アクティブラーニング 導入	・4年経ってもなお対応できない学生がいるとのこと、教員側はどのような工夫をしているのか？ ・ご自身はどんな学生だったか？ ・reflective learnersははいはいけないのか？ ・学習目標から、Active、Reflectiveごとに設定しては？	A)大学教 職員
50	片峰	民間試験活用のその 先	民間試験の「知見」をご活用されたいとのことですが、現在まで培ってきた入試センターの持つノウハウと異なる点をお聞かせください。	C)民間教 育関係
51	片峰	認定民間英語試験を 選抜に活用すること について	活用方法、日本の高校生がほとんどA1のエリア。1点きざみで可否が判定されるところ可否にかかわる差異をつけられるのですか。	B)小中高 教職員
52	片峰	御発表中の統計につ いて	・資料P25の「賛同、意見なし」67%とありますが、なぜ「意見なし」も含めて67という数字を出したのでしょうか。「意見なし」は何%ですか。 ・P27の③についてですが、多文化社会学部入学者は何名いらっしゃいますか。母数によって印象が変わると思います。また③のH28では下がっている（かなり）ように見られますが、このことについては何故赤字印をそのまま右肩上がりに引っぱったのでしょうか。印象的にどうかと思います。	D)学生
53	片峰	認定試験と従来の試 験の併用について	・平成35年度までは認定試験と従来の試験を併用することについて、生徒は両方受験するという理解でよろしいでしょうか。 ・もし両方受験するというのであれば、英語だけでなく、他の科目にも勉強の仕方などの点で生徒に負担を強いることになると思われますが、その点はいかがお考えでしょうか。	-
54	込山	問題の公開について	項目反応理論などを用いたテスト運用を行う上で、非公開が原則として挙げられますが、ベネッセとしてはどのような対応を考えていらっしゃいますか？	D)学生

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
55	込山	GTECと検定教科書及び授業について	GTECが十分に考えた上で作られているのがよく分かりました。だとすると4技能を伸ばすには、GTECのテストをスライドP20, 21の資料のようにレベルの低い方から順番にこなしていけば自と英語力がつき、しかも大学入試の英語にも対応できることになりませんが、このGTECを教科書あるいは副教材として英語の授業の大半をこれに替えてしまいたくなります。 英語教育改革は、そういう方向性でしょうか？科目としても大昔のReading、Grammar、Compositionに戻して、そこにListeningとSpeakingを加えるだけのことなのかと思いました。4技能のスキル修得が大半の目標になってしまうのではないのでしょうか。	B)小中高 教職員
56	込山	CEFRについて	A. 山田先生にご質問します。 ・各資格・検定試験の難易度、受験料の違いなどで、不公平が生じないですか？ ・英検やGTECなど国内でしか通用しない資格検定では意味がないのではないですか？旺文社やベネッセの利権がからんでいないか？ B. 片峰先生にご質問します。 ・二次試験は、読解と文法・作文を問う従来のテストと変わらないのですか？それによって、指導が変わってくるのですが。 C. 込山先生にご質問します。 ・CEFRとの対応関係は、CEFRから正式に認定されているのですか？	C)民間教育関係
57	込山	採点の信頼性について	採点者（speaking、writing）の属性（居住国、学歴）と同一問題にかかわる採点者数（現行で）について教えて下さい。	-
58	込山	CEFRとのひも付けについて	CEFRに対応付けるには、GTECの妥当性、整合性、安定性を示す必要があるが、どのような検証作業をされているのか？Council of Europeが出したManualは、どう扱っているのか？おたずねしたいと思います。 ライティングの採点者は具体的にだれか？	C)民間教育関係
59	込山	タブレットのスピーキングについて	生徒さんは周りの声は気にならないのか？配慮はどう考えているのか？	C)民間教育関係
60	込山	GTECでの再試験等への対応について	機器トラブル、自然災害、公共交通機関トラブル等で、別日程での受験、再試験等はどのように実施していますか？その場合、どのように公平性を担保していますか？	C)民間教育関係
61	込山	GTEC評価の安定性について	Writing、Speakingについて、同一解答の採点結果の同一性の調査結果、保証などあるのでしょうか。	-
62	込山	GTECのRとLの問題の質について	GTECの問題例ですが、R（Reading）とL（Listening）は、現行のセンター試験のものとどこが違うのでしょうか？あまり違うようには見えませんが。	B)小中高 教職員
63	込山	GTECの活用法について	学校でのGTEC導入の検討が始まっている。4技能をはかり、授業改善の方法として意味があるとも思うが、GTECを基本とした授業改善の結果は、他の検定試験にも通じるものとなるのだろうか？複数の資格試験があり、傾向も4技能で求められるものもちがっていると、学校として対策がたてづらい。	B)小中高 教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
64	込山	試験問題の再使用について	IRTによる対応づけを行うには、必ず予備調査が行われるはずである。その時点で、試験問題は初出ではなくなる。一部受験生はそれを知り得る状態で受験することになり、繰り返し受験すれば、同じ問題が出題される可能性もゼロではない。著しく不公平だと考えるが如何か。問題を収集して解答の仕方を訓練することも起こるだろうが、それは教育改革の目的に著しく離反するのではないか？	A)大学教職員
65	込山	GTECと学習指導要領およびCEFRとの関係について	CEFRと指導要領は独立した文脈や理念で作られたもの GTEC－指導要領 GTEC－CEFR 両方の条件を設定するテストが果たして開発できるのか CEFRの理念をどのように踏まえておられますか？	A)大学教職員
66	込山	CEFRは何の略ですか。	－	A)大学教職員
67	片峰, 込山	WritingとSpeakingについて	GTECにおいてWritingの評価は専門のスタッフ2名（場合により+上位者）で採点されるとしていますが、これを入試として使った場合、1クラス40名の高校の現場ではそれに備えて練習させる教員が明らかにオーバーワークになります（→学校が疲弊します）。WとSは基本的に1対1で行なうものであり、1対40の高校でなく、大学入学後に各大学において少人数授業で厳しく指導すべきでないでしょうか。	B)小中高教職員
68	込山	GTEC学校準会場について	・本会場はどのくらいの規模で実施されるのか ・学校準会場への監督者の派遣が始まるのは2020年からか ・上記に関して、決定していないのなら、いつ発表されるのか	B)小中高教職員
69	込山	ライティングの評価について	（あまり発生しないことかもしれませんが）テスト受験者がBritish Englishを使用し、採点者がAmerican Englishの場合、どのように対応を行うのでしょうか。	-
70	込山	共通テストで利用できる外部検定について	生徒を指導する際、共通テストで採用された外部検定のうち何を選べばよいのか？何を基準にGTEC、英検、TEAP等を選べばよいのか？	B)小中高教職員
71	込山	試験監督者確保について	検定運営においてセキュリティの確保が非常に重要と考えるが、監督者選択、選抜の基準はどのように設定される予定か。	-
72	込山	スピーキングテストについて	次期学習要領では、4技能5領域となるが、タブレットの使用で「やりとり」をどう対応するのか？	A)大学教職員
73	込山	CEFRとの対応づけについて	対応づけは各民間団体が行うものと認識していますが、その対応づけはどのように保証できるのか？	B)小中高教職員
74	込山	テスト形式について、他国との比較は？	既に中国では、スピーキングテストをコンピューターに吹き込むという形で実施していると聞いている。そのような他国の例は参考にしているのか、どうか。	B)小中高教職員
75	込山	浪人生、社会人への対応について	大学受験を希望する高校卒業生（浪人生）や社会人が、GTECを受験する際には、近くの高校を会場として利用できるのか？	A)大学教職員
76	込山	高校での日常のテストとGTECの関係について	入試に用いるGTECの内容・形態は、高校で通常行われているテストと類似のものか、大きく異なるか？	-
77	込山	スピーキング、ライティングの採点者確保について	どのような方法で募集し、採用していますか。どのようにクオリティを保持していますか？（できますか？）	A)大学教職員,E)その他

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
78	込山	採点者（WとS）について	採点者は英語のネイティブスピーカーでしょうか。文法的な誤りはどの程度減点されるのでしょうか。→もし減点されない場合、文法的に雑な英文を書くというウォッシュバック効果が出てしまうことはないでしょうか。	E)その他
79	込山	CEFRとの対応づけ（GTECの）	早すぎてよく分かりませんでした。少し詳しく教えて下さい。	E)その他
80	込山	CEFRを活用したウォッシュバック効果について	なぜ、良い波及効果が期待できるのですか？	A)大学教職員
81	込山	冊子P38②CEFRとの対応関係	Speaking、WritingもIRTを用いてスコアを算出しているとありますが、これは可能なのでしょうか？どうすれば可能になるのかポイントだけでも教えて下さい。（もちろん可能な範囲でかまいません）	-
82	込山	受験方法について（準会場）	今は教員が試験官を務めているが、今後は行わないということですか？	B)小中高教職員
83	込山	GTECリスニング問題の日本語での指示が分かりにくい点について	GTEC（Advanced/Basic）のリスニング問題には、各問のたびに日本語で場面設定が入り、直後に英語レコーディングが流れ解答する問題がある。GTECリスニング問題の形式はTOEICに似ているが、TOEICには日本語は入らない。GTECでは日本語での思考から急に英語の思考に変えなければいけないという、実際の外国語リスニング環境では必要ない負荷がかかる。英検リスニングでもその負荷は感じられない。実質、日本の多くの高校生が4技能成績提供システムとしてGTECを採用することになるかと思うが、GTECはこのリスニング問題の欠点を改善する予定はあるのか。 （ちなみに、スライド6、GTEC問題例～Listening～Part Cとして載っているものがそれ） GTECの問題には、本当に外国語技能を問う時に必要なあたりの点が欠落している場合があり、英検のライティング評価への不安と同様にGTEC導入にも不安・不満があるというのが真の語学教師である高校教員の本音です。（GTEC、英検ともにタブレットでのスピーキングについては未知数）	B)小中高教職員
84	込山	不正受験の防止について	受験生の本人確認の方法（写真照合等）については、どう考えているのか？	C)民間教育関係
85	込山	GTEC実施	トラブルほとんどなかったとのことだが、そのわずかなトラブルについて教えて下さい。	B)小中高教職員
86	込山	「海外の採点拠点」について	くわしく説明してください。	A)大学教職員
87	込山	問題例（資料32p）について	語学学校のある建物が銀行の左隣とされていますが、この建物もし内部が吹抜だった場合「正解なし」となりませんか？ ひねくれた見方かもしれませんが、最近の入試ミスとの関連であえて伺います。右側の建物の内部に中2階がある可能性もありますよね。	A)大学教職員

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
88	込山	大学各学期試験における導入利用の可能性について	教養教育として英語カリキュラムを実施する限り、学生達の英語学習を高次元でリテンションすることは難しく、専門科目コンテンツとの接合が必要である。全学生に必修で学ばせる英語の試験が各教員が個別に作成し、採点する試験問題で実施する意味は本入試制度改革後、学習習慣化に資する教育効果・到達点の把握が必須である質保証の重要性から消失する。 ☆学部専門課程の基礎力コンテンツ（グローバル学問領域。例、経済・経営・法学・政治・工学）を設問化した実施は可能ですか。	A)大学教職員
89	込山	なぜGTECについてだけ言及したのか？	「英語民間試験の立場から」というテーマで話されましたが、「何を」主張したのでしょうか？主催者の意図も知りたい。	-
90	込山	GTECの今後について（資的・量的変化は予想されるか）	GTECの問題内容レベルについては、今後変わっていく可能性があるか、センター試験も受験生との対話を通し、40年近い間に変わってきました。本来自己到達レベルを計るテストだったものが受験生の知恵と戦う以上当然のことと思いますが。	B)小中高教職員
91	込山	国語もGTECのようなシステムがあるとよいと思います。	英語だけでなく、国語についてもGTECのようなしくみがあればよいと思いますが、いかがでしょうか。	B)小中高教職員
92	込山	GTEC 採点について	海外拠点で採点というが、どんなレベルの人がというどう採点しているのか。拠っている英語は、英米語か、ローカル英語、例えばオーストラリア英語などはどう扱うのか教えてほしい。	E)その他
93	込山	Speaking、Writing試験の効果について	speaking、writing試験の効果で、readingの成績がよくなっているという効果はありますか？ あるいは高校での受験者が増え出して、speaking、readingの試験問題難易度をあげることができたというような変化はありますか。	A)大学教職員
94	込山	GTEC (W・S) における採点基準について	どの外部試験においても、ライティングやスピーキングの採点基準が明確に示されておらず、どのような点に留意すればいいか助言できず、困っています。生徒への具体的な指導のためにも、採点基準を明確に（例えば、文法ミスは何個まで減点とするか）示してほしいと思っています。この点について、どのようにお考えでしょうか？	B)小中高教職員
95	山田、片峰	-	A. 大学入試センターが自力でスピーキングテストを作成するのをあきらめたのか？今後、着手するご予定はありますか。 B. 東京外大が自前で4技能テストを開発とのニュースがありますが、国大協としてのスタンスは？	C)民間教育関係
96	山田、込山	民間試験と共通テストの効果比較検証について	H32～35の間に両者が併用されますが、その英語教育や生徒の能力向上への効果を比較検討する計画はないのですか？ある場合は、どのような指標を考えていますか？	A)大学教職員
97	山田、込山	民間英語検定の受験料	一般の受験生（特に低所得の受験生への配慮ということではなく）の受験料をいかに低く抑えるかが重要と考えますが、まさか今までより高くなることはありませんよね？	-

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
98	-	-	<p>・会場につきまして 高等学校を会場とする場合、多くの日程（検定）を1年度中に何度も行うのは厳しいのではないかと、というお声を耳にすることが多いです。</p> <p>・CEFR対応につきまして 現在の各検定の対応表の中身を拝見しますと、取りやすさに差があるのではないかと、というお声を多くお聞きします。受験者を増やすために、検定業者がハードルを低く設定することを防ぐためのプロセスが必要かと思いました。</p> <p>大変勉強になりました。お休みのところ、誠にありがとうございました。私も、微力ながら、日本の教育のために全力を尽くしていきたいとエネルギーを頂きました。</p>	C)民間教育関係
99	-	-	PBTとCBTの違いについて、もう少し知りたいです。C1レベルの評価がほしければCBTも受験するしかないという理解で良いでしょうか。過去問(+解答)の公開状況や受験準備のやり方も教えて頂ければ幸いです。	A)大学教職員
100	-	大学人のさらなる努力について	入試改革にどう対応するか。「近未来の大学入学者の資質変容への想像力：大学教育改革のさらなる推進」(p.27) ⇒大学人、もう改革づかれていっばいっばいという声もよくきかれる。働き方改革もされている中、まだ大学人に努力をしないのか。まだ努力できる余地があるのか。少ない余地で入試という大きな問題に取り組むほうが無責任ではないか。	-
101	-	試験の一本化について	公平性を担保するには、試験を一本化すべきだと考えます。なぜできないのですか。なぜやろうとしないのですか。新しい試験を早くはじめるよりだれもが(受験生・保護者)納得できる形のものにすべきだと思います。	-
102	-	民間資格・検定試験とセンター英語の難易度調整について	ケンブリッジ英検、IELTSなど海外製の試験とGTEC、TEAP、英検など純ジャパ試験。さらにセンター、英検2技能R、Lの比較・調整の具体的方法を教えてください。	E)その他
103	羽藤	「大学が求める英語の能力」について	ありがとうございます。宮本先生のご発表において「各大学が求める英語の能力」等を明示しようというご提案がありました。<質問>先生のお考えになる「大学が求める英語の能力」についてご教示ください。	C)民間教育関係
104	羽藤	Speaking入試の効果について	Speaking入試を課してとった大学生は、どう他の通常の英語テストをへた学生とは違いますか？英語のクラスを課しておられるのでしょうか？	-
105	羽藤	正当なスコア対照につきまして	(宮本先生のおっしゃるように、今からはもう戻れないとするならば)スコアを(少しでも)正当にすることが必要と思っています。羽藤先生は、現在の対照表はどう見られておられますか。また、どのようにすれば、少しでも正当になりますでしょうか。	C)民間教育関係
106	羽藤	賛同します	質問ではありませんが、言いたいことを、教えてきたことをキッパリとお話いただき、スカッとしました。ありがとうございました。一度ぜひスピーキングテストの実際を見学したいものです。	C)民間教育関係,D)学生
107	羽藤	「オルタナティブの提案」について	資料P68を詳しくご説明下さるとありがたいのですが。	A)大学教職員

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
108	羽藤	おおいに納得しました	問題点の指摘に共感です！！	A)大学教職員
109	羽藤	スコア対照	日本人は40年あまり理科の4科目、社会の4科目等の比較を受け入れて来ました。英語の外部テストの差異など、これに比べると全く無視出来るものではないでしょうか？	-
110	羽藤	ライティングテストについて	スピーキングテストの実態がたいへんよく分かりました。ありがとうございました。ライティング（自由英作文、エッセイテスト）についてもご研究されていることなどあるのでしょうか？（もしあればポイントをご教示下さい。）	C)民間教育関係
111	羽藤	京都工芸繊維大学の一般選抜の英語入試問題について	共通テストの英語が廃止されたら、個別試験の英語の出題内容は変えないといけないと思われませんか？	C)民間教育関係
112	羽藤	-	1) なぜ「話す力」で入試の可否を決める必要がありますか？ 2) 「話す力」をパソコンやタブレットで測定できると本当に考えておられますか？（社会言語的なコンテキストの視点から）	A)大学教職員
113	羽藤	新たな検定試験の開発体制構築への道筋について	日本では、資質・能力に対応したテストの開発体制、それを支える研究や技術開発が充分でない、という議論が共通一次試験時代からなされてきたと理解しています。他教科はともかく、英語四技能についてそれが如実に響いたことが今回の苦しまぎれの政策を生み出していると考えられます。そうすると、現実的なスタートとしては、宮本氏の提案（2）4技能の定着から入ることが良いと思いますが、そこからどう統一的な試験を開発するか、研究上での取り組むべき大きな課題や指針があればお伺いしたいです。	D)学生
114	羽藤	センター試験の有用性（国公立入試における一次試験の必要性）	大学のアドミッションポリシーに沿って、大学がオートノミーを持って、学性の選抜をするのであれば、そもそも一次試験で英語4技能を測る必要はあると思われませんか？	-
115	羽藤	CEFR対照表について	昨年途中で対照スコアが変更されたテストがあり、非常に困惑している。認定テスト採用にむけた小細工のように思うが、先生のご意見は？	A)大学教職員
116	羽藤	愚策との批評を尊びますが、あなたの対案は？	厳格な適当なご主張であるが、玉虫色の問題提起ばかりで実質的に導くべき、日本の学生を不幸にしない入試改革を何によって実現するか、具体的で実施可能なコストも含めた対案をご明示ください。入試の公平性担保は重要である。その前に我々が導くべき責務は何か？大学教育の質的荒廃を問題視すべきではないか。実に建前論ばかりの主張で、辟易する。 ※教育の質保証が枠組み重視か実質重視かよく考えよ。	A)大学教職員
117	羽藤	日本言語テスト学会（JLTA）の提言について	2017年にJLTAが大学入学希望者学力評価について提言を行ったが、言語テストの専門家の提言にも関わらず、あまり注目されているようには思えません。このことに関してどのようにお考えかお聞かせいただけないのでしょうか。	D)学生
118	羽藤	スピーキングテストの採点について	スピーキングテストの採点者には、どのような条件が求められるか。また、トレーニング期間はどれくらい要するか。	D)学生
119	阿部	4技能の「均等」について	4技能の「均等」や「バランス」という言葉は、テストングや指導においてよく耳にする言葉だと思いますが、何に対してのバランスなのか自分も気になっていました。そこで質問なのですが、この「均等」や「バランス」の解釈が異なっている例があれば教えていただきたいです。	D)学生

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
120	阿部	東大の認定試験の活用について	阿部先生は個人的にどう活用すれば良いと思われますか。	E)その他
121	阿部	生徒たちは、どうすればスピーキング力を高める努力をしましょう	(先日、テレビで非英語圏の人たちが、英語で(つたないながらも)自分の考えを話している場面を目にして、日本はどうか？と考えたのですが) これからの子どもたちは、実際に英語を使って、いろいろな国の人たちと関わっていく必要はあると思います。ですが、入試に課されなければ「話す」ことに取り組むこともしないのではないかと気がします。	E)その他
122	阿部	テストとスキルの関係について	スピーキングテストを導入するとかえってスピーキングスキルは下がるとおっしゃいましたが、その論拠、証拠はありますか？単なる推測・想像ですか？	A)大学教職員
123	阿部	テクノロジーの活用について そもそも大学受験に英語は必要なのか	民間で英語を教えている者です。今日の話からは逸脱します。英語教育論争について、社会状況globalの要請に応じるとはよく論じられますが、AIが進歩する時代との親和性も考えるべきだろうと思います。つまり、上位の場合、試験に辞書、自動翻訳マシンを持ち込んでもよいだろうと私は考えていて、そうであっても差がつく入試をつくれればよいだろう。A1A2レベルならば翻訳マシンを使う練習をした方がむしろ現実的に有効かと思っています。 英語よりも国語、思考力を重視	C)民間教育関係
124	阿部	スイッチ切替えとコンテキスト問題	流れ、コンテキスト、物語を把握する能力を高めることがコミュニケーション、スピーキング力を高めるとのことですが、具体的にどんなトレーニングが考えられますか？	A)大学教職員,E)その他
125	阿部	日本人の英語力について	全員が同じような能力を身につける必要はあると思いますか？	A)大学教職員
126	阿部	「オーラルはまず日本語から」について (質問というより意見です)	「オーラルはまず日本語から」(オーラルだけではありません)に賛成します。スピーキングという行為を発話という過程だけにしぼり込んでしまうことは大変危険です。阿部さんは「あいづちの打ち方」「コンテキストの影響」などをあげ、スピーキング行為は「デリケートな」ものであると指摘されました。おっしゃるとおりで、こうしたことが問題にならないのはコミュニケーションを「ことばのキャッチボール」という見える部分だけに矮小化していることの結末です。言語や言語使用の研究者の意見をもっと尊重すべきです。	A)大学教職員
127	阿部	スピーキングテストについて	阿部先生的に、よりよいスピーキングテストのあり方は、どのようなものですか。	B)小中高教職員
128	阿部	AIとスピーキング能力	何のためにスピーキング能力を上げるのでしょうか。5年後にはAIによって、スピーキング、リスニング能力は問われなくなるのでは？つまり、なぜスピーキング能力を得点化、差別化するのでしょうか。	B)小中高教職員
129	阿部	スピーキングテスト(大学入試)について	スピーキングテストについては、阿部先生がご著書で言われている通り録音形式にし、各大学でスピーキングテストが必要な大学だけが、その大学教員が採点し、入試の可否に使ったらいいのではないのでしょうか？(→皮肉です。センター廃止反対です。)	-

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
130	阿部	障害を持つ生徒への対応について	障害を持つ人への合理的配慮が求められている。民間テストで盲ろう学校の生徒へきちんと配慮されるか心配している。阿部先生のように問題点として発信している人が少ないことが問題と思っている。 障害を持った生徒の未来を閉ざす方向に向かっていないか、ご指摘いただき、説明をお願いします。	B) 中小高 教職員 (公立特別支援学 校長)
131	阿部	テストの過去問	「入試テストの過去問は全て無償で公開されるべき」と当たり前のように考える理由は？これが公平性に関わる問題と認識されるのは、何が前提なのか？その前提は正しいのか？受け入れるべき前提なのか（避けられない現実なのか？）	C) 民間教 育関係
132	阿部	ライティングの力をいかに伸ばし、評価すべきか	スピーキングテストに対する問題提起を興味深く聞きました。やはり日本の英語教育の課題で、「4技能」に含まれるライティングの能力はどのように伸ばし、大学入試で評価すべきだとお考えですか。	E) その他
133	阿部	録音式テストについて	GTECやTOEFLなど録音式（面接式でない形）でのspeakingテストの妥当性について、お考えがあれば、お答えいただければと思います。	B) 中小高 教職員
134	阿部	発話障害の方への対応について	発話に障害をもつ方もいるのに、一律にスピーキングテストを課すのは好ましくないというお考えだったが、では、識字（読み書き）障害の方に配慮してリーディングあるいはライティングテストを一律に課している現状を改めるべきだとお考えでしょうか。（難癖をつけているのではなく、これは別個のレベルで配慮すべきことがらではないでしょうか。現在、リスニングテストについて聴覚障害の方に配慮がなされているように）	A) 大学教 職員
135	阿部	英語力全般の向上について	実務的に使える英語力、（先程の会場に流した英語の理解等）を身に付けるには、どのような訓練（時間、投資（経済的）等も含め）が必要でしょうか？	C) 民間教 育関係
136	阿部	4技能の割合はどのくらいが妥当だとお考えか？	どのような比率がよいか？	B) 中小高 教職員
137	阿部	-	東大は、二次試験で英語でinterview testを実施すべきだ。	E) その他
138	阿部	大学に入ってから求められる英語力について	英語は一生かけて伸ばしていくもの。大学入試で使う民間テストは、最低限のクオリティを見るためだけに限定すべき。あとは各大学求めるレベルが異なるので各大学及び学部独自で問題を作成すべきというのが私見。 自分が大学に入る前と後では、入試時の英語力がマックス。入学後の英語力をキープするための授業を大学でしているのか？	E) その他
139	阿部	批判対象たる人物たちとの意見交換	生産的な議論のためには、基礎的な事実や概念についての共通認識が重要だと思われる。しかるに今日の講演でも「4技能均等」の意味についての疑問が表明されていたが、このあたりについて安河内氏らの主要人物に対する問い合わせはしていないのか？していない場合、それでよいと思うか？	E) その他
140	宮本	高校の英語教育について	今回の入試制度改革の狙いのひとつは、高校の教育を変えることもあるのではないのでしょうか。高校教育が変質するのは当然です。これまでの高校教育を変えなければいけないのに、現在も訳読中心の授業しかできない教員（特に公立高校の教員）が多いようです。こうした点をどの様に変えるべきか、高校教員の立場からどの様な議論があるのでしょうか。	A) 大学教 職員

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
141	宮本	英語教育が変質してしまう懸念について	高校における英語教育が大変窮屈になるというが、元々、入試偏重の教育をしているのが実態で、それが今回の入試改革につながる課題を生んでいるのだから、入試が変わったら英語4技能を育成するようになってむしろ良くなるのではないか？	B)小中高 教職員
142	宮本	高校教育のあり方について	今回は、英語教育に関するご発言でしたが、高校教育は現状のままで十分だとお考えですか？	C)民間教育 関係
143	宮本	大学の求めるハードルについて	ハードルが低いと、結局4技能向上にむけて授業改革がなされないのではという懸念については、いかがお考えでしょうか。	B)小中高 教職員
144	宮本	大学入試で4技能を評価することに、校長・教員から反対の声が聞かれないことについて	私は、都立高で英語を教えています。英語を話すことに長けている先生方が、言語習得論を学んでいるわけではありません。現場で、正しく正確に言語習得論を学んでいる先生方の声を、しっかり伝えてください。羽藤先生や阿部先生が言われるように、民間の検定試験導入は、懸念材料が多く、現行のままが生徒にとってふさわしいものだと思います。	B)小中高 教職員
145	宮本	高校の英語教育について	民間検定試験を導入した場合、高校の授業が検定対策となってしまう懸念があるとおっしゃられました。検定試験対策と現行の高校の英語授業の違いは何ですか？	-
146	宮本	生徒レベルでの入試改革への反応について	先生のご講演で、現場の校長先生、教員の方々の入試改革に対する声を知ることができ、大変参考になりましたが、生徒さん方はどのように考えているのでしょうか？先生の高校の生徒さんだけでもかまいませんので教えていただきたいです。	D)学生
147	宮本	英語力について	高校が育てたい育てるべき英語力とは何かききたい。	-
148	宮本	高校での4技能教育の現状について	従来の文法や単語・熟語といった知識習得（リーディング）が、ベースにあるべきですか。現状、Speakingに対応する時間は、増加傾向にあるのでしょうか。（一週間の中で、どのくらい割いているのか）	C)民間教育 関係
149	宮本	検定のための授業について	私が学生の時代も、高校3年時は2月までセンターの過去問、2月以降は授業もなく、個人で二次の問題を解くというものでした。むしろ検定ありきの授業計画というものを考えるというのは、どうでしょうか。	D)学生
150	宮本	民間の資格・検定について	大学入試に使用するとしたら、「いつまでのスコアを用いるべきか」「複数回受験について」などどう考えているかを聞きたい。	B)小中高 教職員
151	宮本	高校の英語教育の変化の必要性について	お話を伺うと、高校の英語教育を変えたくないという気持ちが強く感じられました。そもそも今回の変更は、高校の英語教育はこのままではダメだという所から始まっています。先生は、英語教育の変化の必要性は感じられていますか？そうだとしたら、どのように変えていくべきだと思われますか？	E)その他
152	宮本	大学入学者選抜における英語試験について	大賛成です。今回の改革議論では大学側の理論ばかりで高校側の意見が全く反映されていないように感じます。是非、今度も発信し続けてください。	B)小中高 教職員
153	宮本	高校の年間行事について 組めなくなるのではないですか？	高体連、高文連等の動きについても、ぜひ、この場でご発言ください。何も具体的には動いていませんよね？	B)小中高 教職員

No.	どなたへの 質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
154	宮本	現在の民間試験の受験状況について	高校によって、英検の受験状況が違うように感じられます。 例) 都内私立女子高(高1でほとんど2級を取得) 神奈川私立男子、女子(あまりおらず) 高校毎、地域毎、公立私立といったところで、そういった統計等、取られたことがありますでしょうか？ ご講演ありがとうございました。	C)民間教育関係
155	宮本	高校での4技能育成の方策について	山田入試室長の講演では、入試の影響力・パフォーマンステストの実施状況が学年を追うごとに低下しているとの指摘がありました。 宮本先生は「全体の方向性への理解は進んでいる」とおっしゃっていましたが、民間試験が導入されず、現状の試験の枠組みがそのまま続いた場合、過度な入試対策に走らず4技能をバランス良く身に着ける高校教育をどのように実現させるのでしょうか。	D)学生
156	宮本	高等学校の教育におけるスピーキング指導について	今後、英語4技能育成のための環境設定において、一番の課題とは何でしょうか。また、そのために政策決定者へ要請したい投資(教員への人件費や研修費、または外国人教員など)は何でしょうか。	D)学生
157	羽藤、阿部	-	大学の個別学力試験(記述問題)はどのように公平性を担保して、精度の高い採点をされているのかお聞きしたいです。	E)その他
158	羽藤、阿部	オルタナティブについて	もしご自身が国策を決める立場に(助言ができる立場に)いらっしゃるとすれば、今後10年でセンター試験同様の共通テストをずっとつづけるのか、それ以外のやり方を考えるのかを教えてください。(テスト以外の高大接続全般)	A)大学教職員
159	羽藤、宮本	外部テストと従来のテストの扱いについて	都立高校に勤務しております。昨年、都の政策で2学年全員に4技能外部テストを受けさせました(受験料は都負担です)。結果は、普段の定期考査や模試の成績とメンバー層が大きく異なるものでした。どちらが真の英語力かでなく選択制など、どちらも生かす方法を考えるべきではないでしょうか。	B)小中高教職員
160	羽藤、阿部	大学で求められるスピーキング力について	大学入学時にはかかるべきスピーキング力、および他のリーディング・リスニング・ライティングとのバランスについてのお考えをお聞かせ下さい。	C)民間教育関係
161	羽藤、阿部	リスニング力を伸ばすのは、大学でやれませんか	英語の読解力、リスニング力、ライティング力が現行のセンターテストで相当な点を取れる学生であるなら、大学の英語の授業でリスニング力養成を特化して行なえば、1年位で産業界が望む程度の力のはつくのではないのでしょうか。大学入試ではスピーキングテストは無しにできませんか。	B)小中高教職員
162	阿部、宮本	4技能神話	諸悪の根源は「4技能を均等に」では？これを指導要領から削除することの賛否を。	E)その他
163	羽藤、宮本	そもそも大学入試にスピーキングテストは必要？	「言語理解が言語表現に必ず先行し、それも大きく先行する」という大原則を考えると、高校までには前者(言語理解)を養成することに注力し、言語表現については大学での教育にゆだねるという考え方をしたほうがよいのではないかと思います。	C)民間教育関係

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
164	羽藤, 宮本	-	質問というよりも情報提供です。本学では、本学への志願者、合格者が多い高校を対象に2021年度入試についてのアンケート調査を実施しています。まだ回答期間が終わっていないので中間集計ですが、外部試験を一般選抜の全受験者に課するという国立大学協会の「基本方針」に賛成という回答は1割もありません。高校側の事情を鑑みると、国大協「基本方針」を墨守することが正しいのか、大いに躊躇せざるを得ません。苦悩しています。このような貴重な機会を提供して下さった東京大学には、是非、高い見識で早い御決断を願います。	A)大学教職員
165	阿部, 宮本	教育者の無責任さについて	安あがりて完全な公平・公正な試験がお望みなら、くじでも使えばよい。高校・大学がきちんと学生を育てる役割を果たしているのであれば、それで何の問題もないはずです。高校・大学が十分な役割を果たさず、選抜に質の担保を頼っているせいで、このような面倒な議論があるというのに、したり顔で民間批判とは随分よいご身分だと思いますが、教育者として何か恥じる部分はありますか？	E)その他
166	羽藤, 阿部, 宮本	認定試験の使い方	・認定試験を導入するとして、もっとも実害がなく、もっとも有効に使うためには、どのような使い方がよいか？ ・障害を持った受験生への対応としては何が適切か？	A)大学教職員
167	羽藤, 阿部, 宮本	-	スピーキングとライティングは、ほぼ同じ力ではないかと思う。スピーキングの判定に技術的な問題があるのであれば、ライティングの測定だけでも十分ではないか？	C)民間教育関係
168	羽藤, 阿部, 宮本	御三方の問題提起に大賛同です！！	時間上、お話しいただいていない改善案（策）をぜひお聞かせ下さい。	A)大学教職員
169	-	入試における外部検定試験活用への高校の対応について	入試への外部検定試験導入が実施された場合の不安、懸念がたくさんあることはわかるが、現中3が高3になる時からもうスタートしてしまう。待たなしの中、現場では対応が迫られるが、検定対策といっても複数（10種以上）のものすべてに対して行うことは不可能。かといって、これだけ目的も形式もちがうテストの中で何を基準にどのテストをターゲットにすればいいのかもわからない。外部試験にふりまわされず、どのテストにも対応できるような4技能の基本線を鍛えるといっても、それが何かも示されていない。こんな中で、現場（高校）の教員はどんな対策を生徒にできるのか、わかったら教えて下さい。	B)小中高教職員
170	-	AI技術によるスピーキングテスト評価法の研究開発の可能性は？	日本の英語教育での問題は「ジャパニーズイングリッシュ」からの脱却と考えるが、これは発音のネイティブ性を重視したスピーキングテストと考えます。これを客観的に評価できるシステムを、AI技術を用いて開発してゆくことは考えていないか？ AI技術は、日々進歩しており人による採点にとって替る日が近いと思っていますが、こういう研究開発を行う考えはないか？（AI技術による評価は人件費はほとんどかからない！）	E)その他
171	-	そもそもなぜ、4技能なんですか？	みなさんのお考えが知りたいです。	A)大学教職員
172	どなたでも	50数万人を対象とする共通テストのあり方をどう考えるか？	全般的な問題 極めて学力層の幅広い受験者50数万人を識別しなければならない共通テストと個別選抜テストの役割分担のあり方について、どう思うか？	E)その他

以上 172件

フロアからの質問への紙上回答

シンポジウムにおけるフロアからの質問（p. 101～p. 117に一覧表掲載）に対して、4人の登壇者から、シンポジウム終了後に回答が寄せられましたので、以下に掲載します。

1. 山田泰造 文部科学省高等教育局大学振興課入試室長

多くのご質問、ご意見をいただきましたので、その内容に応じてお答えいたします。

Q 1：なぜ4技能の評価が必要なのか。センター試験のままでいいのではないか。

A：英語や日本語を含め、言語は4技能（5領域）からなるもので、それらを総合的に学ぶことが、言語の学習であり、現行の学習指導要領でも4技能の総合的な修得を求めています。現在の大学入試センター試験も様々な工夫を蓄積して出題されていますが、書く・話すを直接問うことができないことが課題だと考えています。

Q 2：CEFRが選抜に活用することを目的としたものでなく、また、1段階が大きすぎるため、入試に使いにくい。

A：ご指摘のとおり、CEFRは入試のような選抜で用いるために作られたものではありません。また、A1からC2までと段階の数も少なく、受検生の多くがいくつかの段階に集中してしまう懸念も指摘されています。一方で、国際的に認知された指標であることも確かであり、試験成績の対照関係をCEFRを軸としてご提供したいと考えています。大学によっては、独自の対照表を作成しているところや、出願資格等として活用しているところもありますので、参考にいただき、活用方法をご検討いただければありがたいです。

Q 3：民間の資格・検定試験は、透明性やセキュリティにおいて課題があり、入試として適当でない。

A：対象となる資格・検定試験は、情報公開や、第三者の入った評価が行われているもののみとなります。各試験実施団体は、それぞれの信頼性の確保のため、適正な試験の実施に取り組まれているものと考えていますが、仮に要件に照らして不十分な点が明らかになり、改善がなされないような場合があれば、対象から外すこともありえます。

Q 4：受検生にさらなる負担を強いるものであり、公費で負担軽減をすべきではないか。

A：文部科学省ではこれまで就学支援金や奨学金給付金など、高校生の経済的な負担軽減に取り組んできました。また、昨年12月に新たな経済政策パッケージを決定し、低所

得者層のための給付型奨学金の中で大学等の受検料も計上することとなっています。英語の資格・検定試験は、受検生が受益者である側面もありますが、引き続き、負担の軽減のため取り組んでまいります。

Q5：高校の英語の授業が資格・検定試験の対策になってしまうのではないかと。

A：今の高校の英語の授業では、話すこと・書くことの評価が十分行われていません（特に書く・話すことそのものを目的とする英語表現Ⅰ・Ⅱや、主に高校3年生で学ぶコミュニケーション英語Ⅲ）。むしろ現在、高校の授業において、「大学入試の対策」が重視されすぎており、本来必要な英語4技能の総合的な修得のための取組がしわ寄せを受けているのではないかと懸念しています。

Q6：各大学の個別試験の自主性・独自性は保証されるのか。

A：大学入試は、各大学に入学する学生を決めるものであり、個別選抜や二次試験を含め、各大学のアドミッション・ポリシーに応じて、各大学のご判断で実施いただくべきものです。文部科学省では、英語の4技能評価が重要であると考えていますから、大学や大学団体にその活用・実施を検討いただくようお願いしているところです。

Q7：公平性の観点からは、大学入試センターや国立大学協会などが、統一の4技能試験を実施すべきではないかと。

A：現在大学入試センター試験で実施されているように、同じ問題で一斉に試験を実施する方法は、入試において効果的・効率的な方法です。一方で、英語4技能、特にスピーキングのテストを、50万人以上を対象に一斉に実施することは、面接の方法であっても、機器を活用した方法であっても、現状では困難です。そのため、既に大学入試で活用されている、民間の英語4技能評価の結果を各大学に電子データで提供することにより、その活用の促進を図ることとしました。

2. 羽藤由美 京都工芸繊維大学教授

質問への回答（羽藤）

・ 質問103、112(1)、114、160、161、163、167、171への回答：

外国語学習の目的は多様です。しかし、「使えるようになること」だけについて言うなら、対象言語を用いてメッセージをやり取りすること（言語を本来の用途で使うこと）を通してしか、その能力を育むことはできません。習得を推し進めるのは主にインプット（読んだり聴いたりすること）ですが、アウトプットも重要な役割を果たします。言語の形式（文法や語彙など）に関する知識を明示的に教えることにもそれなりの効果はありますが、十分なインプットとアウトプットがあることが前提になります。こ

のような外国語習得のメカニズムの大筋は、これまでの実証研究によってほぼ解明されたと言ってよいと思います。

日本では英語を使う機会が少ないことや、授業時間が限られていることなどを理由に、「読み書き（あるいは言語理解）重視」を主張する方がたくさんおられます。しかし、どのような学習環境であろうと、もし「使えるようになること」を目的とするのなら、動かしがたい習得のメカニズムを促していくしか方法はありません。

このような理由で私は、基礎段階（たとえば、CEFRのA1、A2レベル）の生徒の指導では、4技能を統合して扱うべきだと考えています。その結果、生徒の中で4技能がどのようなバランスで育つかは、多様な要因が交錯して決まります。したがって、「4技能の均衡育成」などという根拠希薄な指導目標を掲げることには賛成できません。また、「どうすれば、～できるようになるか」も、「与えられた時間内に、～できるようになるか」も分からないのに、can-doリストを学習目標にすることも馬鹿げていると思います。

つまり大前提は、外国語を使う能力は、動かしがたい習得のメカニズムに則って生徒の中で育つものであるということです。したがって、外国語の教育や教師の役割は、少なくとも初級段階では、狭義の教える（知識を授ける）ことではなく、習得メカニズムを促す環境を整えることです。今後もし、その方向に向けて指導法の改善を進めることができれば、近い将来、ある程度の数の生徒が高校卒業段階までに日常的な情報のやりとりができるくらいになるかもしれません。また、優秀な生徒は中級（たとえば、CEFRのB1やB2の下の方のレベル）に達するかもしれません。

もし そうなれば、後者タイプの生徒を受け入れる大学は、それぞれのアドミッション・ポリシーに応じた入学者選抜や各分野のニーズ（たとえば、文献購読や「グローバル人材」育成など）に焦点をあてた英語教育をできるようになるでしょう。そういう意味で私は、「入試」より「教育」の改善を、「大学入試」より「高校入試」の4技能化を先行すべきだと考えています。

日本では、指導方法とその成果に関して行なうべき実証研究が行われていません。そのため、仮定の話が多くなり恐縮ですが、外国語習得には動かしがたいメカニズムがあり、それを前提に教育や入試を考える必要があるということを強調したいと思いました。また、「4技能」への賛否については、「目標」「指導」「成果（習得）」を混同することなく、また、生徒の習得レベルを考慮しつつ、丁寧な議論が必要であると思います。さらに、スピーキングは、リーディングやライティングと同等のコミュニケーション・モードに過ぎず（特別なコミュニケーション・モードではなく）、特別に思われるとしたら、それはこれまでの教育のあり方が原因であることも指摘しておきたいと思いました。

・ 質問 104 への回答：

京都工芸繊維大学の2018年度A0（ダヴィンチ）入試「グローバル枠」として、1次選考を通った10名がスピーキングテストを受けただけです。何ひとつ一般化できること

はありません。この一例だけをとって言うなら、十分な受験勉強をしていない（一般入試では合格しないかもしれない）、個性豊かでポテンシャルの高そうな受験者（たとえば、帰国子女や海外からの志願者、社会人の志願者）がほとんどで、入試を変えれば合格者が変わることや、入試を工夫することで入学者の多様性を高められることを実感しました。しかし、最低でも4年後を見なければ、本来の成果は分かりません。

- ・ 質問 105、 115、 166 への回答：

欺瞞に満ちたスコア対応表を「どうすれば（少しでも）正当にできるか」と問われても困ります。コストやリスクを考慮せずに言うなら、テストの数を減らして、CEFRを挟まない対応付けを試みることでしょう。しかし、対応表を破棄するのが最も正しいと思います。

- ・ 質問 109 への回答：

論点がずれているように思われます。これから行われようとしているのは、10 以上の業者が作った、扱う題材も難易度も異なる「生物」のテスト（あるものは分子・遺伝子レベルの生命現象に焦点をあて、あるものは日本のバイオームだけを扱い...といったテスト群）のスコアを対応づけて、「生物」の得点を炙り出すことです。

- ・ 質問 110 への回答：

ライティングについても、「リングフランカとしての英語(ELF)」の理念に基づくテストを開発中で、今のところのサンプルテストを公開しています。

(http://ac.web.kit.ac.jp/02/nyushi/gakubu/ao_global_about.html)

実は、CBTシステムも完成しているのですが、今年度のA0入試では使いませんでした。辞書や予測変換機能を使うことなども考慮しながら、パイロットテストを重ね、長い目で準備を進めたいと思っています。

- ・ 質問 111 への回答：

まだ、そこまで考えが及んでいませんが、個別試験の内容はあくまでも共通テストと切り離して、各大学の裁量に任されるべきものだと思います。問題の内容を変えるよりは、配点で調整する方が健全に思われます。

- ・ 質問 112(2)への回答：

対面式のスピーキングテストで行われるのも、面接者のコントロールの下で進められる擬似コミュニケーションです。また、面接者の技術や性格によっては、受験者がCBT以上の精神的ストレスを感じる場合もあります。完全なテストはありませんから、各種の条件を考慮して実現可能な中で最善の方法を捜すしかありません。

- ・ 質問 113 への回答：

ご指摘のとおりだと思います。民間テストのパフォーマンスを査察するといっても、そのノウハウから研究を始めなければなりません。4 技能テストの一本化に向けた最も大きな課題は、やはり、50 万人強の受験者に公平な受験環境をどう提供するかだと思います。問題作成や採点にかかわる問題は、教員や研究者の知識・経験を結集すれば、容易に解決できると思います。
- ・ 質問 116、168 への回答：

具体的な改善策については、講演の後の討論で少し時間を頂いたので、討論の「書き起こし」をご参照ください。質問 116 の「大学教育の質的荒廃」とのお叱りについては、具体的に何を指されているのかが分かれば、ここで議論させていただけたのにと残念です。
- ・ 質問 117 への回答：

早い時期に公表された日本言語テスト学会（J L T A）の提言こそ、すべてを言いえており、もっと尊重されるべきであると思います。外国語教育関連では、政治的にナイーブな学会が多い中での英断に敬意を表します。一方で、本気で文科省や国大協あるいは世論を動かそうとするなら、大学・高校の教員の決起を促すべく、もっと執拗かつ果敢に運動していただきたかったとも思います。
- ・ 質問 118 への回答：

採点者に必要な資質については色々な研究がされていますが、私たちのテストに参加しているのは毎回 20 名程度なので、今とここで明確な結論を導くことはできません。採点者訓練は、慣れている採点者に対してでも、毎回のテストの 1 ヶ月以上前から開始し、当該テストに対するパイロット受験者の回答音声を用いて訓練をします。一定の基準を満たしていることを確認してから、実際の採点にあたってもらいますが、自己流の採点基準が優先されていることが分かり、採点の途中で指導を入れることもあります。採点者は、疑問や不安な点について、オンラインで上級採点者に相談しながら採点を進めます。
- ・ 質問 157 への回答：

配点の大きい問題については、当該問題用のルーブリックを作って、2 人以上の採点者が並行採点します。配点が小さく並行採点しない問題については、必ず 1 人の採点者が同じ課程の（競争相手となる）全受験者の回答を通して採点します。自分の採点箇所は他の問題を採点する採点者の目に触れるので、いい加減な採点はできません。
- ・ 質問 159 への回答：

ご指摘のとおりです。4 技能の民間テストを導入すると、合格者の入れ替わりが起きます（これまでの入試で通った人が落ち、落ちた人が通ります）。その入れ替わりを肯定で

きるような教育を日頃、学校でできているのでしょうか。現状では、通常の高校教育で B2 レベル以上の能力を育むことはできないように思われます。つまり、塾・英会話学校や海外経験などに出費できる家庭の子供に有利な入学者の入れ替わりが起こります。教育の機会均等を国が直接的に脅かすなんて、あってはならないことです。声をあげましょう！

・ 質問 164 への回答：

実施されているアンケートの結果を、世の中に広く知れ渡るような形で、公表して下さるようお願いいたします。

・ 質問 169 への回答：

戸惑われるのが当然だと思います。翻弄される先生方の声を集めて、文科省はもちろん、新聞などを通して、社会に訴えかけていただきたいです。(質問への答えがなくて申し訳ありません)。

3. 阿部公彦 東京大学准教授

① 「改善策は?」「どうしたらいいか?」(121、124、168 ほか) との質問が多数ありました。「スピーキングテスト導入でスピーキング力が落ちるのはなぜか?」(122) との質問と合わせて答えます。

まずスピーキングテストで「スピーキング力が落ちる」理由をざっと箇条書きにします。

- ◇ テストされることによる心理的抵抗感の増加
- ◇ (業者試験を導入した場合の) 試験対策にとられる時間とエネルギーで、基礎訓練に割く時間が減る。
- ◇ テスト対策に明け暮れることで、「そもそも英語でやり取りするとはどういうことか?」という視点が消え失せ、「スピーキングとはこんなものだ」という誤ったシグナルを送ってしまう。→「実際の英語」と称した、きわめて限定的な状況設定やテスト形式を「目標」に設定することで、英語学習が貧しいものになる。
- ◇ 今回のスピーキング導入とセットで「4技能」とか「4つを均等に」といった無内容な「キラキラレトリック」が一人歩きし、生徒の方は何を勉強したらいいのかわからなくなる。「均等ルール」に拘束される?などの疑念。
- ◇ またスピーキング導入をとなえる人がしばしば勧める「おおまかな意味がわかればいい」「文法なんかいらない」といった「その場で何とかなればいい」のために、英語学習の肝になる「意味の吟味」「肯定・否定の方向の把握」といったことがおろそかになる。
- ◇ 「これを言おう」「もっとやり取りができるようになりたい」というモチベーション

がない人に無理矢理スピーキングをやらせることで、「くだらない」「やりたくない」といった気持を芽生えさせる。スピーキング練習でありがちな「明るく楽しく」のイデオロギーについていけない生徒が疎外される。

- ◇ そもそもスピーキング能力の欠如は、日本語でのやり取りの欠如から発しているのに、まるで「英語科目」の責任であるかのような誤解を生み、根本的な問題点を隠蔽して、結果的にその解決の邪魔をする。

つづいて、上記のような結果を避けるためにはどうしたらいいか？です。（詳細はシンポの原稿もご参照ください）

- ◇ まず日本語で知的なやり取りをする練習をする。
読み書き（とくに読書）と連動させて考えさせながら討論させる。（形式的なディベートごっこは不可）
- ◇ スピーキングは入学試験に出さない。ただし授業などでは発声の基礎は教えるべきだし、リスニング、リーディングなどとの連携も考慮する。またレベルやモチベーションに応じて、さらにやり取りの練習ができる場所を課外などに設置する。（ESS など学生ボランティアやシニアも使う？日本人同士でも練習にはなる）
- ◇ 何と言っても基礎はリスニングを通したリズムの体得なので、ここに重心を置く。ただし、授業時間をリスニングに使うのはもったいないので、家庭学習でたとえば「毎日少なくとも10分集中して英語を聞く」といった目標をたて、またそのための宿題を出す。
- ◇ 「4技能均等」とか「コミュニケーション」のような内容のないキャッチフレーズは廃止し、とにかく英語の体幹部分を鍛えることに注力する。「仕事で使える英語」で決定的に大事なものは、語彙力と構文把握の基礎。とくに挿入や倒置の扱いはきっちり教え、体得してもらおう。
- ◇ また母国語と同じように、形と意味とを連動させた形で英語と接するためには（つまり、「すっと頭に入る」「自然とことばが出てくる」感覚）、英語ならではの言語の運動感覚に慣れる必要がある。これもリスニングからはじめて、文章読解などを通して学ぶ。とにかくインプットが足りない。
- ◇ コンテキスト把握の練習としては、音声の一部を聞かせて、その背景やコンテキストを想像させた上で問いを立てるとか、自由作文をさせるなど。また雑音の大きい中で辛うじて聴ける音声から、内容を把握させるなど。
- あるいは、同じ文を異なったイントネーション等で読んだ複数の音声を聞かせ、文脈にあったものを選択させる、という問題もいい。こうした練習を通し、口頭のやり取りではいかに「口調」「情緒」が大事かを認識させることができる。
- 基本的にはアクセントの体得が重要。（こちらの映像もご参照を：
<https://www.youtube.com/watch?v=dn-UgnEzP2o&v1=ja>）

- ② 「スピーキングの障害に対する対応はリスニングと同じようにやれば十分では？ 識字障害も考えれば、リーディングやライティングも廃止しなければならないことにならない？ (134)」という質問はとても興味深いものです。お答えします。

まず、聴覚障害の場合は、かなり明瞭に数値化されうるので、さまざまなグレーゾーンの伴う発声の障害とは区別する必要があります。ただし、読解や作文の背後にある「障害」はたしかにグレーゾーンだらけという点は賛成します。学習障害や読解の障害、執筆障害についてはその認知が大幅に遅れています。将来、その点も考慮されるべきだと思います。

ただ、少し大きな話になりますが、私たちの近代文化は、読解や作文の困難は「障害」とは見なさず、「能力の欠如」と見なすことで成り立ってきました。これに対し、少なくとも日本では（そして西洋でもある程度）口頭表現の困難は「能力の欠如」とはみなされず、「個性」とか「受け身性」「shyness」として許容されてきました。

そうした考え方そのものに異議申し立てをするのは「あり」だと思います。いわば近代的な「知」の形への反逆です。しかし、そうであるなら、それが引き起こす副作用や帰結もきちんと考慮に入れるべきです（深い考察がされなくなる、時間のかかる論理的展開ができなくなる、文字データを通した情報伝達おろそかになる、など）。何より、そこが論点だという「認識」が必要です。現状とりざたされているのは、「オリンピックで道案内」程度のスピーキング能力ではないのでしょうか？ほんとうに、それと引き替えに読解を土台にした文化を失ってもいいのか？ということです。

4. 宮本久也 東京都立西高等学校長 全国高等学校長協会長

○ ご質問に対するお答え

1 英語教育改革に後ろ向きではないかというご意見に対して

- ・ 講演の冒頭でもお話したように、英語の 4 技能を育成することは現行の学習指導要領にも書かれています。本校でもコミュニケーション活動を重視した英語の授業を行っていますし、スピーキングテストや英語ディベートなども既に実施するなど公立高校の中では先進的な取組みを積極的に進めています。また、4 技能を測定する民間検定も 3 年前から導入しています。

4 技能育成の方向性には基本的に賛成していますし、それを大学入試で測ろうということについても反対している訳ではありません。私達高校関係者が懸念しているのは、既存の英語資格検定等を活用するという点についてです。その理由については講演で述べたとおりです。

2 検定対策と現行の高校の英語教育の違いは何かというご質問に対して

- ・ 英語の学習指導要領は、数学や理科、地歴、公民等のように学習すべき内容が細かく定められている訳ではありません。そのため教材の自由度は他の教科や科目より大きく、英語科の教員はそれぞれの学校の生徒に応じた様々な教材を準備して授業を行っています。

しかし、検定が大学入試で大きなウエイトを占めると、教師の創意工夫を凝らした授業より、検定実施業者が作成したテキスト、問題集、CD 等を利用した方が有利になるといったような風潮が強まり、授業が変質する恐れがあると思います。

3 高校の英語の授業改善についてのご質問に対して

- ・ 東京都では 3 年前から若手の教員を中心に毎年英語教員を 3 か月間アメリカ等に派遣し英語教授法を学ばせています。また教職員支援機構が実施する中央研修受講者が講師となり、英語指導法に関する研修を都立高校の英語科教員に悉皆で受講させるなど 指導力の向上に向けた様々な取組みを進めています。また、全校に ALT と JET をそれぞれ配置し、ネイティブスピーカーと TT での授業も数多く行われるようになってきました。こういった取組みにより各校での英語の授業においては 4 技能の育成に向けた改善が進みつつあります。

4 ハードルが低いと英語教育の改善が進まないのではないかとのご意見に対して

- ・ 例えハードルが低くても 4 技能を測定するということになれば、4 技能の育成を意識した英語教育が進められるようになると思います。制度の定着を考えるのであればまずはハードルを低く。ウエイトも小さいところから始めるべきだと思います。

アンケート 集計結果

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」
アンケート

(回収数 205, 回収率 52.2%)

1. 本日のシンポジウムの開催をどのようにして知りましたか

A : ホームページで	34	(16.6%)
B : ツイッター等の SNS で	78	(38.0%)
C : 知人から	49	(23.9%)
D : その他	38	(18.6%)
無回答・無効	6	(2.9%)

2. あなたのご職業等について当てはまるものに○を付けてください。

A : 大学教職員	55	(26.8%)
B : 小中高教職員	51	(24.8%)
C : 民間教育関係	57	(27.8%)
D : 学生	13	(6.3%)
E : その他	24	(11.7%)
無回答・無効	5	(2.4%)

3. 本日のシンポジウムにどれくらい満足しましたか。

A : 満足	129	(62.9%)
B : やや満足	57	(27.8%)
C : どちらでもない	8	(3.9%)
D : やや不満	0	(0.0%)
E : 不満	2	(1.0%)
無回答・無効	9	(2.0%)

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」報告書

発行日：平成 30（2018）年 3 月

発行者：東京大学高大接続研究開発センター

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL:03-5841-2529

Email:koudai.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO